

中京大学大学院心理学研究科  
博士学位請求論文

ロールシャッハ・テストにおける色彩刺激の処理と感情制御  
——プロセスモデルに基づく検討——

Processing of Color stimuli and Emotion Regulation on the Rorschach Inkblot Method:  
Discussions from a Process Model

2019 年 11 月 6 日申請

中京大学大学院心理学研究科臨床・発達心理学専攻  
松田 凌

## 目次

第1章 序論	1
第1節 ロールシャッハ・テスト	1
1. ロールシャッハ・テストとは	1
2. 色彩情動仮説	1
第2節 実証研究	5
1. 医学的診断に基づく実証研究	5
2. 質問紙法に基づく実証研究	7
3. 認知処理の個人差に着目した実証研究	8
4. 先行研究の整理と展望	11
第3節 ロールシャッハ反応の産出過程	12
1. Exner のモデル	12
2. 辻のモデル	13
3. 新たな理論モデル構築の必要性	15
第4節 感情制御のプロセス	16
1. 感情制御のプロセスモデル	16
2. Emotion Regulation Questionnaire	17
3. 感情制御のプロセスモデルと反応産出過程	17
第5節 本論文の目的	19
第2章 情動刺激への注意制御が反応産出過程に与える影響	20
第1節 色彩刺激の処理と情動刺激への注意制御（研究1）	20
1. 目的	20
2. 方法	21
3. 結果	25
4. 考察	27
第2節 インクブロット上の刺激選択と注意制御（研究2）	31
1. 目的	31
2. 方法	31
3. 結果	33



4. 考察	33
第3節 色彩への反応と注意バイアス（研究3）	35
1. 目的	35
2. 方法	35
3. 結果	38
4. 考察	41
第4節 本章のまとめ	44
第3章 再評価と抑制が反応産出過程に与える影響	46
第1節 色彩刺激の処理と感情制御方略（研究4）	46
1. 目的	46
2. 方法	46
3. 事例検討	47
4. 数量分析	51
5. 考察	54
第2節 本章のまとめ	56
第4章 事例検討	58
第1節 不快な刺激に注意が向きやすい事例『G』	58
1. 感情制御に見られる『G』の特徴	58
2. 『G』のロールシャッハ反応	59
3. 考察	65
第2節 再評価方略得点が高い事例『C』	66
1. 感情制御に見られる『C』の特徴	66
2. 『C』のロールシャッハ反応	66
3. 考察	70
第3節 抑制方略得点の高い事例『F』	71
1. 感情制御に見られる『F』の特徴	71
2. 『F』のロールシャッハ反応	71

3. 考察	77
第4節 注意制御が得意で再評価と抑制を頻用する事例『H』	78
1. 感情制御に見られる『H』の特徴	78
2. 『H』のロールシャッハ反応	78
3. 考察	84
第5章 総合考察	86
第1節 各研究の要約	86
第2節 色彩刺激の処理と感情制御プロセス	89
1. 反応産出過程における様々な感情制御	89
2. 色彩反応の産出過程	90
3. 彩色図版に対する反応の遅れ	91
第3節 本論文における反応産出モデルと他のモデルとの比較	93
第4節 今後の課題	95
文献	96
謝辞	103

## 第1章 序論

### 第1節 ロールシャッハ・テスト

#### 1. ロールシャッハ・テストとは

ロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テスト）とは、10枚のインクブロットから成る多義的な図形を刺激材料とし、被検者の認知、思考、行動を含む広範な人格的特徴を把握、理解するための心理検査である。Swissの精神科医 Hermann Rorschach の著書「*Psychodiagnostik*」(Rorschach, 1921 鈴木訳 1998)の発表と同時に誕生したこの検査は、刺激材料や主な実施法に手が加えられることなく今日に至る。

この検査で被検者が求められる課題内容は、インクブロットが何に見えるかを回答することである。具体的には、カードに描かれたインクブロットの形や色、濃淡といった刺激特徴に対して特定の対象、概念を見立て（自由反応段階）、論理的な説明を行う（質問段階）ことが被検者に課される。この過程で観察される言語的、非言語的な反応に、被検者のパーソナリティを含む心理的特徴が反映されることを仮説とし、ロ・テストによるアセスメントが行われる。

心理検査の使用状況に関する調査（小川, 1992）によると、ロ・テストが心理アセスメントのツールとして重要視されていることが窺えるが、近年ではその使用頻度の低下が報告されている（小川, 2011; Smith, Gorske, Wiggins, & Little, 2010）。エビデンスが求められる近年の心理学研究の動向もこの減少傾向の一因であると予想され、さらなる実証研究の報告、知見の蓄積が必要であると考えられる。

#### 2. 色彩情動仮説

10枚のカードには単色で描かれたもの、濃淡や彩色が豊かなものなどがあり、それぞれが独自の特徴を持つ（馬場, 1999）。ロ・テストで使用される10枚のカードのうち、5枚には赤色や緑色、青色といった有彩色のインクブロットが含まれており、これらのカードは彩色図版と呼ばれる。彩色図版上の色彩に対する反応には、被検者の感情体験や情緒に関するパーソナリティの側面が反映されると考えられており、この仮説は慣例的に色彩情動仮説（color-affect hypothesis）と呼ばれてきた（Stevens, Edwards, Hunter, & Bridgman, 1993; 鈴木, 2014; 安田, 2016）。

Rorschach（1921 鈴木訳 1998）は、この彩色図版上の色彩に対する反応特徴が患者の気分状態、病状によって異なることを観察し、色彩情動仮説を提唱した。色彩に対する反応と被検者の情緒的特性の関連について Rorschach（1921 鈴木訳 1998）は主に、色彩反応の

産出とカラーショックと呼ばれる現象から言及している。

## 2.1. 色彩反応

インクブロットの色彩を決定因として用いた反応は色彩反応と呼ばれ、形態が関与する度合いに基づき主に以下の 3 種類に分類される。すなわち、反応の説明として色彩が用いられているものの形態の特徴が明確に示されている反応には形態色彩反応 (Form-Color Response : FC), 形態の説明はされているものの、色彩の特徴に重きが置かれて説明された反応には色彩形態反応 (Color-Form Response : CF), 反応の説明の中に形態の関与が全く認められない反応には純粋色彩反応 (Pure Color Response : C) がスコアされる。

色彩と情動の関連性について Rorschach (1921 鈴木訳 1998) は、形態関与の度合いと情動が統制される程度を関連づけて解釈している。具体的には、FC は情緒的な統制が可能であることを示す反応、CF は情緒の自発性を示しつつも統制の弱さを反映する反応、C は情緒的統制の欠如を反映する反応として解釈される (片口, 1987)。

これらのスコアを解釈するうえでは、色彩反応の反応数の合計やその比率に基づく理解が行われる。例えば、形態が関与する度合いによって重みづけ ( $FC \times 0.5 + CF + C \times 1.5$ ) を行った値は  $\Sigma C$  (片口, 1987; Piotrowski 1957 上芝訳 1980) や WSumC (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) として表されるが、この指標はその人の感情が思考や体験に影響する程度 (Mihura, Meyer, Dumitrascu, & Bombel, 2013) や、情緒的なものを含む環境の刺激に対する反応性 (Meyer, Viglione, Mihura, Erard, & Erdberg, 2011 高橋・高橋訳 2014; Piotrowski 1957 上芝訳 1980) を示すとされている。

また、色彩反応の総数に対する FC の比率 ( $FC : CF + C$ ) には、情緒的な挑発を伴う環境への反応に対する認知的統制や調節の程度が反映される (Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014)。すなわち、CF, C よりも FC がスコアされた反応を多く示す ( $FC > CF + C$ ) 被検者は社会的に容認される形での情動表現が可能であり、FC の方が少ない ( $FC < CF + C$ ) 被検者は自己中心的で統制を欠いた行動を示す傾向にあると解釈される (片口, 1987)。このように、FC, CF, C のスコアの総数や関係性を把握することで、被検者の情緒的な側面の理解が可能であるとされている。

これらの色彩反応は一般的に連続的な関係性にあることが想定されている (Rorschach, 1921 鈴木訳 1998)。しかし近年では、それぞれの反応を独立したものとして扱うべきであるとする主張もされており (Malone et al., 2013; 安田, 2016), 個々の反応を個別に分析に用いる研究も増えてきている (e.g., 生塩, 2002)。

## 2.2. カラーショック

彩色図版に対して見せる特異的な反応特徴は Rorschach (1921 鈴木訳 1998) によりカラーショック (「色彩ショック (p. 37)」) として提唱され、後継の研究者によって研究が重ねられてきた。色彩の出現に対する情緒的反応や戸惑い、あるいは生産性の減少といった反

応特徴が、情動を抑圧、統制する者に見られるある種の情動反応であると Rorschach は述べているが、カラーショックの指標や定義については研究者間で一致していない(片口, 1987)。

Brosin & Fromm (1940) は彩色図版上に見られる反応特徴として、①初発反応の遅れ、②情緒的な感嘆、③不安や緊張を示唆するコメント、あるいは過度のいらだち、攻撃性といった防衛機制、④(とりわけ多彩色図版に対する)反応数の減少、⑤(形態水準を始めとする)反応の質の低下、⑥発想の豊かさや独創性の低下によって生じる反応内容の乏しさ、⑦カードへの拒否的な態度、⑧不規則な反応継起、⑨P 反応を認知する能力の低下、⑩色彩反応の減少、をカラーショックの基準として呈示している。

また Meyer (1951) も同様に、①初発反応の遅れ、②情緒的な感嘆、③不安や緊張、ストレスを示唆するコメント、④(とりわけ多彩色図版に対する)反応数の減少、⑤形態水準の低下、⑥反応の拒否、⑦継起の混乱、⑧P 反応が産出されないこと、⑨組織化活動(Z)の顕著な低減、⑩自閉的な人間運動反応(Dd 領域や Hd に対する M, M- など)、⑪初発反応が解剖反応、⑫動物反応の顕著な増加、が彩色図版上に見られた場合はカラーショックを示すサインであるとして仮説立てている。

このようにカラーショックについては多彩なサインが提唱されている。現在、主流の分析システムである包括システム(Exner, 2003 中村・野田訳 2009; Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014)はこの仮説について懐疑的な立場を取っているが、本邦におけるいくつかのロールシャッハ分析システム(片口, 1987; 名古屋ロールシャッハ研究会, 2018; 辻, 1997)はこの解釈仮説を採択している。また、カラーショックに関する研究のレビューを行った Malmgren (1999) は、反応時間の計測を行わない手続きに警鐘を鳴らし、研究方法を見直したさらなる検討が続けられる必要があることを指摘している。

### 2.3. 色彩情動仮説に関する理論

以上のように、色彩に対する反応はその人が対人関係という情緒的な刺激にどのように反応するのかを示すものとして解釈される(Klopfer & Davidson, 1962 河合訳 1964)。この解釈仮説については Rorschach (1921 鈴木訳 1998) の頃より様々な理論的連関に関する仮説が提唱されている。

Rorschach (1921 鈴木訳 1998) は色彩と情動の関連について文化的、慣習的な側面から説明を試みている。陽気な気分の人にはあらゆるものを「バラ色の眼鏡」を通して見る(p. 103)と形容されるように、色彩と情動には体験過程に基づく関連性が想定される。このような文化的連合があるため図版上の色彩は被検者の情緒を刺激する性質を有しており、情動刺激として作用する色彩刺激への反応の様子からその人の日常場面での情動体験やその統制についてアセスメントすることが可能であると考えられている(鈴木, 2014)。

また色彩反応の反応産出過程については、色彩と形態の知覚プロセスを踏まえながら様々な理論が展開されてきた。Shachtel (1966 空井・上芝訳 1975) は、色彩の持つ性質として受動性と直接性を挙げている。つまり、「形態や構造の認知に特徴的な、受動的に組み

立て客観化する客観的な認知態度とは対照的に、色彩や明るさの認知は、このような態度を必要としない (p. 185)」、そして「(色などは) 望むと望まざるにかかわらず人の眼を射るもので、(中略)、目は否応なしにこれにひきつけられる (p. 187)」という特徴を色彩は有しており、知覚者の意思とは関係なく知覚処理される。そして、Rorschach (1921 鈴木訳 1998) が示したように色彩は情緒的な性質を有していることから、彩色図版への反応に対する被検者の知覚過程、とりわけ受動的に処理される色彩に対して能動的な関わりを持つことができるか、といった点に被検者自身の感情処理の様相が表現されると考えられている。

また Rapaport, Gill, & Schafer (1968) は、意図せず知覚される色彩への反応を遅延させることではじめて形態と色彩を統合した反応の産出を可能とすると述べている。すなわち、「形態が関与しない C は色彩の印象に任せた、遅延が全く生じていない反応であり、CF の産出には、形態を多少でも関与させるだけの時間的な余裕を作る必要がある (p. 373)」。

FC の産出にはさらに十分な反応の遅延を必要とすることから、「知覚プロセスの柔軟で慎重な制御の現れ (p. 374)」として解釈され、外界の刺激や自身の欲求に対して反応を抑制しようとする心の働きが色彩に対して形態を統合していくプロセスに反映されると考えられている。

Shapiro (1960 田澤訳 2005) は「知覚モード」と呼ばれる外界刺激に対する被検者の態度から、色彩反応とその人のパーソナリティの関連について述べている。Shachatel (1966 空井・上芝訳 1975) と同様に、色彩の持つ即時的、受動的な知覚体験について言及し、色彩優位な反応は「刺激に対してより感覚的に身を任せる (p. 33)」傾向を反映するとしている。しかし Shapiro は、この特徴は情緒的な反応よりも広義な傾向であると考えている。すなわち、様々な体験、外界刺激に対する態度が色彩反応には反映されることが想定されており、その体験に情緒的な要素がどの程度含まれるかについては不明確であると指摘している。

以上のように、色彩と情動の関連については理論的展開が十分に行われてきた (Malone et al., 2013)。これらの理論を概観すると、色彩と情動に見られる関連性は、色彩の知覚に基づく感情の生起、あるいは注意喚起刺激に対する反応性という色彩と情動刺激に対する反応パターンの類似によって説明されている。近年においては、色彩を知覚し、その体験を説明することが、環境刺激への反応性の高さに関連することが理論的根拠として挙げられており、その反応性のなかに情緒的要素が含まれることもであるとされている (Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014)。



## 第2節 実証研究

ロ・テストにおける色彩と情動の関連に想定される上述のような理論的根拠は主に、心理臨床家による観察と推察に基づくと考えられる。そして、これらの理論を支持しようと様々な実証研究も行われてきた (Frank, 1976; 本井, 1972)。本節では、医学的診断に基づいた研究、質問紙法に基づいた研究、そして認知処理の個人差に着目した研究に分けてレビューを行う。

### 1. 医学的診断に基づく実証研究

臨床群を対象としたロ・テストの実証研究の多くは、医学的診断やその診断基準に基づき調査協力者の群分けを行い、グループ間でロールシャッハ指標の比較を行うことで、その疾患に特有の反応特徴を報告してきた。ここでは、色彩反応や多彩色図版への反応数といった色彩に関連するロールシャッハ指標の分析結果が報告されている研究について、抑うつ・不安障害群、パーソナリティ障害群、発達障害群に大別し、整理を行う。

#### 1.1. 抑うつ・不安障害群

気分障害とロ・テストの関連については Rorschach (1921 鈴木訳 1998) の頃から論じられており、後継の研究者も抑うつを始めとする気分調節に関わる症状と関連する反応特徴を呈示している。色彩に関する特徴のみに着目すると、色彩反応の少なさについては概ね共通して報告されている (沼, 2015)。

Mason, Cohen, & Exner (1985) は、統合失調症群 (schizophrenics), うつ病患者群 (depressives), そして統制群 (nonpatients) における様々なロールシャッハ指標を3群間で比較した。分析の結果、統制群は他の2群に比べてFCとCFを多く示すが、形態の伴わない色彩反応 (C+Cn) は少ないこと、そして多彩色図版への反応数 (Afr) は多くなる傾向にあることが示された。この結果は、統制群が統合失調症、うつ病を罹患した人たちよりも情緒的感受性、反応性が高く、制御されない形での感情表出が少ないという点で臨床像と合致すると考えられる。

また Hartmann, Wang, Berg, & Sæther (2003) はうつ病患者群 (clinically depressed), うつ病寛解群 (previously depressed), 統制群 (never depressed) の3群について、いくつかのロールシャッハ反応の比較を行った。分析の結果はうつ病患者群のC%が他の2群よりも高いことを示し、攻撃的な反応 (AG%) や損傷を伴う反応 (MOR%) もこれと同様の結果を示したことから、うつ病患者に見られる感情コントロールの苦手さがロ・テスト上にも現れたと述べている。しかし、同様の分析に用いた  $(CF+C) - FC$  の値については有意な結果が得られていないことから、色彩反応との関連は部分的にしか示されていない。

このように、抑うつ症状と色彩に関するロールシャッハ指標との関連を報告する研究はいくつかなされている。しかし、うつ病患者を双極性の躁状態、双極性のうつ状態、単極

性の3群に分けた研究で有意な関連が確認されないなど (Singer & Brabender, 1993), 色彩反応と気分障害に見られる関連は限定的である。

また、不安を主たる症状とする疾患群のロ・テストの研究も報告されている。心的外傷後ストレス障害 (PTSD) を患った退役軍人 16 名を対象とした Goldfinger, Amdur, & Liberson (1998) の報告では, Exner (1993) の標準データ比べて FC, CF が有意に少なく, Afr も小さくなる傾向が認められた。さらに, FC : CF+C の値に基づき群分けを行ったところ, 色彩優位の傾向を示す人の割合が多いことが示され, これは PTSD の患者に見られる感情制御の乏しさの表れとして考察されている。

## 1.2. パーソナリティ障害群

激しい感情表現や情動コントロールの困難さを特徴とするパーソナリティ障害を対象とした研究も多く報告されている。とりわけ境界性パーソナリティ障害の患者から得られた知見は, 色彩反応の感情に関する解釈を支持する重要な根拠とされている (Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014)。

Zodan, Charnas, & Hilsenroth (2009) は, 境界性パーソナリティ障害の診断を受けている患者と他の疾患患者のロ・テストを比較し, 境界性パーソナリティ障害群は WSumC が高いことを示した。さらに, Cinti, Lastretti, Pomilla, Pedata, & Burla (2016) は, 境界性パーソナリティ障害の診断基準に該当する患者 50 名と, 非臨床群 50 名のロ・テストを比較したところ, 患者群において FC% の低さ, そして C% の高さが認められた。これらの結果はそれぞれ, 境界性パーソナリティ障害に特徴づけられる不安定な情動性が反映されたとして考察されている。

また, 色彩反応の総反応数 (FC+CF+C) が演技性パーソナリティ障害の診断基準の該当数と正の相関関係を示す (Blais, Hilsenroth, & Fowler, 1998) など, 感情のコントロールが不得手とされる他のパーソナリティ障害群においても同様の結果が得られている。

しかし Cinti et al. (2016) では CF% や Afr といった他の指標については有意な結果が得られていないことや, 境界性パーソナリティ障害を対象とした他の研究 (Burla, Ferracuti, & Lazzari, 1997) においては色彩に関する指標が有意な関連を示していないことなど, 一貫した結果は得られていない。

## 1.3. 発達障害群

近年では自閉スペクトラム障害を始めとする発達障害の診断を受けた人を対象としたロールシャッハ研究が増えている。ここではとりわけ衝動性の高さを特徴とする注意欠如・多動症 (ADHD) に関する研究を整理する。

Bartell & Solanto (1995) は, ADHD の診断を受けた臨床群を対象にロ・テストを実施し, 標準データとの比較を行うことで, ADHD に見られるロ・テスト上の特徴を報告した。分析の結果, FC が少ないという仮説に則した結果が得られた一方で, CF も同様に少ない反応



数を示したこと、そして FC : CF+C は有意な結果が得られていないことなど仮説に反した結果も得られた。Bartell & Solanto はこの結果について、情動反応の未成熟性や形と色の統合という認知処理の苦手さといった要因から考察を行っている。

また Contugno (1995) は、80 名の ADHD 群を標準データと比較し、色彩反応の総反応数 (SumC) や Afr の少なさを特徴として報告している。しかしこの傾向は他の疾患を有する臨床群も同様に示しており、ADHD に特異的なのではなく、他の疾患にも共通する情動刺激への回避的な態度を示していると考えられている。

しかし近年報告された研究 (Ando et al., 2019) では、ADHD 群が示す色彩に関するスコア (FC, CF, C, (CF+C)/SumC, WSumC) は、非臨床群データと比較しても大きな特徴が見られなかった。

## 2. 質問紙法に基づく実証研究

ロ・テストの色彩情動仮説に関する研究は、質問紙法を用いたものも多く報告されている。使用される質問紙についても、パーソナリティを測定するものから、感情の特定の側面に関する自己評価を測定するものまで多岐に渡る。

Carolis & Ferracuti (2005) は、非臨床群を対象に Eysenc Personality Inventory とロ・テストを実施し、外向性傾向が高いほど WSumC が大きくなることを示した。また Jočić (2005) も同様の結果を示しており、200 名の精神疾患患者を対象に NEO-PI-R とロ・テストを実施したところ、外向性傾向と CF+C, SumC が正の相関関係を示すことを報告している。これらの結果からは、自身の感情を含む明瞭な自己表現や環境への積極的な関心といった態度が色彩反応の産出を促進していることが窺える。しかし同様に、臨床群に対して NEO-PI-R を実施した Petot (2005) では、分析に用いられた開放性、神経症傾向と WSumC に有意な関連は認められていない。

このように、ビッグファイブに基づくパーソナリティ特性とロ・テストの関連は数多く報告されている。さらに、感情に関わるパーソナリティについて質問紙を用いて測定した研究も以下のように行われている。Berant, Mikulincer, Shaver, & Segal (2005) は、質問紙法を用いて愛着不安及び愛着回避の傾向を測定し、愛着不安得点が CF 及び Afr と正の相関関係を示すことを明らかにした。この結果について Berant et al. (2005) は、愛着不安の高い人に見られる感情コントロールの難しさが一因であると解釈している。

また Porcelli & Mihura (2010) は、219 名の臨床群におけるアレキシサイミア傾向とローレルシャッパ指標の関連を検討し、FC や WSumC がアレキシサイミア傾向と負の相関関係を示す一方で、F の反応数 (Form%) が強い正の相関を示すことを報告している。

生塩 (2002) は、健常者を対象に情緒に関する 3 つの側面 (表現性, 感受性, コントロール) の自己認知を質問紙にて測定し、感受性が高くなるほど色彩反応の総数は増加し、自身の情緒的コントロールを高く評価している人ほど FC を多く産出する傾向にあること

を示した。

以上のように、各疾患や自己報告式の質問紙法と色彩反応の関連は主に色彩反応の総数やFCとCF+Cのバランスから検討されてきた。これらの報告を概観すると、感情が高まりやすく表出をコントロールすることに困難さを抱く人たちは色彩反応が多く、うつ病を始めとする活動性や感情体験の低下を主症状とする疾患を罹患した人たちは色彩反応が少ない傾向にある。これは、「…抑うつ気分変調者は、色彩反応をまったく、あるいはほとんどまったく示さない。これに対し、躁的気分変調者と躁病患者の反応では、色彩が豊かに入り込んでいる（p. 32）」と記した Rorschach（1921 鈴木訳 1998）の報告と概ね一致する。また感情の統制に困難を抱えるこれら疾患に見られる色彩反応上の特徴としては、CFやCといった色彩優位な反応がFCよりも多く産出されやすいといったことが挙げられる。一方で、結果に一貫性はなく、仮説とは相反する結果が示された報告もあるなど、未だに検討の余地を残している。

### 3. 認知処理の個人差に着目した実証研究

#### 3.1. 認知課題による検討

これまで示してきたように、ロ・テストの色彩と情動の関連については主に診断基準や質問紙のスコアに基づく妥当性の検討が行われてきた。しかしこれらのアプローチによる妥当性の検討を疑問視する指摘は多い。例えば Bornstein（2012）は、ロ・テストは潜在的、顕在的な心理過程を反映することから、Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders（DSM; American Psychiatric Association, 1994）の診断基準のような表面化している行動特徴のみを外的指標とするのではなく、その人のパフォーマンス指標から検討を行う必要があることを指摘している。近年ではこれらの提言に従い、ロールシャッハ反応が産出されるまでの認知処理に着目し、その個人差から妥当性を担保しようとする試みが増えてきている。

Katz & Ziffo（1975）は、視覚的認知課題（Matching Familiar Figures Test）によって測定される衝動性に基づき群分けを行い、衝動性が高い群に属する調査協力者は、CFやCといった色彩優位な反応を多く示す傾向にあることを示した。Katz & Ziffo（1975）はこの結果を受け、色彩反応が衝動性と関連するという仮説を支持した。

また Kron, Cohen, Benziman, & Ben-Schakhar（2009）は、果物や野菜の写真を刺激とした object-naming task と呼ばれるストループ様課題を作成し、その彩色を操作することで干渉効果を測定した。この課題では、呈示された刺激の名称をすばやく回答することを調査協力者に求める。物体の彩色は対象認知のプロセスに大きく関わることから、一般的に一致条件（e.g., オレンジ色の人参）よりも不一致条件（e.g., 緑色の人参）の方が反応時間に遅れが認められる。この反応時間の差によって算出される一致性効果（congruency effect）と色彩反応との関連を検討したところ、色彩優位群（FC<CF+C）は形態優位群（FC>CF+C）

よりも大きい一致性効果を示し、また  $FC - (CF+C)$  の値が一致性効果と負の相関関係を示した。これらの結果について Kron et al. は、 $FC$  と  $CF+C$  の比率には、対象認知における色彩の処理の個人差、すなわち色彩の特徴に基づいて対象認知を行う程度が反映されたと考察している。また、色彩の処理に限らないより一般的な認知的葛藤処理の個人差が現れた可能性についても言及しており、この認知機能が形態優位群と色彩優位群で異なるために、 $FC$  と  $CF+C$  の比率から被検者の感情に関する特徴を予測できるのではないかと考察している。

鈴木 (2016a) は Kron et al. (2009) の結果を受け、色と音を手がかりとした Go/No-Go 課題を用いた検討を行った。Go/No-Go 課題は 2 種類の刺激のうちいずれかを呈示し、ターゲット刺激に対してはキー押しなど指定された反応をすばやく行い、非ターゲット刺激には反応を行わないよう協力者に求める課題である。この研究では、ターゲット刺激への反応時間、エラー率、そして課題実施時の脳活動が計測され、色彩反応に基づく群による認知処理の差異が検討された。分散分析の結果、色彩反応に基づく群間（色彩優位群・形態優位群）と刺激特徴（色・音）に交互作用が認められなかったことから、色彩反応の産出には色彩の視覚的な処理に限らないモダリティに共通した認知処理が関与していることが示唆された。しかし視覚刺激と聴覚刺激を用いた Go/No-Go 課題ではそれぞれ神経活動の様相が異なることを挙げ、視覚モダリティを使った課題同士で比較する必要があることを今後の課題としている。

これらの研究報告からは、刺激の処理や反応における衝動性、あるいは干渉刺激に対する注意抑制といった、情動性とは直接関わりのない認知機能の個人差が色彩反応の産出と関連することが示されている。またロ・テストにおける色彩と感情の関連については、色彩反応の産出と感情的な行動との間に共通する認知処理の個人差から説明されている (Kron et al., 2009; 鈴木, 2016a)。これらの結果は、刺激の情動性に関わらず、外界の刺激に対する態度や認知処理の違いによってロ・テストにおける色彩と被検者の感情特性が関連することを解釈仮説としたいいくつかの理論 (Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014; Rapaport et al., 1968; Shapiro, 1960 田澤訳 2005) を支持するものであった。

### 3.2. 神経活動計測による検討

Rorschach (1921 鈴木訳 1998) や Shachtel (1966 空井・上芝訳 1975) が言及しているような、色彩刺激を知覚することによって特定の感情が喚起されるとする解釈仮説については、ロールシャッハ反応産出時の神経活動を測定、分析したいくつかの研究によって部分的に支持されている。

兵働・川崎・桑原・小川 (1968) は I 図版と II 図版の初発反応時間に基づき調査協力者を Color shock group と Non Color shock group の 2 群に分け、反応産出過程における抹消血管の血流量を測定、比較した。結果は、Color shock group の方がとりわけ II 図版で血管の収縮が大きかったが、VIII 図版では対称的に、Non Color shock group の方が大きな変化量を示し、仮

説は部分的に認められた。しかし反応産出時の皮膚電位を測定した鈴木（2016b）による報告では、図版の彩色の違いに伴う末梢神経系の活動の変化は確認されていない。鈴木同様、皮膚電位を測定する研究は古くからされていたが、色彩と情動の関連を支持する十分な結果は示されていないことが指摘されている（Frank, 1976）。

さらに近年では測定技術の発展に伴い、ロールシャッハ反応産出時の中枢神経系の活動を測定することで、反応産出に伴う認知処理を明らかにしようとする試みが増えている（Giromini, Viglione Jr, Zennaro, & Cauda, 2017）。Ishibashi et al. (2016) は fMRI を用いて、彩色図版と無彩色図版における反応産出時の神経活動の差異を検討し、彩色図版に反応する条件では眼窩前頭皮質（orbitofrontal cortex; OFC）が強く賦活するという結果を得ている。OFC は課題非関連な情動刺激の処理の抑制や、特定の情報へ選択的に注意を向ける過程と関連することから、形態に注意を向けるプロセスにおいて色彩刺激がノイズとして働いている可能性を Ishibashi et al. は指摘している。

さらに、無彩色図版との有意差は認められなかったが、前帯状皮質（anterior cingulate cortex）、背外側前頭前野（dorsolateral prefrontal cortex）、扁桃体（amygdala）といった部位も同様にロールシャッハ反応の産出時に賦活していたことから、ロールシャッハ反応の産出時には何らかの情動反応が生じていることを Ishibashi et al. (2016) は示した。また他の fMRI 研究（Asari et al., 2010a; 2010b）では、扁桃体の活動が出現頻度の低い反応（unique response）や WSumC といった指標と関連することを明らかにし、ロールシャッハ反応産出時における被検者の情動活動が知覚過程へ干渉的に影響している可能性があることを報告している。

これらの結果は、ロールシャッハ反応の産出過程に情動体験が生じているとする従来の解釈を支持するものである。しかしこの情動体験は彩色図版に特異的に生じているわけではない。彩色図版ではとりわけ注意コントロールをはじめとする認知的な制御機能の働きが求められること（Ishibashi et al., 2016）、そして扁桃体の賦活を契機とする一連の神経活動が色彩反応の産出を促すこと（Asari et al., 2010b）から、彩色図版では次のような認知処理が行われていることが推測される。すなわち、情動活動は有彩色の有無に関わらず生じるが、色彩刺激の処理には特に認知的なコントロールを要し、それ故、感情が刺激されやすい人、あるいは元来そのような統制が苦手な人は、注意を惹く刺激である色彩刺激に対して強く反応してしまう、というプロセスを仮定することが可能である。しかし、兵働他（1968）の報告、あるいは古典的な解釈仮説（Rorschach, 1921 鈴木訳 1998; Shachtel, 1966 空井・上芝訳 1975）や炎や血液といった色彩の関与が明確な反応内容が被検者の情動性を示すとする解釈（Exner, 2003 中村・野田訳 2009; Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014）が支持されていることなど、インクブロット上の色彩が情動性を含むものであるのかについては未だ議論の余地があると考えられる。

#### 4. 先行研究の整理と展望

色彩情動仮説の妥当性について検討したこれまでの先行研究からは、色彩反応を始めとする被検者の色彩に対する態度や関わりが、感情コントロールの障害を特徴とする精神疾患や情緒に関するパーソナリティと関連することが示されている。また近年では、認知課題や神経活動計測を用いた研究報告が活発に行われており、ロールシャッハ反応の産出に関わる認知機能の一端が明らかとなりつつある。しかし、一貫した結果を示していないことや、色彩の処理が絡んだ反応産出過程が未だ不明確であることなど多くの課題が残されている。

多くの臨床家（e.g., 馬場, 1999）が指摘している通り、ロ・テストは数量的解釈に頼るだけではなく、反応内、反応間の認知処理の移り変わりを観察し、アセスメントに活かすことが被検者の理解のために重要となる。すなわち、呈示された色彩に対してどのように反応したのか、そしてその反応過程は感情生起や統制に関するどのような過程を反映しているのか、というような視点に基づく仮説検証が必要であると考えられる。したがって、次節ではロールシャッハ反応の産出過程に関するモデルについて検討する。



### 第3節 ロールシャッハ反応の産出過程

ロ・テストは知覚の検査であり、インクブロットとの関わりに被検者の現実的な課題解決の様相が表現されることを仮説としている（Rorschach, 1921 鈴木訳 1998）。検査刺激であるインクブロットが視知覚され、その情報を基に連想を展開させ、特定の概念を反応として言語化する。反応産出過程と呼ばれるこの一連のプロセスについては、様々な研究者がモデルを提唱しており、それに基づく研究や臨床実践が行われている。

ロ・テストの反応産出過程では様々な知覚、体験が行われ、被検者をアセスメントするうえではその体験過程を適切に理解することが重要となる。したがって、その反応産出過程でどのような認知処理が行われているのかについては Rorschach（1921 鈴木訳 1998）以降、様々な研究者が関心を寄せてきた。例えば Shachatel（1966 空井・上芝訳 1975）では、「…インクブロットを認知し、記憶している概念やイメージを想起して、インクブロットと統合する過程（つまり、こうしたイメージに照らしてインクブロットの知覚像を再構成すること）、逆に言えば、これらのイメージがインクブロットに「合致する」（一致する）かを試してみることが、典型的な、「正常の」ロールシャッハ反応においては決定的な役割を果たしている（p. 17）」と要約されている。また森田（2010）も同様に、インクブロットに目を向け（知覚）、それに似ている概念を探し（連想）、想起されたものを意識化し、インクブロットの特徴と照合し（概念形成）、反応として解答する（言語化）という一連の過程について記しており、質問段階ではこれらの過程について考え、説明する（合理化）ことが被検者には求められるとしている。

このように、反応産出過程を一連の認知処理、意思決定のプロセスとして理論化する試みは古典的な文献のなかですでに行われている。近年ではとりわけ Exner（2003 中村・野田訳 2009）がその過程について丁寧に説明しており、このモデルは他の研究においても多く引用されている（e.g., Ales, Giromini, & Zennaro, 2019; Kron et al., 2009）。

#### 1. Exner のモデル

Exner（2003 中村・野田訳 2009）が示したこのモデルでは、ロールシャッハ反応が産出される過程について、三つの段階、六つの精神活動から説明されている（Table 1-1）。第1段階では、インクブロットの全体的、部分的な視覚的走査が行われ、その視覚的特徴に基づき潜在反応（反応の候補）が認知される。この過程では、インクブロットの形態や色彩、濃淡などの刺激特徴に基づき長期記憶内の概念と同一視が行われる。

しかし、この過程で認知された潜在反応が全て反応として産出されるわけではない。第2段階では、潜在反応の順位づけが行われ、刺激の重要性や概念との類似性を比較することで産出される反応数が制限される。また、インクブロットの特徴とよく合致した概念が連想されたとしても、それが性的、暴力的な内容のように社会的に好ましくないと評価され

るような反応は、検閲の過程を通じて反応の候補から除外されることが多い。

最後の第 3 段階では、反応候補からいずれを反応として回答するか、といった最終的な決定が下されるが、この過程には被検者のパーソナリティや受検時の心理状態が影響すると Exner (2003 中村・野田訳 2009) は述べている。また、これら全ての過程において被検者の投射が生じ得る。

Table 1-1. Exner (2003 中村・野田訳 2009, p. 209) による反応産出過程

---

#### 第 1 段階

1. 刺激全体およびその部分の視覚的入力と記銘 (encoding)
2. 刺激全体およびその部分の分類 (同一視) と、作り出された潜在反応の順位づけ

#### 第 2 段階

3. 順位づけの低い潜在反応の放棄
4. 検閲による他の潜在反応の放棄

#### 第 3 段階

5. 特性あるいはスタイルによる、残りの反応の中からの選択
  6. 状況の影響による、残りの反応の中からの選択
- 

Exner (2003 中村・野田訳 2009) が示したこのモデルは、ロールシャッハ反応の産出過程について認知心理学的な知見を交えてレビューした研究 (Acklin & Wu-Holt, 1996; 中村・内海・相澤・石橋・岩切, 2009) や、反応産出過程の認知処理に焦点を当てた研究 (Ales et al., 2019; Kron et al., 2009) などでもしばしば引用されている。

しかし、ロールシャッハ反応を形成し、言語化に至るまでのプロセスについて包括的に捉えたこのモデルでは、色彩の処理について詳細な検討を行うには不十分であると考えられる。例えば前述 (第 1 節) したように、インクブロット上の色彩刺激の処理は図版に目を向けてすぐに始まる (Rorschach, 1921 鈴木訳 1998)。意図せずとも知覚される色彩刺激に対して、被検者が能動的に関わる、あるいは即座に反応せずにいるといった認知処理が色彩反応の産出や被検者の情動性を理解するうえで重要である (Shachatel, 1966 空井・上芝訳 1975; Shapiro, 1960 田澤訳 2005) ことから、色彩の処理に焦点を当てたモデルを考える必要がある。

## 2. 辻のモデル

インクブロットの形態と色彩の処理の重要性を主張するモデルには、辻 (1997) が提唱したものがある (Figure 1-1)。辻によれば、ロ・テストの図版に存在する刺激特徴は形態 (「広

義形体性)」と色彩（「広義色彩性）」の2種類のみである。知覚したこれらの刺激特徴をどのように体験し、反応を行うのかといった点に、被検者の外界との関わりが反映されると考えられている。

インクブロットとの最初の関わり（①感受）では、被検者が形態と色彩をそれぞれの程度体験することが可能であり、それらを統合して反応を形成できるのかが着目される。この過程について辻（1997）は「色彩知覚は色彩の方から飛び込んでくると表現できるような体験であるのに対して、形体知覚の方は被検者の方から注意を注ぐという、能動性が求められる（p. 80）」と両者の体験上の特徴の違いについて言及しつつも、後続の過程に比べれば受動的な知覚過程が担う役割が大きいことを記している。

この過程で認知されたインクブロット上の形態と色彩は、次の過程（②比較・検討）で被検者に蓄積された記憶像と照合される。ロ・テストのインクブロットは曖昧図形であることから記憶内のいかなる対象とも正確には合致しない。それ故、十分な類似性を有する対象を探し出す必要があり、被検者の能動性がより求められる。

そして最後の過程（③選択・決定）では、これまでの過程で認知された概念を反応とするか否かを決定し、言語表出が行われる。これらの過程を通して、形態の識別性の高い（「良質の形体性」）反応には十分な能動性が必要であるのに対し、色彩を主とした反応は比較的受動的なものとして位置づけられる。

このように辻（1997）はロールシャッハ反応の産出過程について、大きく三つのプロセスから成ると考察している。Exner（2003 中村・野田訳 2009）が示したモデルと比較して、シンプルな形で反応産出過程が描かれているものの、色彩に関する重点的な記述が見られる点では、色彩刺激の処理過程を検討するうえで重要な示唆を含んだものであると考えられる。

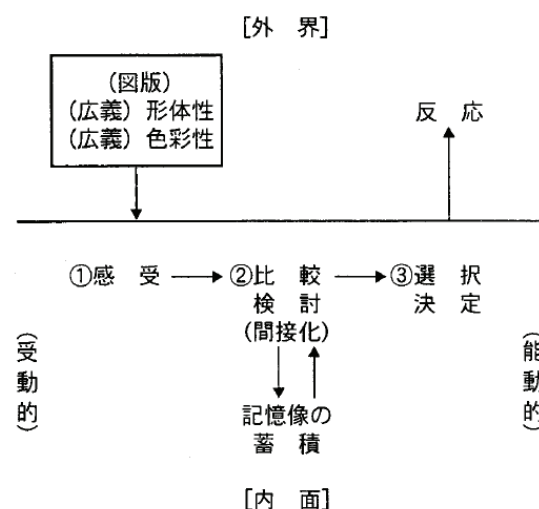


Figure 1-1. 辻（1997, p. 79）による反応産出過程



### 3. 新たな理論モデル構築の必要性

以上のように、ロールシャッハ反応が産出されるまでに生じる被検者内の認知活動については、一般化されたプロセスが提唱されている。しかし、認知課題を用いた研究や生理心理学的アプローチによる研究の一部は、被検者の感情が喚起されることでその知覚過程（インクプロットに適切に注意を向ける、典型的な反応を産出するなど）が干渉されることが示されている（Asari et al., 2010b; Ishibashi et al., 2016）。したがって、色彩刺激の処理や反応産出中の情動活動などを考慮したプロセスを解明する必要があると考えられる。

インクプロット上の色彩刺激は外界に存在する情動刺激として解釈されている。この刺激を知覚し、それに対して動揺を示すのか、あるいは上手く反応に取り入れることができるのか、そして色彩が関与していることをどの程度強調するのか、といった一連の様子から被検者の情動性をアセスメントすることが可能であるとされている。

ロ・テストは、反応に見られる特徴が被検者の日常的な感情や行動を表すことを仮定している（Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014）ことから、彩色図版上で生じるこの一連のプロセスについても、一般的な感情制御の過程から検討することが可能であると考えられる。また、認知課題を用いた研究やロールシャッハ反応産出時の神経活動の活動を報告した研究からは、特に刺激や生起した感情に対する抑制的な活動が彩色図版に対する反応産出過程に大きく関わっていることが示唆されている。したがって本論文では、感情の生起や反応に関する様々なモデルのなかでも、制御のプロセスに焦点を当てる。

## 第4節 感情制御のプロセス

### 1. 感情制御のプロセスモデル

感情に関する議論は紀元前に至るまで遡ることができるが、感情とは何か、と明確な問いを打ち出したのは William James であるとされている (Solomon, 2008)。以降、現在に至るまで多くの研究者が感情の様々な側面について研究報告を行い、議論が交わされてきた。

感情制御 (emotion regulation) は、精神分析やストレスコーピング、愛着といった幅広い研究領域において古くから検討されてきたテーマであるが (Gross & Barrett, 2011)、近年その研究報告は急速に増加している (Koole, 2009)。感情制御研究がこのような成長を遂げている理由の一つとして、測定機器の進歩に伴い情報処理がどのように行われているのかについての詳細な検討が可能となったことが挙げられる (Gross, 2013)。以前は当人の主観的報告、あるいは表出される行動の観察のみに基づく研究しか行うことができなかったのに対し、このような技術の発展を遂げてからは、刺激が与えられてから反応として表出されるまでの認知処理過程を研究対象とすることが可能となった。

また、感情制御のプロセスについて様々な実証データが集まることで、理論モデルも精緻化されてきた。本研究では、以下の二つの理由より、Gross (1998) によるプロセスモデルに着目する。一つは、このモデルが一連の実験研究の結果に基づき提唱されているためである。例えば不快感情を喚起させる動画を刺激として用いる (Richards & Gross, 2000) など、統制された状況下で得られた感情制御の効果が数多く報告されている。そしてもう一つは、プロセスモデルがおそらく近年で最も注目されている感情制御に関するモデルであることが挙げられる。後述する Emotion Regulation Questionnaire をはじめ、このモデルを想定した研究報告は盛んに行われており、知見が蓄積されている。またその多くがこのモデルの有用性を支持するものである (Gross, 2014) ことから、比較的頑健な感情制御モデルであると考えられる。

Gross (1998) が示したプロセスモデルでは、感情が生起する一連の過程の各段階に対応する形で、感情コントロールが行われると考えられている。Figure 1-2 に示したように、このモデルでは五つの段階、すなわち状況選択 (situation selection)、状況修正 (situation modification)、注意の方向づけ (attentional deployment)、認知的変化 (cognitive change)、反応調整 (response modulation) を想定する (Gross & Thompson, 2007)。はじめの四つの段階は感情が生起する以前の段階に生じる先行焦点型感情調節、残りの反応調整は感情が生起した後の段階に生じる反応焦点型感情調節と大きく分類される。また、状況選択と状況修正の過程では外部環境への直接的な制御が、注意の方向づけと認知的変化では自身の心理的、身体的状態などへの内的側面への制御が、そして反応調整の段階では、それまでの段階を経て生じた感情反応の調整が行われる (榎原, 2014)。例えば、嫌いな相手に出会わないようにしたり (状況選択)、出会ったとしてもすぐに離れる (状況修正) といった方略が

先に試みられるが、これが上手くいかなかったときには、その人以外のことを考えたり（注意の方向づけ）、その人の良いところを探そうとする（認知的変化）といった内的な処理が行われる。このような過程を経て不快な感情が生じたとしても、それを顔に出さないようにする（反応調整）ことで感情表出はコントロールされる。

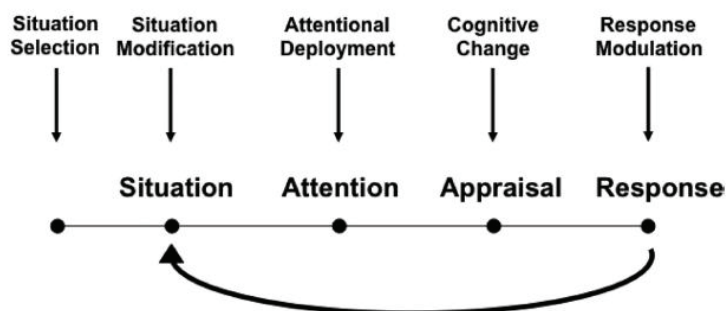


Figure 1-2. 感情制御のプロセスモデル (Gross & Thompson, 2007, p. 10)

## 2. Emotion Regulation Questionnaire

感情制御のプロセスモデル (Gross, 1998) の発展に大きく貢献した仕事の 하나가, Gross & John (2003) による Emotion Regulation Questionnaire (ERQ) の開発である。ERQ とは、先行焦点型感情調節を代表する再評価方略 (reappraisal) と、反応焦点型感情調節を代表する抑制方略 (suppression) の日常的な使用頻度の個人差を測定することを目的に作られた質問紙である。

再評価方略は認知的変化の一つであり、感情を刺激する状況や対象についての考え方、評価を変容させることで、その情緒的な衝撃を和らげようとする認知処理である。一方、抑制方略は反応調整の一つであり、感情表出行動を抑制することで行動的側面に影響を与える。再評価方略の使用はとりわけネガティブな感情の低減に効果的であり、中長期的な心身の健康にも寄与する (榊原, 2014) 一方で、抑制方略の使用は感情の経験自体に変化はなく、行動のみが抑制されるが精神的健康の維持には寄与しないとされる (John & Gross, 2004)。

## 3. 感情制御のプロセスモデルと反応産出過程

以上のように Gross (1998) が示したプロセスモデルによれば、外界の刺激を知覚してから様々な調整を受けることで感情がコントロールされる。ロールシャッハ反応の産出過程

についてこのプロセスモデルを合わせて考えると、次のような関連を想定することができる。ロ・テストの被検者は検査者により図版を手渡され、その刺激（インクプロット）に基づく反応の形成を求められるが、呈示される図版の種類や順序について被検者の意思は介さない。すなわち、自身を取り巻く環境そのものに対する働きかけには限界があり、その状況に遭遇しないよう回避する（状況選択）ことは不可能である。一方で、状況選択と同様に外部環境に対する直接的な働きかけとして位置づけられる状況修正に関しては、その図版に対する反応を終了すること（反応の拒否）が該当するプロセスであると考えられる。反応の拒否は被検者を理解するうえで重要な反応特徴であるが（片口, 1987）、非臨床群で生じることはまれである。また、上述の反応産出過程（Exner, 2003 中村・野田訳 2009; 辻, 1997）のなかで論じることが難しい。

続く注意の方向づけ以降の感情制御プロセスについては、反応産出に至るまでの一連の過程と対応すると考えられる。例えば反応産出が始まる段階では、視覚的走査（Exner, 2003 中村・野田訳 2009）や能動的な注意分配（辻, 1997）が被検者に求められるが、色彩刺激に対して行われるこれらの制御プロセスは、情緒的な刺激への関心の程度として解釈することが可能である。また、知覚される色彩の特徴に意味づけを行う過程、あるいは反応をどのように言語化し、表現するのかといった過程には、外界の刺激に対する認知的な処理やその表出の仕方が反映されるだろう。

したがって本論文では、Gross（1998）のプロセスモデルのうち、とりわけ注意の方向づけ、認知的変化、反応調整のプロセスに着目し、ロ・テストにおける色彩刺激の処理と感情制御について検討を行う。

## 第5節 本論文の目的

Rorschach (1921 鈴木訳 1998) による観察から提唱された色彩情動仮説は、様々な形で理論的展開や実証研究が行われてきた。しかし、臨床群の診断や質問紙を用いた実証研究は一貫した結果を示していない。また、認知課題を使用した研究や反応産出時の神経活動を計測した研究報告からも、色彩と情動の処理を明らかにする知見は得られていない(第2節)。ロールシャッハ反応の産出過程に関するレビューを行ったところ、いくつかのモデルは提唱されているものの、色彩や情動の処理に焦点を当てた反応産出過程を検討する必要があることが示唆された(第3節)。また近年の感情制御研究では、感情の生起や統制をプロセスから捉え、各々のポイントで様々な方法による感情のコントロールが行われることが報告されている(第4節)。

以上より、インクプロット上の色彩刺激の処理についてはこれまで提唱された反応産出モデル(Exner, 2003 中村・野田訳 2009; 辻, 1997)を踏襲しつつも新たなものを呈示する必要があることが示唆され、その際には、感情制御研究で示されているプロセスモデル(Gross, 1998)を参考とすることで、有意義な検討が可能となると考えられた。したがって本論文では、感情制御のプロセスモデルと対応づけながら、ロールシャッハ反応が産出されるまでの色彩刺激の処理を明らかにすることを目的とする。

特に、Gross が示した五つのポイントのうち、ロールシャッハ反応の産出過程でも重要な役割を果たすとされている注意制御(第2章)、そして先行焦点型感情調節、反応焦点型感情調節それぞれを代表する方略として再評価方略、抑制方略に着目し(第3章)、ロ・テストの色彩に関する反応との関連を検討する。さらに第4章の事例検討では、第2章、第3章で得られた知見についてロ・テストのプロトコルと併せて考察することで、反応産出過程における色彩刺激の処理と感情制御について詳細な検討を行う。最後に第5章では総合考察として、一連の研究から得られた結果から色彩刺激の処理と感情制御のプロセスを併せた反応産出モデルを呈示し、他のモデルとの比較を行う。

## 第2章 情動刺激への注意制御が反応産出過程に与える影響

本章では、認知課題の一つである Emotional Stroop task<sup>1</sup>（以下、EST）を用いて情動刺激への注意制御の個人差を測定し、ロールシャッハ指標との関連を検討することで、ロールシャッハ反応の産出過程について考察を行う。本章は研究1から研究3の三つの研究により構成される。研究1では、色彩反応を始めとする色彩に関するロールシャッハ指標とESTにおける干渉量の関連を検討することで、情動刺激に対する注意制御が彩色図版への反応産出過程にどのような影響を与えているのかについて明らかにする。研究2では、ESTの干渉量に反映されるロ・テスト上の認知処理についてより明確にするため、色彩に限らないより広範なロールシャッハ指標を用いた分析を行う。最後に研究3では、ESTの干渉量について情動価に基づく算出を行い、快刺激、不快刺激それぞれに対する注意制御機能と彩色図版への反応に見られる特徴の関連を検討する。

### 第1節 色彩刺激の処理と情動刺激への注意制御（研究1）<sup>2</sup>

#### 1. 目的

彩色図版上の色彩は被検者の注意を惹く刺激であり（Shachtel, 1966 空井・上芝訳 1975），ロールシャッハ反応が産出される過程に干渉的な作用をもたらす（Shapiro, 1960 田澤訳 2005）。また、このような注意制御は感情制御のプロセスにおいて重要な過程に位置づけられている（Gross, 1998）。

従来の色彩情動仮説では、インクプロット上の色彩刺激は情動価の伴った刺激として仮定され、その刺激に対する被検者の反応から日常場面における被検者の情動刺激との関わりや感情コントロールの様子が解釈される。しかしロールシャッハ反応の産出過程につい

---

<sup>1</sup> 本研究では、色彩の処理が介さない表情画像と情動語を刺激とした課題を採用した。Emotional Stroop task は、彩色された単語の色名を回答させ、情動語条件における反応時間の遅れを観測する課題を指すことが多い（Dresler, Mériaux, Heekeren, & Meer, 2009; Kaiser, Jacob, Domes, & Arntz, 2016; Mathews & MacLeod, 1985）。また、本研究で用いる表情画像と情動語を刺激とするタイプの課題は、word-face Stroop task（Başgöze, Gönül, Baskak, & Gökçay, 2015; Haas, Omura, Constable, & Vanli, 2006）、photo-word Stroop task（Beall & Herbert, 2008）など様々な名称で呼ばれているが、Strand, Oram, & Hammar (2013) を参考に Emotional Stroop task を課題名とした。

<sup>2</sup> 本研究は、松田（2018）を加筆修正したものである。



て認知心理学的な視点から検討した近年の研究（Asari et al., 2010b ; Ishibashi et al., 2016）を踏まえると、刺激の持つ情動性については不明確であり、検討が不十分であることが示唆された（第1章第2節）。したがって研究1では、認知課題を用いて情動刺激に対する注意制御の個人差を測定し、色彩に関するいくつかのロールシャッハ指標と比較することで、反応産出過程における色彩刺激の処理について検討を行う。なお、本研究の目的は以下の二つである。

一つは、FC : CF+C の比率に基づく色彩反応の優位性が、干渉刺激による干渉の程度と関連するか否かを明らかにすることである。Kron et al. (2009) は、色彩優位群が object-naming task で高い一致性効果を示した結果について、対象認知に関わる色彩の処理に特異的なのではなく、認知的葛藤処理における個人差が反映された可能性を指摘している。また、鈴木（2016a）の研究はこの仮説を支持しているものの、視覚モダリティを使った課題による検討が必要であると述べている。したがって Kron et al.の結果をより精緻に確認するために、色彩の処理が関与しない認知的葛藤課題を用いた検討が必要であると考えられる。鈴木が支持したように、色彩の優位性と関連する認知処理が色彩の処理に限らない、より一般的な認知的葛藤処理であるとすれば、色彩以外の刺激を用いた認知的葛藤課題においても色彩優位群が大きい干渉効果を示すことが予想される。

二つ目の目的は、FC : CF+C に留まらず、より包括的な指標から情動刺激による干渉との関連を検討することである。いくつかの研究（Malone et al., 2013; 生塩, 2002）が示している通り、色彩反応の反応数によって規定される群（形態優位群・色彩優位群）のみならず、各々の反応数に被検者の情動性が反映されていると考えられる。また、Shapiro（1960 田澤訳 2005）や Ishibashi et al.（2016）が指摘したように、ロ・テストの色彩は反応産出のプロセスに干渉的に作用することもあり、結果として彩色図版への初発反応の遅れや、形態水準の低下、知覚的混乱を招く可能性がある（Brosin & Fromm, 1940; Meyer, 1951）。したがって本研究では、色彩刺激の処理に見られるこれら特徴が情動刺激による干渉によって生じているか否かを明らかにすることをもう一つの目的とする。

## 2. 方法

### 2.1. 調査協力者

大学生 40 名（女性 34 名、男性 6 名、平均年齢 20.80 歳）が研究に参加した。全ての協力者に対し、口頭及び書面にて研究内容や個人情報の守秘、研究結果の公表などについて説明し、研究協力の同意を得た。なお、本研究は中京大学倫理審査委員会の承認を得て行われた。

## 2.2. 測度

### 2.2.1. ロ・テスト

スコアリングは片口法 (片口, 1987) に依拠し, 補足的に包括システム (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) の指標を使用した (Table 2-1)。

はじめに, FC : CF+C の比率に基づく群分けを行うために, FC, CF, C を算出した。また, 色彩反応の反応数を単純加算した値 (FC+CF+C) と加重加算した値 ( $\Sigma C$ ) についても同様に分析に用いた。これらの指標は片口 (1987) に基づき, 副分類には 0.5 反応分とする加重を与えている。CF や C といった色彩優位な反応や,  $\Sigma C$  が高い値を示すことは, 外界の刺激に対する反応性の高さや感情反応を統制することの苦手さとして解釈されていることから, 干渉刺激による干渉が大きいほど, これらの指標が高まることが予想される。

Table 2-1. 研究 1 で使用されたロールシャッハ指標

Rorschach variable	Variable definition
FC	色彩が用いられているが, 形態がより重要である反応。副分類には 0.5 の加重。
CF	形態が用いられているが, 色彩がより重要である反応。副分類には 0.5 の加重。
C	形態の影響を全く受けず, 色彩のみに基づいた反応。副分類には 0.5 の加重。
FC+CF+C	FC, CF, C の合計値。
$\Sigma C$	$FC \times 0.5 + CF + C \times 1.5$ の値。
F% (C)	F (彩色図版) / 総反応数 (彩色図版)
F+% (C)	形態水準が+か±の F (彩色図版) / F (彩色図版)
R+% (C)	形態水準が+か±の反応 (彩色図版) / 総反応数 (彩色図版)
INCOM (C)	一つの対象にありそうにないものや, 不可能な属性を帰属した反応。彩色図版への反応に限る。
FABCOM (C)	複数の異なる反応対象間のありそうにない関係や, 不可能な関係を示している反応。彩色図版への反応に限る。
CONTAM (C)	複数の概念が明らかに現実を無視して一つの反応に融合されている反応。彩色図版への反応に限る。
R1T (C)	彩色図版への初発反応時間の平均値。
R1T (C-A)	彩色図版への初発反応時間の平均値から無彩色図版への初発反応の平均値を減算した値。



また、インクブロット上の色彩を知覚することによって、反応産出過程に干渉的な影響が生じ得ることを多くの研究者が示している。ロールシャッハ反応産出時における fMRI のデータを分析に用いた研究からは、彩色図版ではとりわけ注意制御の活動が求められ、色彩刺激によって形態認知の過程が妨害され得ることが報告されている (Ishibashi et al., 2016)。また、ロールシャッハ反応産出時には、情動的な神経活動が非典型的な反応産出を促進させる (Asari et al., 2010b) ことから、インクブロットの形態を適切に捉え、反応として利用できるか否かについても本研究では着目する。したがって、彩色図版に対する形態反応や形態水準を表す  $F\% (C)$ ,  $F+\% (C)$ ,  $R+\% (C)$  をそれぞれ指標とした。

さらに、色彩による干渉は形態把握の処理に限らず、より広範な認知処理に影響することが予想される。そのため本研究では、包括システム (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) において「不適切な結合 (p. 173)」として位置づけられている、不調和な結合 (INCOM), 作話的結合 (FABCOM), 混交反応 (CONTAM) を分析対象とし、彩色図版上での反応数をそれぞれ INCOM (C), FABCOM (C), CONTAM (C) を指標とした。情動刺激による干渉を受けやすい人ほど、彩色図版上でこれらに該当する反応が多く産出されることが予想される。

最後に、カラーショックの指標 (Brosin & Fromn, 1940; Meyer, 1951) を参考に、彩色図版への反応の遅れを表す指標を分析に加えた。分析に用いた指標は、彩色図版への平均初発反応時間と無彩色図版への初発反応時間との差を表す,  $R1T (C)$ ,  $R1T (C-A)$  であった。

### 2.2.2. Emotional Stroop task

EST は従来のストループ課題を基に考案された認知課題であり、表情画像と特定の情動価を有する単語（以下、情動語）を刺激として使用する。この課題では、表情画像に重ねて情動語を呈示し、ターゲットとなる刺激の情動価を判断し、速やかに回答することを協力者に求める。EST は、表情画像と情動語それぞれの情動価の組み合わせによる二つの条件で構成される。一致条件では、笑顔の表情画像と喜びを表す情動語、あるいは悲しそうな表情画像と悲しみを表す情動語のように、表情と情動語の持つ情動価が一致する組み合わせで刺激が呈示される。一方、不一致条件では、笑顔の表情画像と悲しみを表す情動語のように、表情と情動語の持つ情動価が一致しない組み合わせとなる。

一般的なストループ干渉が生じるのと同様に、ターゲットではない刺激（干渉刺激）の知覚によって不一致条件の反応時間は遅れる傾向にあり (Başgöze et al., 2015; Haas et al., 2006), 一致条件との反応時間の差（以下、干渉量）に情動刺激への注意制御の程度が反映される。すなわち、干渉量が大きいほど、情動刺激から干渉を受けやすいことを示唆する。

EST に用いた刺激材料は以下の通りである。The Japanese Female Facial Expression (JAFPE) Database (Lyons, Akamatsu, Kamachi, & Gyoba, 1998) より「neutral」, 「happiness」, 「sadness」

の3表情、計60の表情画像を使用した。

情動語には伊里・望月（2012）の「悲しみ語」,「喜び語」を使用した。それぞれ悲しみ,喜びを強く感じると評定された二字熟語であり,各32語から構成されている<sup>3</sup>。ESTでは表情画像に重ねて情動語を呈示するため,文字数の差異が表情画像からの情動認知に影響を与える可能性がある。したがって,本研究では文字数が統制されたこの刺激を採用した。

### 2.3 手続き

調査は個別法にて行われた。全ての調査協力者に対しロ・テスト,ESTの順で課題を実施し,ロ・テスト終了時に必要に応じて10分程度の休憩時間を与えた。ロ・テストは全て筆者が片口法（片口,1987）に準拠し実施した。

ESTでは,同時に呈示される表情画像と情動語のどちらかをターゲットとし,その情動価を回答するよう協力者に求める。両条件を比較したBeall & Herbert（2008）では,情動語をターゲットとした条件の方が大きい干渉効果を示したことから,本研究では情動語を標的とした。したがって協力者は,呈示される情動語の意味判断を行い,「悲しい」か「嬉しい」のいずれに該当するかをキー押しによって回答することを求められた（Figure2-1）。刺激呈示,反応の記録はノートPC（DELL XPS 9333）のモニタ及びキーボードによって行われ,心理実験ソフト（Inquisit ver.4.0.8.0, Millisecond 社）が用いられた。なお,ESTの刺激サイズ（縦×横）は表情画像が15.2cm×11.6cm,情動語は1.5cm×3.5cmであった。

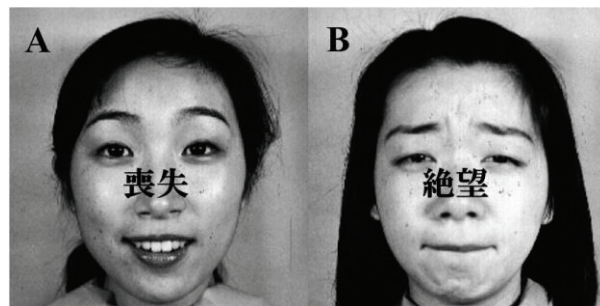


Figure 2-1. ESTの呈示刺激(A：不一致条件, B：一致条件)

<sup>3</sup> 「悲しみ語」は, 絶望, 死別, 号泣, 喪失, 通夜, 悲劇, 死亡, 悲惨, 悲嘆, 別離, 死去, 差別, 失望, 偏見, 幻滅, 失意, 倒産, 悪口, 悲哀, 解雇, 葬儀, 不和, 悲鳴, 後悔, 落胆, 悲愴, 敗戦, 傷心, 不信, 悔恨, 憂鬱, 拒否の32語, 「喜び語」は, 成功, 愛情, 笑顔, 幸福, 賞与, 感謝, 達成, 幸運, 勝利, 充実, 満点, 最高, 成長, 傑作, 活躍, 好転, 歓喜, 賞金, 安心, 有望, 信頼, 友情, 好評, 歓迎, 結婚, 人気, 友達, 満足, 誕生, 健康, 給与, 応援の32語である（伊里・望月, 2012）。

EST は 10 試行の練習試行が呈示された後に、本試行へと移った。練習試行では「悲しみ語」, 「喜び語」より 5 語ずつが無作為に選ばれ、表情画像「neutral」に重なる形で呈示された。本試行は一致条件と不一致条件の 2 条件で構成され、各 62 試行（計 124 試行）がランダムな順序で呈示された。一致条件では表情画像と情動語の感情価が一致する組合せ（「sadness」×「悲しみ語」, 「happiness」×「喜び語」）, 不一致条件では感情価が一致しない組合せ（「sadness」×「喜び語」, 「happiness」×「悲しみ語」）となるよう、無作為に刺激が組み合わせられた。予備調査に基づき反応可能な時間を刺激呈示から 3000ms とし、この時間内に有効な反応が入力されなければ誤答とした。

## 2.4 分析

### 2.4.1 ロールシャッハ反応のスコアリング

ロールシャッハ反応のスコアリングは以下の手続きで行われた。はじめにスコアの信頼性を高めるために 10 名分のプロトコルを、筆者と臨床心理士の 2 名で独立してスコアリングを行った。なお、ロ・テスト実践経験はそれぞれ 1 年と 25 年であった。その後相互にスコアリングのチェックを行い、スコアが不一致であった項目については協議したうえで決定した。スコアリングチェックの過程で確認した基準に従い残りの 30 名分のプロトコルを筆者がスコアリングし、判断が難しいスコアについてはその都度、協議した。

CONTAM は不適切な知覚の結果生じる反応として位置づけられているが、非臨床群ではほとんどスコアされない反応であり（西尾・高橋・高橋, 2017）, 本研究の協力者からも出現しなかった。したがって、以降の分析から除外された。

### 2.4.2 EST の分析

正答率に基づき協力者 2 名を分析から除外した<sup>4</sup>。したがって分析対象者は 38 名（女性 32 名, 男性 6 名, 平均年齢 19.79 歳）であった。

Beall & Herbert (2008) を参考に、EST は正答試行のみを分析の対象とした。また協力者ごとに両条件の平均反応時間,  $SD$  を算出し、反応時間が平均反応時間から  $2.5SD$  以内であった反応のみを分析に使用した。分析対象となる反応で再度、各条件における反応時間の平均値を算出し、不一致条件の値から一致条件の値を減算したものを干渉量とした。

38 名の平均反応時間について条件間で比較したところ、不一致条件の平均反応時間の方が長いことが示され ( $t(37) = 5.81, p < .001, d = 0.27$ )、表情画像による干渉が生じていることが確認された。

---

<sup>4</sup> 除外された調査協力者の EST の成績は、不一致条件における正答率がそれぞれ 54.84%, 61.29%と、同条件における全協力者の平均値 (90.34%) よりも 1SD (16.38%) 以上低かった。誤って表情画像の判定を行った場合においても 50% の正答率を示すことから、正確に教示を理解していることが疑われた。

### 3. 結果

はじめに、Kron et al. (2009) や鈴木 (2016b) の結果との比較を行うために、分析対象の調査協力者を形態優位群 ( $FC > CF + C$ ,  $n = 16$ )、色彩優位群 ( $FC \leq CF + C$ ,  $n = 22$ ) の2群に割り当てた。Kron et al. (2009) は  $FC = CF + C$  を示した調査協力者を独立した群 (No Direction) として扱っているが、本研究では  $FC = CF + C$  の協力者が5名と少なかったことから、鈴木 (2016a) と同様に  $FC > CF + C$  を形態優位群、 $FC \leq CF + C$  を色彩優位群とした<sup>5</sup>。

干渉量と不一致条件における正答率について群間の比較を行ったところ、形態優位群に比べて色彩優位群は干渉量が有意に大きいこと ( $t(36) = 2.61, p = .013, d = 0.88$ )、そして正答率については有意な差が認められないこと ( $t(36) = 0.83, p = .414$ ) が示された (Table 2-3)。

Table 2-3. EST の干渉量及び正答率の比較

	全体 ( $n = 38$ )		形態優位群 ( $FC > CF + C$ )		色彩優位群 ( $FC \leq CF + C$ )		$t$	$d$
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
反応時間 (ms)								
一致条件	580.51	87.88	560.29	69.36	595.22	98.15		
不一致条件	605.40	102.94	573.05	70.36	628.93	117.29		
干渉量 (ms)	25.37	28.34	12.29	21.28	34.90	29.44	2.61*	0.88
正答率 (%)	93.63	5.21	94.46	5.27	93.04	5.21	0.83	

\*  $p < .05$

<sup>5</sup> 片口法において反応は主分類、副分類に分けられ、FC, CF, C の集計に際して副分類の反応には0.5の加重が与えられる。しかし Kron et al. (2009) や鈴木 (2016a) では包括システムによるコーディングが行われていることから、全ての決定因に対して加重することなく得点が与えられ、その値に基づき群分けがされている。したがって本研究においても形態優位群、色彩優位群に分類する場合においては包括システムの基準に準拠し、FC, CF, C に加重点を与えていない。

次にすべてのロールシャッハ指標と EST の干渉量について、Spearman の順位相関係数を求めた (Table 2-4)。分析の結果、FC、CF、C、FC+CF+C、 $\Sigma C$  はそれぞれ有意な相関関係は認められなかった。また、形態反応や反応の形態水準に関する指標についても同様に、有意な結果は得られなかった。知覚的な認知処理に関する指標では、INCOM (C) が EST の干渉量と有意な正の順位相関を示した一方で ( $r_s = .381$ ,  $p < .05$ )、FABCOM (C) については有意な順位相関が認められなかった。彩色図版への初発反応の遅れについては、RIT (C)、RIT (C-A) と干渉量との間に有意な関連を示さなかった。

Table 2-4. EST の干渉量とロールシャッハ指標の相関

Rorschach variable	Descriptive static				Correlation	
	Max	Min	Mean	SD	$r_s$	$p$
FC	7.5	0	2.16	1.95	-.107	.524
CF	6.5	0	1.89	1.41	.115	.493
C	2.5	0	0.26	0.57	-.189	.256
FC+CF+C	12.5	0.5	4.32	2.78	.026	.875
$\Sigma C$	10.0	0.5	3.37	2.21	.047	.780
F% (C)	73.3	0	38.57	17.16	.004	.981
F+% (C)	100.0	0	66.60	25.28	-.140	.401
R+% (C)	85.7	30.0	61.08	11.33	-.088	.598
INCOM (C)	2	0	0.34	0.58	.381*	.018
FABCOM (C)	5	0	0.82	1.23	.167	.318
RIT (C)	55.6	5.0	15.83	12.65	.298†	.069
RIT (C-A)	18.2	-14.4	1.66	7.53	.227	.170

†  $p < .10$  \*  $p < .05$

#### 4. 考察

本研究は以下の二つの目的に基づき、ロ・テストの色彩に関するいくつかの指標と EST の干渉量における関連を検討した。目的の一つは、FC : CF+C の比率がストループ様課題における干渉効果と関連を示した Kron et al. (2009) の結果を、色彩の処理を必要としない課題で再考することであった。そしてもう一つの目的は、EST による情動刺激による干渉が、彩色図版への反応にどのように現れるのかについて検討することであった。



#### 4.1. 認知的制御と色彩反応の関連

Kron et al. (2009) の結果と同様に、CF や C を多く産出する色彩優位群は形態優位群に比べて大きい干渉量を示した。したがって色彩の処理を介さない認知的葛藤課題においても、色彩優位群は課題非関連な刺激から干渉を受けやすいことが示唆された。この結果は、色彩優位群の認知処理の特徴は対象認知における色彩の処理に限定されるのではなく、認知的葛藤処理の個人差から説明できるとする Kron et al. の仮説を、鈴木 (2016a) 同様に支持するものであった。したがって色彩優位群は、感覚モダリティや刺激特徴に関係なく、不必要な情報に注意が向かないようにするといった認知的制御を苦手とする傾向にあることが示唆される。

Kron et al. (2009) や鈴木 (2016a) の研究に基づくと、本研究の形態優位群と色彩優位群に見られる干渉量の差は、認知的制御機能の個人差が反映されたと考えることが可能である。EST で求められるような認知的葛藤処理に関する臨床心理学領域の研究では、ADHD (Song & Hakoda, 2011) や全般性不安障害 (Etkin, Prater, Hoefl, Menon, & Schatzberg, 2010) の患者群が非臨床群よりも大きいストループ干渉を示すことが指摘されている。またストループ課題 (MacDonald, Cohen, Stenger, & Carter, 2000) や EST (Haas et al., 2006) の実施時には前帯状皮質の活動が活発になることが報告されているが、前帯状皮質は感情制御プロセスで重要な役割を担っている (Ochsner & Gross, 2008)。これらの臨床心理学領域、神経生理学領域の報告を考慮すると、色彩優位群が衝動的であり、情動反応の制御が難しいとされる背景には、前帯状皮質の活動を含む認知的制御の個人差が関わっている可能性を呈示できるだろう。すなわち、形態に注意を向け、様々な刺激特徴を統合するといったロールシャッハ反応の産出に必要な処理を色彩という注意を惹く刺激から干渉されないことが、形態優位群に見られる認知処理の特徴であり、この特徴が日常生活でも機能することで情動反応がコントロールされていると考えられる。

#### 4.2. 情動刺激による干渉と色彩反応の産出過程

相関分析の結果、FC, CF, C, FC+CF+C,  $\Sigma C$  はそれぞれ、EST の干渉量と有意な関連が認められなかった。したがって、情動刺激への注意の抑制は、色彩反応の産出過程に影響しないことが明らかにされた。また、インクプロットの形態把握や形態水準に関する指標についてはいずれも有意な結果が得られなかった。したがって、形態に注意を向ける過程への色彩刺激による干渉 (Ishibashi et al., 2016; Shapiro, 1960 田澤 2005) という反応産出過程に見られる特徴が被検者の情緒的反応によって生じていることは、本研究からは実証されなかった。さらに、情動刺激による干渉が生じやすい人は、彩色図版上で INCOM に該当する反応が産出されやすいことが示唆された。INCOM は被検者の認知の不注意や思考のずれを表すと解釈される (Exner, 2003 中村・野田 2009) ことから、ロールシャッハ反応の産出に際して情緒的な刺激から注意を解放できないことで、不適切とされる認知処理が生じやすいと推測される。

辻 (1997) が示した反応産出過程によると、インクブロットの形態や色彩を感受し、被検者のなかに蓄積された記憶像との比較検討がなされ、反応が決定される。FC が産出されるためには明瞭な刺激特徴をもつ色彩への反応を抑制しつつ、形態に対して能動的に注意を向ける必要があることを Schachtel (1966 空井・上芝訳 1975) は指摘しており、この処理の違いによって産出される色彩反応のスコアは変化し得ると考えられる。例えば、インクブロットの色彩の印象から「花」を認めた段階で言語化すれば CF がスコアされるが、色彩への反応を抑制しつつ形態の特徴に言及することで「チューリップ」のように概念の規定性を高めることができれば FC がスコアされる (片口, 1987)。

本研究では、CF や C を多く産出する色彩優位群の方が形態優位群に比べて大きい干渉量を示した一方で、干渉量の大きさが色彩反応の反応数の増加としてロ・テスト上に現れるわけではないことが示された。これらの結果の違いを考慮すると、情動刺激による干渉に見られる個人差は、色彩を決定因として反応に取り入れるプロセスではなく、色彩と形態の両刺激を統合しようとするときに生じる色彩への反応を抑制する過程に反映されることが示唆される。すなわち、色彩へ注意が向きやすく、感受された刺激により想起された概念に対して、十分な比較検討が行われないうまま色彩の印象レベルで反応するのか (CF)、あるいは色彩を取り入れながらも形態的特徴に十分な注意を向けて反応するのか (FC) といった反応産出過程の違いが確認された。

また、INCOM は被検者の認知の不注意や思考のずれを表すと解釈される (Exner, 2003 中村・野田訳 2009)。本研究の結果は、ロールシャッハ反応の産出に際して情緒的な刺激から注意を解放できないことで、不適切とされる認知処理が生じやすくなることを示している。一方で、同様に知覚的な認知過程の混乱を示すとされる FABCOM は相関関係が認められなかった。反応に不適切な結合が生じた場合にスコアされる点では共通している両指標が異なる分析結果を示したが、この結果の違いを説明する理由の一つとして不適切な色彩の結合が挙げられる。INCOM がコーディングされるための基準の一つに概念と一致しない色彩の利用 (例えば「赤いクマ」) が含まれており、色彩刺激から注意を逸らすことが困難であったことが INCOM の産出を促した可能性がある。辻 (1997) は、色彩体験と形態体験のそれぞれに縛られず、一つの反応に融合することを超越性という概念から説明しているが、INCOM は、インクブロットの色彩刺激により干渉 (Shapiro, 1960 田澤訳 2005) が生じ、形態から規定された概念に対して不一致である色彩を付与させるという認知的混乱、あるいは超越性の破綻が起こった結果産出される反応であると考えられる。INCOM が生じる過程は、はじめは形態と色彩を分化させ、形態に基づく記憶像との照合を適切に行えたものの、受動的に知覚される色彩から注意を解放し続けることが困難となり、結果として形態と色彩が不適切な結合を起こした状態で表出されていると推測される。色彩情動仮説の文脈からは、客観性を重んじた行動とそれに拮抗する内的な感情が同時に表出されているような状態であることが窺え、最終的な反応に至るまで情動刺激から注意を解放することが困難であったことがそのプロセスに大きく関わっていると考えられる。

しかし、このプロセスにどの程度、被検者の情動的な活動が関与していたかは疑問が残る。Shachtel (1966 空井・上芝訳 1975) が述べているように、色彩刺激と情動刺激の認知処理に共通性が存在するのであれば、情動刺激から干渉されやすい人ほど色彩刺激へ注意が捕捉されやすいことが推測される。一方で、形態から連想された反応内容と色彩の不一致を解決する認知処理は、Kron et al. (2009) が用いたようなストループ様課題に求められる処理と同様であるため、単に不要な刺激特徴を排除することが困難であったとも考えられる。これらのプロセスに関する仮説についてはさらなる検討を要する。

インクプロットの形態把握や形態水準に関する指標についてはいずれも有意な結果が得られなかった。F% (Exner 法では Lambda) は自分の内的なあるいは外的な環境に対して注意を向けず、外界と距離を置こうとする傾向を示すとされていることから (Exner, 2003 中村・野田訳 2009)、F% (C) はその人が外界の情動刺激や生起した感情からどの程度距離をとるのかについての情報を提供すると考えられる。色彩反応の産出過程について上述したように、情動刺激による干渉が生じるのは色彩を取り入れた後の過程であることが推測される。したがって、F のように色彩刺激に言及せず距離を置いた反応が産出される過程には、情動刺激への注意の向きやすさが明確に現れないことが示唆された。

彩色図版に多くの F 反応を与えるという特徴は情動刺激に対する反応の乏しさとして解釈できる。しかし、この態度の背景には刺激に対する無関心さがあるのか、または干渉を受けやすいために刺激に接触することへの不安があるのか、といった部分まで評価することは難しいと言える。

#### 4.3. 情動刺激による干渉と初発反応の遅れの関連

彩色図版への反応の遅れはカラーショックの一指標とされているが (Brosin & Fromm, 1940; Meyer, 1951)、R1T (C) 及び R1T (C-A) の結果より、情動刺激による干渉と彩色図版への初発反応の遅れに明確な関連は示されなかった。Klopfer & Davidson (1962 河合訳 1964) は彩色図版への初発反応の遅れについて、情緒的刺激によって被検者の反応過程が妨害されたことを示すと解釈しているが、一方で彩色図版への反応時間に影響する被検者の要因は他にも存在する。Rapaport et al. (1968) は色彩への反応は衝動的なものであり、そこへ形態を統合するためには反応を遅延させる必要があることを示し、CF や C といった色彩優位な反応はこの遅延が行われなかった結果産出されるとしている。すなわち CF や C といった色彩優位な反応は衝動的かつ時間を要さず産出されると考えられており、実験研究においてもこれらの反応は産出に際して必要とする時間が短いことが示されている (Siipola & Taylor, 1952)。本研究においても色彩優位群の方が EST の干渉が大きかったことを考慮すると、情動刺激から干渉を受けやすい人は形態把握を十分に行うことなく衝動的な反応を示しやすい特徴をもつことが示唆される。したがって R1T (C)、R1T (C-A) へ影響する認知処理は多岐にわたることが、初発反応時間の一指標では情動刺激による干渉の個人差を捉えられなかった理由の一つと考えられる。



## 第2節 インクプロット上の刺激選択と注意制御（研究2）<sup>6</sup>

### 1. 目的

研究1では、情動価の伴った表情画像を干渉刺激としたESTを用いて、ロ・テストの色彩反応を中心とした指標との関連を検討した。FC:CF+Cの比率に基づく分析では色彩優位群の方がESTの干渉量が多いことを示し、この結果をKron et al. (2009) や鈴木 (2016a) の知見と併せて考察すると、情動価の処理に限らず課題非関連な刺激への注意制御機能、すなわち不要な情報を無視し、その時必要な情報に注意を向ける力が両群に見られる特徴の違いの一つと考えられる。

色彩刺激による反応過程への干渉(Shapiro, 1960 田澤訳 2005)が生じる重要な要因の一つは、視覚刺激の中で有彩色は注意を惹きやすい特徴であり、それ故、その他の反応形成に必要な刺激に十分注意を向けることが困難な状況が生じるためであると推測される。すなわち、反応産出過程で注意を惹きやすい色彩刺激から注意を解放することができるか否かが、カラーショックのような現象の出現と関連すると考えられる。

しかし、ロ・テストのインクプロットは様々な刺激特徴によって構成されており、色彩ほど明瞭な特徴ではないが、反応形成に干渉的に作用する。例えば、III図版のD2領域(片口, 1987)に人間像を見たとき、頭部の突出部を無視することができなければ「鳥人間(INCOM)」のような不適応のサインとされる反応が産出される。すなわち、研究1で示されたINCOMと干渉量の相関関係や、色彩優位群が大きい干渉量を示した結果について、色彩と情動が直接的に関連するのか(Rorschach, 1921 鈴木訳 1998)、あるいは単に注意制御の苦手さが反映されているのか(Kron et al., 2009)が不明確である。したがって本研究では研究1と同様にESTの干渉量を用い、色彩が関与しない反応特徴との関連を検討する。

### 2. 方法

#### 2.1 調査協力者

研究1と同様に、ESTの不一致条件における正答率が低かった2名を除く38名が分析対象となった。

---

<sup>6</sup> 本研究は、松田・馬場 (2017) を加筆修正したものである。

## 2.2 測度

### 2.2.1 ロ・テスト

研究 2 では、注意制御の機能が関わりと推測される反応産出過程について、主に以下の三つのプロセスに着目し、指標の選定を行った (Table 2-5)。

一つは反応領域を規定するための認知過程である。インクブロットの一部を反応領域として用いるためには、他の領域への注意を抑制しながら反応を産出する必要がある。すなわち、特定の反応領域をインクブロット全体から切り取り、他の領域に反応せずにおくためには注意の制御機能が十分に働く必要があり、この処理が上手く介さなければ、反応領域が拡張することが予想される。またインクブロット全体を使用した反応であっても、部分反応が漠然と並べられた反応と複雑に統合された反応とではその認知過程や解釈は異なり、前者は不必要に領域を用いているのに対し、後者は必要に応じた建設的な統合が行われている。これらの反応の差異を考慮するため、全体反応や結合反応 (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) の反応数や形態水準に着目した検討を行う。

二つ目は反応の形態水準に関するものである。高い形態水準の反応を産出するためにはインクブロットの形態を注意深く観察する必要があるが、色彩や濃淡といった刺激の知覚によって形態知覚が干渉され得ることも指摘されている (Shachtel, 1966 空井・上芝訳 1975)。すなわち、多彩な刺激に目が向いてしまうことで形態特徴の的確な把握が困難となることが予想されるが、このような反応産出過程における特徴は、形態水準の高さに現れると考えられる。

最後は不適切な知覚処理に関するものであり、刺激への注意制御が困難であるほど図版上の様々な刺激に注意が向いてしまい、INCOM や FABCOM のような不適切な結合反応が生じやすいと考えられる。

Table 2-5. 研究 2 で使用されたロールシャッハ指標

Rorschach variable	Variable definition
W%	W または Wc の反応数／総反応数 (R)。
W+%	形態水準が+か±の W または Wc／W または Wc の反応数。
結合反応	二つ以上の対象に関係性が説明される反応。
結合反応+%	形態水準が+か±の結合反応／結合反応の反応数。
R+%	形態水準が+か±の反応／総反応数 (R)。
INCOM	一つの対象にありそうにないものや、不可能な属性を帰属した反応。
FABCOM	複数の異なる反応対象間のありそうにない関係や、不可能な関係を示している反応。

### 2.2.2 EST

研究 1 と同様に、全ての協力者の干渉量が算出された。

## 3. 結果

すべてのロールシャッハ指標と EST の干渉量について Spearman の順位相関係数を求めた (Table 2-6)。W%, 結合反応は干渉量と有意な相関関係を示さなかったことから、全体反応や結合反応といった反応領域に関する指標と注意制御機能の関連は確認されなかった。また、これらの反応の形態水準の高さを示す W+%, 結合反応+%においても同様の結果であった。形態水準の高さに関する指標である R+%についても相関関係が認められなかった。INCOM と FABCOM については異なる結果を示し、INCOM は干渉量と有意な正の順位相関を示した ( $r_s = .406$ ,  $p < .05$ ) のに対し、FABCOM と干渉量の間の順位相関は非有意であった。

Table 2-6. EST の干渉量とロールシャッハ指標の相関

Rorschach variable	Descriptive static				Correlation	
	Max	Min	Mean	SD	$r_s$	$p$
W%	85.71	7.41	51.70	21.94	.104	.535
W+%	90.91	33.33	59.32	14.54	-.156	.349
結合反応	13	0	5.29	3.37	-.085	.610
結合反応+%	100	0	43.98	25.69	.061	.717
R+%	81.82	50.00	67.29	8.40	-.198	.233
INCOM	3	0	0.47	0.76	.406*	.011
FABCOM	5	0	0.74	1.35	.145	.385

\*  $p < .05$

## 4. 考察

本研究の目的は注意制御の個人差に着目し、この機能がどのようなロールシャッハ反応の産出に関わっているのかを検討することであった。注意制御の関与が推測される三つのプロセスに基づき分析を行い、以下のような結果が得られた。

#### 4.1. 注意制御と反応領域や結合反応の関連

はじめに、W%及び結合反応と干渉量に有意な相関関係が認められなかったことから、本研究で用いた EST による干渉の程度が、全体反応や結合反応の産出と関連するという結果は得られなかった。また、これらの反応の形態水準に着目した分析においても、同様の結果が得られている。したがって、反応領域をコントロールする際に求められる注意制御の機能は、EST の干渉量には反映されにくいと考えられる。

この結果に対して考えられる一つの説明として、注意の能動性の違いが挙げられる。W を多く産出する人は環境から多くの情報を入手しようと試みる傾向にある (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) とされており、その解釈仮説には注意の能動性が強く関与することが示唆されている。しかし、EST で求められるのは干渉刺激への注意の抑制であり (Başgöze et al., 2015), 上述のプロセスとは質が異なるため、反応領域に関するロールシャッハ指標と関連しなかったと考えられる。

また、全体反応にも構成の違いによっていくつか種類が存在する (Piotrowski 1957 上芝訳 1980) こと、あるいは認知資源を十分に活用しにくい実験条件では統合的な全体反応の産出が抑制される (Charek, Meyer, & Mihura, 2016) ことから、全体反応の種類に基づく検討も今後必要とされるだろう。

#### 4.2. 注意制御と不適切な知覚プロセスの関連

不適切な結合の結果生じると考えられる反応に関しては、EST の干渉量との関連が部分的に認められた。FABCOM は干渉量と有意な相関関係を示さなかった一方で、INCOM は正の相関関係を示していることから、注意制御が困難な人ほどとりわけ INCOM が多く産出される傾向にあると言える。したがって、情緒を刺激されるような場面に特異的なわけではなく、日常生活における様々な場面で刺激されやすい人はロールシャッハ反応の産出過程において INCOM を始めとする不適切な認知処理が行われる傾向にあることが示唆された。

しかし、本研究で使用した指標の INCOM には研究 1 で使用された INCOM (C) も含まれており、両指標の平均値も大きく異ならない (INCOM = 0.47, INCOM (C) = 0.34) ことから、INCOM (C) の影響を強く受けていることが予想される。したがって、色彩や情動の処理を排した反応として適切であるかは疑問が残る。

#### 4.3. 本研究のまとめ

以上より、本研究では EST の干渉量と注意制御が関わりと推測されるいくつかのロールシャッハ指標の関連を検討した。分析の結果は研究 1 同様、INCOM が干渉量と有意な関係を示したが、他のロールシャッハ指標については有意な相関関係が示されなかった。これらの結果は、ロ・テストの反応産出過程と EST の干渉量における関連が単純な注意制御の処理から説明できるわけではないことを示唆している。

### 第3節 色彩への反応と注意バイアス（研究3）

#### 1. 目的

研究1では情動刺激による認知過程への干渉が、色彩への反応の一部と関連することが示された。しかし、感情制御を含む感情のプロセスは処理される刺激の情動価によって異なり、ロールシャッハ反応に表現されるその人の情動体験も多様である。例えば、不安な人は自身にとって脅威となり得る刺激に対して注意が向きやすく（Eysenck, 1992）、このような情報処理における偏りは注意バイアスと呼ばれる。日常生活において嫌なエピソードに対して注意が向きやすいといった注意バイアスはうつ病の発症、維持に関わる主要な要因であるとされている（伊里・望月, 2016）など、私たちの精神的健康や不適応的な感情調整と深く関わっている。

研究1, 2で分析に用いたESTの干渉量は、干渉刺激の2種類の情動価（「sadness」, 「happiness」）を分類することなく算出されていることから、情動価の種類による効果の相違は確認されていない。言い換えると、悲しそうな顔（「sadness」）のようなネガティブな刺激に注意が向きやすい人もいれば、笑った顔（「happiness」）のようなポジティブな刺激に注意が向きやすい人も存在し、両者の情報処理の有り様は大きく異なると考えられる。したがって研究3では、ネガティブ情動刺激、ポジティブ情動刺激によって生じる干渉をそれぞれ求め、ロ・テストにおける色彩刺激の処理にどのように関連するのかについて明らかにすることを目的とする。

#### 2. 方法

##### 2.1 調査協力者

研究1, 2と同様に、ESTの不一致条件における正答率が低かった2名を除く38名が分析対象となった。

##### 2.2 測度

###### 2.2.1 ロ・テスト

研究1と同様、色彩反応の反応数との関連を検討するためにFC, CF, C, 及び、単純加算した値（FC+CF+C）と加重加算した値（ $\Sigma C$ ）を分析に用いた。研究1では色彩優位群（FC  $\leq$  CF+C）は形態優位群に比して大きい干渉量を示したが、色彩優位群がどのような種類の情動刺激に高い反応性を示すのかを検討する必要があるだろう。したがって研究1と同様、色彩反応に基づき群分けを行い、ESTのそれぞれの干渉量について比較を行う。

また研究1の結果より、INCOM（C）やR1T（C）が有意水準、有意傾向水準でそれぞれ正の順位相関を示していることから、より詳細な検討を加える必要があると考えられる。



したがって、彩色刺激からの干渉を示唆するこれらのサインがどのような種類の感情の処理に基づくのかを研究3で検討するため、研究1で使用した INCOM (C), FABCOM (C), RIT (C) 及び RIT (C-A) を本研究でも採用する (Table 2-7)。

Table 2-7. 研究3で使用されたロールシャッハ指標

Rorschach variable	Variable definition
FC	色彩が用いられているが、形態がより重要である反応。副分類には0.5の加重。
CF	形態が用いられているが、色彩がより重要である反応。副分類には0.5の加重。
C	形態の影響を全く受けず、色彩のみに基づいた反応。副分類には0.5の加重。
FC+CF+C	FC, CF, Cの合計値。
$\Sigma C$	$FC \times 0.5 + CF + C \times 1.5$ の値。
INCOM (C)	一つの対象にありそうにないものや、不可能な属性を帰属した反応。彩色図版への反応に限る。
FABCOM (C)	複数の異なる反応対象間のありそうにない関係や、不可能な関係を示している反応。彩色図版への反応に限る。
RIT (C)	彩色図版への初発反応時間の平均値
RIT (C-A)	彩色図版への初発反応時間の平均値から無彩色図版への初発反応の平均値を減算した値。

## 2.2.2 EST

研究1では一致条件と不一致条件における反応時間の差を干渉量としたが、研究3では4条件、すなわち「sadness」表情×「悲しみ語」条件、「sadness」表情×「喜び語」条件、「happiness」表情×「悲しみ語」条件、「happiness」表情×「喜び語」条件より2種類の干渉量（ネガティブ干渉、ポジティブ干渉）を算出した。

ネガティブ干渉は「sadness」表情×「喜び語」条件における平均反応時間から「happiness」表情×「喜び語」条件の平均反応時間を減算することで算出され<sup>7</sup>、この値が大きいほど

<sup>7</sup> ネガティブ干渉 = RT (「sadness」×「喜び語」: Figure2-2, B) - RT (「happiness」×「喜び語」: A)  
 ポジティブ干渉 = RT (「happiness」×「悲しみ語」: C) - RT (「sadness」×「悲しみ語」: D)

「sadness」表情による干渉が大きいことから、ネガティブ情動刺激に注意が向きやすいと考えられる。また、ポジティブ干渉は同様に「happiness」表情×「悲しみ語」条件における平均反応時間から「sadness 表情」×「悲しみ語」条件の平均反応時間を減算することで算出され、ポジティブ情動刺激への注意を向きやすさを表すと考えられる (Figure 2-2)。

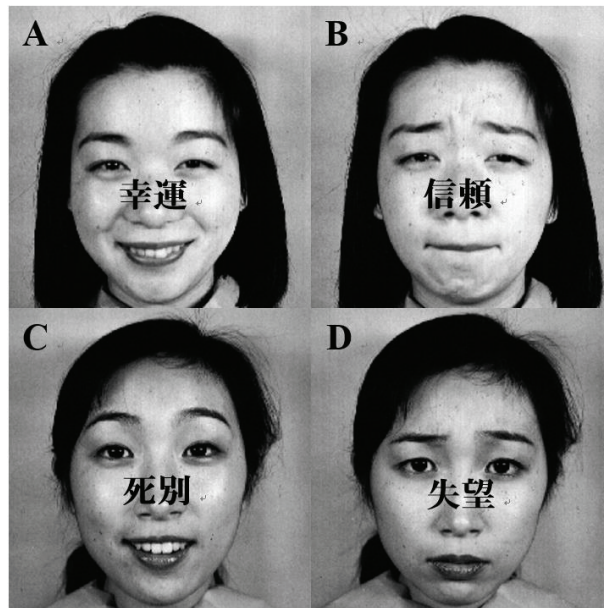


Figure 2-2. EST の呈示刺激 (A : happiness 表情×喜び語条件, B : sadness 表情×喜び語条件, C : happiness 表情×悲しみ語条件, D : sadness 表情×悲しみ語条件)

### 3. 結果

EST の各条件における反応時間及び正答率を Table 2-8 に示す。はじめに、ネガティブ干渉とポジティブ干渉が生じていることを確認するために、研究 1 と同様に、それぞれの条件における反応時間の比較が行われた。分析の結果、「sadness」表情×「喜び語」条件における試行は「happiness」表情×「喜び語」条件よりも反応時間が長く( $t(37) = 3.79, p = .001, d = 0.23$ ), また同様に、「happiness 表情」×「悲しみ語」条件における試行は「sadness」表情×「悲しみ語」条件よりも反応時間が長かった( $t(37) = 4.00, p < .001, d = 0.26$ )ことから、両干渉が生じていることが示された。正答率についても同様の分析を行い、「happiness」表情×「喜び語」条件における試行は「sadness」表情×「喜び語」条件よりも高い正答率を示し( $t(37) = 3.21, p = .003, d = 0.51$ ), 「sadness」表情×「悲しみ語」条件における試行は「happiness」表情×「悲しみ語」条件よりも高い正答率を示した( $t(37) = 3.24, p = .003, d = 0.56$ )。

Table 2-8. EST の各条件における平均反応時間と正答率

		表情刺激					
		happiness		sadness		<i>t</i>	<i>d</i>
	情動語	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>		
RT <sup>1)</sup> ( <i>ms</i> )	喜び語	580.05	95.83	604.21	113.07	3.79**	0.23
	悲しみ語	615.58	100.91	591.10	87.34	4.00**	0.26
CR <sup>2)</sup> (%)	喜び語	96.27	4.77	93.55	5.95	3.21**	0.51
	悲しみ語	93.72	6.09	96.60	4.04	3.24**	0.56

\*\*  $p < .01$

1) 反応時間, 2) 正答率

次に、研究1と同様に色彩反応の反応数に基づき、形態優位群 ( $FC > CF + C$ ,  $n = 16$ ) と色彩優位群 ( $FC \leq CF + C$ ,  $n = 22$ ) の2群に協力者を分け、ネガティブ干渉、ポジティブ干渉及びネガティブ情動刺激、ポジティブ情動刺激それぞれが干渉刺激であるとき(「sadness」表情×「喜び語」条件, 「happiness」表情×「悲しみ語」条件)の正答率について  $t$  検定による比較を行った (Table 2-9)。

分析の結果、ポジティブ干渉については色彩優位群の方が形態優位群よりも大きい値を示す傾向にあることが明らかになった ( $t(36) = 2.14, p = .039, d = 0.69$ )。他の指標については、群間に統計的有意な差は認められなかった。

Table 2-9. EST の各干渉量及び正答率の比較

	全体 ( $n = 38$ )		形態優位群 $FC > CF + C$		色彩優位群 $FC \leq CF + C$		$t$	$d$
	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>		
Negative <sup>1)</sup> ( <i>ms</i> )	24.16	39.34	15.23	39.73	30.66	38.65	1.20	
Posositive <sup>2)</sup> ( <i>ms</i> )	24.49	37.70	9.78	27.00	35.17	41.23	2.14*	0.69
CR-Neg <sup>3)</sup> (%)	93.55	5.95	93.95	5.76	93.26	6.21	0.35	
CR-Pos <sup>4)</sup> (%)	93.72	6.09	94.96	6.00	92.82	6.13	1.07	

\*  $p < .05$

1) ネガティブ干渉, 2) ポジティブ干渉, 3) ネガティブ情動刺激が干渉刺激となる条件における正答率,

4) ポジティブ情動刺激が干渉刺激となる条件における正答率

最後にすべてのロールシャッハ指標と EST の各干渉量について、Spearman の順位相関係数を求めた (Table 2-10)。はじめに、色彩反応 (FC, CF, C) 及びその合計 (FC+CF+C,  $\Sigma C$ ) と各干渉量との間に有意な相関関係は認められなかった。一方で INCOM (C) はネガティブ干渉 ( $r_s = .561, p < .001$ ) と正の順位相関を示したが、FABCOM (C) はいずれの指標とも関連を示さなかった。彩色図版への反応の遅れを示す R1T (C-A) はネガティブ干渉とのみ有意な正の順位相関が認められたが ( $r_s = .366, p < .05$ )、彩色図版への初発反応時間 (R1T (C)) はいずれの指標とも有意な関連を示さなかった。

Table 2-10. EST の各干渉量とロールシャッハ指標の相関

Rorschach variable	ネガティブ干渉		ポジティブ干渉	
	$r_s$	$p$	$r_s$	$p$
FC	-.141	.400	-.105	.532
CF	-.004	.980	.136	.415
C	-.206	.216	-.296†	.071
FC+CF+C	-.069	.678	-.047	.782
$\Sigma C$	-.067	.691	-.021	.901
INCOM (C)	.561**	<.001	-.156	.351
FABCOM (C)	.229	.166	.001	.993
R1T (C)	.179	.283	.204	.218
R1T (C-A)	.366*	.024	.000	.998

†  $p < .10$  \*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

色彩優位群は形態優位群に比べポジティブ干渉が大きいことが示されたが、ネガティブ干渉については統計的に有意な差は認められていない。また、相関分析の結果においても同様に、色彩反応の反応数とネガティブ干渉には有意な相関関係が認められていない。これらの結果は、感情表出の程度を表すと解釈される色彩反応の産出にはネガティブな注意バイアスが影響しにくいことを示している。しかし、INCOM (C) や R1T (C-A) との間に正の相関関係があることから、不快感を伴うような刺激を知覚することによって、不適切な認知処理や反応産出過程の停滞が生じる得ることが示唆される。すなわち、ネガティブな刺激へ注意が向いたとしてもそのまま感情が表出されることはなく、時間をかけて制御したり、ときには正常な認知処理が困難となることもあると推測される。

色彩から不快感を感受し、その情動価に合わせて記憶内から概念を探索した場合、反応内容も同様に不快感を伴うものが多くなることが予想される。また表出されないネガティブな感情は消化されることなく被検者内に燻ると考えられる。したがって研究 3 では追加



の分析として、感情に関連する反応内容や反応の主題に関する指標と、EST の干渉量の相関分析を行った。分析に用いた指標は彩色図版に対して与えられた解剖反応 (At)、血液反応 (Bl)、炎反応 (Fire)、そして包括システム (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) より損傷内容 (MOR)、攻撃的な運動 (AG) を指標として選択した。

分析の結果を Table 2-11 に示す。ネガティブ干渉と有意な相関関係を示した指標はなく、ポジティブ干渉に関しても Bl (C) と有意傾向水準で負の相関を示したものの有意な相関関係は認められなかった。

Table 2-11. EST の各干渉量とロールシャッハ指標の相関

Rorschach variable	ネガティブ干渉		ポジティブ干渉	
	$r_s$	$p$	$r_s$	$p$
At (C)	-.167	.317	.037	.826
Bl (C)	.161	.334	-.283†	.085
Fire (C)	-.136	.416	-.030	.858
MOR (C)	.057	.733	-.047	.778
AG (C)	.005	.978	.086	.606

†  $p < .10$

#### 4. 考察

本研究では、EST の干渉刺激 (表情画像) の情動価によって 2 種類の干渉量を算出し直すことで、ロ・テストにおける色彩刺激の処理にどのような感情の処理が関わっているのかを明らかにすることを目的とした。

##### 4.1 ネガティブな注意バイアスと色彩への反応

相関分析の結果、FC, CF, C, FC+CF+C,  $\Sigma C$  はそれぞれ、いずれの干渉量とも有意な関連が認められなかった。したがって、刺激の情動価に限らず、情動刺激に対する注意抑制の程度が色彩反応の産出に影響することを示す結果は得られなかったと言える。

一方で、FC : CF+C に基づく群間の比較では干渉量に有意な違いが認められており、色彩優位群が形態優位群に比べ大きいポジティブ干渉を示した。この結果は、肯定的な情動価を有する刺激に対する注意の向きやすさが CF や C といった色彩優位な反応の産出に対して促進的な働きをすることを示唆している。FC に比べ CF+C の値が高いことは一般的に情緒的な刺激に対する統制が適切に行えない被検者の特徴として解釈されるが (Rorschach, 1921 鈴木訳 1998)、色彩反応がどのような反応に対してスコアされたのかについて加味して解

積することが望ましい。例えば、色彩反応もその内容によって否定的なものと肯定的なものに分類可能であり（Piotrowski, 1957 上芝訳 1980）、健常な人が後者の CF を多く産出した場合は肯定的な情緒への感受性が示唆される（Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014）ことから、CF などの色彩優位な反応が必ずしも情緒的統制の困難さといった不適応的な意味合いを有しているわけではないと考えられる。したがって本研究の結果から、Meyer et al. が示した解釈仮説について認知課題を用いて実証することができたと言える。

#### 4.2 ネガティブな注意バイアスと不適切な認知処理

不合理な形によって結合が生じた結果として産出される INCOM と FABCOM については、以下のような結果が得られた。INCOM (C) についてはネガティブ干渉と有意な正の相関関係を示したことから、彩色図版において不適切な認知処理が生じる一因として、不快な情動刺激の知覚が関与している可能性が示唆された。すなわち、不快なものとして評価された色彩刺激から注意を解放することが難しいために、INCOM がスコアされる不合理な反応が産出される、というプロセスが推測される。

一方で FABCOM (C) については有意な結果が得られていない。INCOM と FABCOM の差異については不自然な色彩の利用が一つの可能性として挙げられたが（第 2 章第 1 節）、このような情緒的混乱がネガティブな感情価を有する刺激に対して特異的に生じることを本研究の結果は示している。また、ポジティブ干渉とは有意な相関関係を示していないことから、快感情を刺激するような色彩の知覚ではこのような反応産出における失敗は起こらない。これらの結果から、不快さを感じるような色彩刺激が知覚され注意を抑制することが困難であった場合には、形態と色彩を統合する過程で合理性の欠ける処理が行われることが示唆される。

#### 4.3 ネガティブな注意バイアスと反応の遅れ

彩色図版への初発反応時間に関する指標からは、R1T (C-A) とネガティブ干渉との間に有意な正の相関関係が示されている。すなわち、彩色図版に対して初発反応が遅れるのは、不快感情と関連するような刺激特徴から注意を解放できないことが一因となることが示された。図版上の彩色、とりわけ赤色は血液を始めとする不快で脅威的な内容として認知されやすく（安田, 2014）、この傾向は不快な刺激に注意が向きやすい人ほど顕著であることが予想される。

しかし色彩優位群と形態優位群を比較した結果が示している通り、色彩優位な反応の産出過程はポジティブな情動価の処理と関連している。また、追加で行った相関分析の結果は、不快感情と関連するような反応内容とネガティブ干渉との間に有意な関連を認めていない。つまり、不快さを感じられるような色彩刺激に対して注意が向くことで血液や臓器といった内容が認知されやすいことが推測されるが、ロールシャッハ反応として産出されるか否かは別であると考えられる。Exner (2003 中村・野田訳 2009) が示した反応産出過

程のモデルでは、インクブロットが視覚入力された後に記憶内から特定の概念の見つけ出し（第1段階）、その後の過程において検閲を含む取捨選択が行われる（第2段階）。このプロセスから本研究の結果を考察すると、例えば不快な色彩刺激に基づき臓器や血液が認知されたとしてもその後の反応産出過程で検閲の機能が働くことで反応候補は放棄され、他の潜在反応の探索へと過程が移ると考えられる。そしてこのような過程を経ることによって反応時間は遅れるだろう。色彩ショックは被検者による何らかの情動的な反応として解釈されているが、その反応産出過程で何が起きているのかについては不明確とされている（片口, 1987; Malmgren, 1999）。本研究の結果は、このプロセスを説明する一助となると考えられる。

#### 第4節 本章のまとめ

Gross (1998) を始め、多くの研究者が感情制御プロセスにおける注意コントロールの重要性を指摘している。本章では、認知課題の一つである EST を用いることで被検者の情動刺激に対する注意制御の個人差を測定し、ロールシャッハ反応との関連を検討した。

本章における発見の一つは色彩反応に基づく群による干渉量の違いであった。研究1では、色彩優位群の方が大きい干渉量を示したことから、情動刺激に注意が向きやすいことが色彩優位な反応の産出に促進的に作用することが示唆された。ESTの干渉量に見られる両群の差異については、干渉刺激への注意制御機能から説明が可能であると考えられたが (Kron et al., 2009; 鈴木, 2016a), 研究2, 3の結果は、情動的な処理が大いに関わっていることを明らかにした。研究2では、反応領域や形態水準に関するロールシャッハ指標の多くがESTの干渉量と有意な相関関係を示さなかったことから、ESTの干渉効果には調査協力者の注意制御機能のみならず、情動刺激の処理過程が多分に影響していることが示唆された。さらに、形態優位群と色彩優位群の群間に差が見られるのはポジティブ情動刺激の処理に限られることが研究3において明らかとなった。この結果は快感情を刺激する彩色に注意が向くことでCFやCといった色彩優位な反応の産出が促進されることを意味している。快感情を伴う彩色を知覚した場合には、その感情を制御しようとする動機づけが十分に高まらないため、FCあるいは色彩を排した形によるコントロールが行われることなく表出されることが考えられる。

一方で、不快感情を刺激するような彩色を知覚した際には、異なる認知処理が行われる。研究1では彩色図版上の INCOM が EST の干渉量と正の相関関係を示したことから、情動刺激に対して注意が向き、反応形成に必要な認知処理が干渉された結果、INCOM が産出されやすくなることが示唆された。また研究3では、ネガティブ干渉においてのみこの傾向が認められたことから、とりわけ不快な刺激特徴が知覚され、そこから注意を逸らすことが困難であった結果、不適切な知覚とされる反応が産出されることが考えられる。また FABCOM (C) との結果の違いから、複数の対象間に生じる作話的な展開が行われるのではなく、反応領域の彩色を無理やり反応に取り入れたり、インクプロットと概念の微細な不一致を放っておくことができないことによって、不適切な知覚プロセスが生じていることが推測される。

感情制御のプロセスモデル (Gross, 1998) によると、外界の刺激に対する注意制御は、刺激を知覚した直後に起こる比較的初期の調整過程とされる。本章の結果についても同様に、ロールシャッハ反応の産出過程における初期の過程を説明しているものであるとしたら、その後のプロセスについてより詳細に検討する必要があるだろう。例えば感情の表出は感情のプロセスにおける最後のポイントであり、ロ・テストでは FC, CF, C といった色彩反応の反応数によって解釈される (Rorschach, 1921 鈴木訳 1998)。CF や C といった色彩優位な反応がポジティブな刺激へ注意が向くことによって産出されやすくなることを示す本研

究の結果からは、快感情と関連する色彩刺激はその後の調整が加えられることなく表出される傾向にあることが示唆される。

一方でネガティブ干渉とは有意な結果が得られていないことから、不快感を伴うような色彩刺激の知覚に際しては、表出に至るまでに何らかのコントロールが行われていると考えられる。INICOM（C）の結果や彩色図版への初発反応の遅れがネガティブ干渉と関連することから、ネガティブ感情を刺激されることによる情緒的混乱やそれを統制しようとすることによる認知資源の不足が生じている可能性が考えられる。

したがって次章では、感情制御プロセスにおける注意抑制以降のプロセスに着目し、ロ・テストとの関連を検討していく。

### 第3章 再評価と抑制が反応産出過程に与える影響

#### 第1節 色彩刺激の処理と感情制御方略（研究4）

##### 1. 目的

本章では、ERQ（Gross & John, 2003）を用いて調査協力者の再評価方略と抑制方略の使用傾向を測定し、色彩に関するロールシャッハ指標との関連を検討することで、ロールシャッハ反応の産出過程における色彩の処理に対する各感情制御方略の役割を明らかにすることを目的とする。

本研究では2種類の感情制御に焦点を当てることから、ロ・テストにおける色彩刺激の処理についても多様な視点から捉える必要があると考えられる。したがって、各感情制御方略の得点が高い調査協力者について事例検討を行い、その反応特徴に基づき数量分析に用いるロールシャッハ指標を選定する。

##### 2. 方法

###### 2.1 調査協力者

研究1, 2, 3と同じ40名の大学生が研究に参加した。40名の調査協力者のうち、データに不備のあった1名を除く39名（男性6名、女性33名、平均年齢19.82歳）のデータを分析に用いた。

###### 2.2 測度

###### 2.2.1 ロ・テスト

研究1, 3で用いた指標に加え、後述の事例検討によって選定されたいくつかの指標を分析に用いた。

###### 2.2.2 ERQ-J

Emotion Regulation Questionnaire（Gross & John, 2003）は吉津・関口・雨宮（2013）によって日本語版（ERQ-J）が作成され、信頼性と妥当性が確認されている。回答者が日常生活で感情制御方略をどの程度使用する傾向にあるのかについて尋ねる質問紙であり、その状況や出来事の意味を再構成することによって情緒的な衝撃を調整する方略である再評価方略6項目（例えば、「私は、自分が置かれている状況についての考え方を変えることで、感情をコントロールする」）と、情動表出行動を抑え込む行動的な方略である抑制方略4項目（例えば、「私は自分の感情を表には出さない」）の計10項目から成る。すべての項目はリ



ッカート法により 1（まったくあてはまらない）～7（非常にあてはまる）のいずれかで評  
定された（Table 3-1）。

Table 3-1. Emotion Regulation Questionnaire 日本語版（吉津・関口・雨宮，2013）の質問項目

質問項目 <sup>1)</sup>	
1.	私は、自分が置かれている状況についての考え方を变えることで、感情をコントロールする
2.	私は、否定的な感情をあまり感じたくない時は、考えていることを変える
3.	私は、自分の感情を表に出さないことで、感情のコントロールをする
4.	私は、もっと肯定的な感情を感じたいときは、考えていることを変える
5.	私は、否定的な感情をあまり感じたくないときは、その状況についての考え方を变える
6.	肯定的な感情を感じたときは、感情を表に出さないように注意する
7.	ストレスを感じる状況では、考え方を变えて落ち着いていられるようにする
8.	私は自分の感情を表には出さない
9.	私は、もっと肯定的な感情を感じたいときは、その状況についての考え方を变える
10.	否定的な感情を感じたときは、その感情を決して表に出さないようにする

1) 白色は再評価方略、灰色は抑制方略の項目

### 3. 事例検討

事例検討を行う調査協力者は、以下の方法によって選ばれた。はじめに、抑制方略得点が全調査協力者の平均値を下回る者のうち、再評価方略得点の高い 3 名を再評価方略群とした。同様に、再評価方略得点が全調査協力者の平均値を下回る者のうち、抑制方略得点の高い 3 名を抑制方略群とした。この処理は、両方略の得点が高い調査協力者のロールシャッハ反応は、どちらの特性が反映されたものであるのか不明瞭であるため実施された。

再評価方略群の 3 事例をそれぞれ事例『A』、『B』、『C』、抑制方略群の 3 事例をそれぞれ事例『D』、『E』、『F』とした。

#### 3.1 再評価方略群のロールシャッハ反応

##### 3.1.1 事例『A』

色彩反応の個数に着目すると、FC は平均的な反応数であるのに対し、CF や C などの色彩優位な反応はほとんど示されていない（FC=2.5，CF=0.5，C=0）。赤色刺激に対してはⅡ-1：「鬼の角」やⅢ-2：「妖精（ゲームのボスキャラクター）」といった攻撃性の伴う反応内容が示されているものの、空想化することでその感情と距離を置き、最終的にコントロールされた形（FC）で反応できている。また多彩色図版（Ⅷ-1：「カメレオン」）に対して

は、カメレオンと葉っぱにそれぞれ FC と CF がスコアされており、擬態化の説明として色彩を用いたり、快感情を伴う反応内容に対してあまり統制されていない形で色彩を付与するといった特徴が認められた。

### 3.1.2 事例『B』

色彩反応は非常に少なく ( $FC=0.5$ ,  $CF=0$ ,  $C=0$ )、決定因からは色彩に対する反応性の高さは認められない。初発反応時間を比較すると、無彩色図版 ( $R1T=9.0''$ ) より彩色図版 ( $R1T=25.6''$ ) に対して反応が遅れる傾向にあるが、これは多彩色図版の複雑な彩色の処理に時間を要していることを示唆している ( $IX-1: R1T=50''$ ,  $X-1: R1T=32''$ )。したがって複雑な情動刺激の処理には時間を要するが、そのプロセスを経ることで自身の感情を鎮めることが可能であり、情緒的な反応として周囲に表現することはまれであると考えられる。唯一の色彩反応は  $X-2$ :「花びら」であり、形態に関する説明が優先されつつ、色彩を控えめに取り入れている（「花びらはなんかヒラヒラしてるから。あとは黄色っていう色もあって」）。

### 3.1.3 事例『C』

色彩反応は比較的少なく、そのほとんどが FC であることから色彩が優位な反応が産出されることはまれである ( $FC=2.5$ ,  $CF=0.5$ ,  $C=0$ )。Ⅲ図版へのⅢ-2:「リボン」や、多彩色図版へのⅧ-1:「葉っぱ」やⅨ-1:「花」など、色彩が関与しやすく肯定的なものとして分類される色彩反応 (Piotrowski 1957 上芝訳 1980) が多くを占めている。

その他にも、決定因として色彩は用いられていないもののインクブロット全体の彩りから連想されたような反応 (Ⅷ-2:「花」) が産出されており、外界の刺激を受けて感情面が活発になる様子が窺えた。

### 3.1.4 再評価方略群の反応特徴

再評価方略群 3 名のロールシャッハ反応を検討したところ、以下のような傾向が確認された。

はじめに、3 事例に共通する決定因の特徴として、CF や C といった色彩優位な反応がほとんど産出されないことが挙げられる。これは、赤色刺激に注意を惹かれながらも形態に目を向けようとする (『A』)、色彩に圧倒されながらも時間をかけることで処理する (『B』) など、各々の方法で色彩へ反応することを制御した結果であると考えられる。色彩に気がつき注意が向けられることもあるが、受動的な知覚体験をそのまま表出するのではなく、ある程度の認知的なコントロールがされていると推測される。

また反応内容に着目すると、草木や花のような肯定的な色彩反応 (Piotrowski 1957 上芝訳 1980) が多くを占めており、それに対して血液や臓器といったネガティブ感情と関連するような反応内容は見られない。したがって、彩色図版上の色彩刺激を吟味し反応に用い

ることが可能であるが、そこに至るまでの過程では情動価に基づき感情の表出、統制の弁別が行われていると考えられる。

### 3.2 抑制方略群のロールシャッハ反応

#### 3.2.1 事例『D』

FC は平均以上に産出されているものの、色彩優位な反応はほとんど見られない ( $FC=3$ ,  $CF=0.5$ ,  $C=0$ )。これらの色彩反応はそれぞれ血液反応を伴う損傷反応 (II-1:「二頭の象が足をぶつけ合っている」) や解剖反応 (III-1:「肺」) といった不快感情が刺激されたような状況か、あるいは情動性の伴わない慎重な形 (III-3:「靴下」, X-1:「ひよこ」) で産出されている。

また多彩色図版では他害的な連想を含む反応 (IX-1:「悪い魔法使いと熊」) や損傷反応 (IX-2:「人の顔」, X-4:「折れた枝」), 解剖反応 (X-5:「人間の骨」) といった攻撃性や不快感情が表現された反応が頻出する。これらの反応特徴からは、回避することの難しい多彩な環境刺激に囲まれることで外界の認知が否定的になっていく様子が窺える。

#### 3.2.2 事例『E』

色彩反応は比較的少なく ( $FC=0.5$ ,  $CF=0.5$ ,  $C=1$ )、自身の感情を表現することに対しては消極的な様子が窺える。しかし形態の伴わない色彩反応 (III-3:「心」) が産出される点からは、状況次第では全く統制されない不適応的な形で感情表出が行われる可能性が示唆される。また、色彩の関与が明確であるのに色彩反応とならない反応 (III-2:「火の玉」, IX-1:「燃えている」) も産出されている。このような色彩との関わりからは、例え自身の感情が刺激されたとしてもそれを表現することは控える傾向にあるが、まれに感情に巻き込まれることで全く制御されない形の感情表出が行われる傾向にあることを示唆している。

損傷反応や攻撃的な反応も多く産出されていることから、傷つきや攻撃性などネガティブな感情は生じやすいことも特徴の一つであると考えられる。

#### 3.2.3 事例『F』

多彩色図版への反応数が多い ( $VIII+IX+X/R=44\%$ ) ことから、情緒的な刺激への反応性は高いことが窺えるが、感情の表出は比較的抑制される傾向にある ( $FC=4$ ,  $CF=0.5$ ,  $C=1$ )。各彩色図版への反応が続いていくと、赤色を中心とした彩色領域に解剖反応 (III-4「心臓」, VIII-4「心臓」, VIII-5「肺」) や炎反応 (IX-3:「炎」), 血液反応 (X-10:「血」) が産出され始めることから情緒的な高まりは見受けられるが、色彩反応とならない反応も多い。

これらの反応特徴より、情緒刺激に曝されることで精神的な活動は活発になり、ネガティブなものを中心とした様々な感情が生起するが、これらの感情反応は表出されないようコントロールされる傾向にあると考えられる。

### 3.2.4 抑制方略群の反応特徴

抑制方略群 3 名のロールシャッハ反応を検討したところ、以下のような傾向が確認された。

はじめに、At, Bl, Fire といった彩色が関連しやすい反応内容が比較的多く産出されることが特徴として挙げられる。また、これに伴い包括システム (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) において MOR や AG がスコアされるような被害感や攻撃性に関連する主題が反応の中で展開されやすいことから、色彩刺激の知覚に伴い否定的な気分が誘発されやすいことが示唆される。

しかし、色彩が決定因となりやすいこれらの反応に対し色彩への言及が行われないことが 3 事例に共通する特徴であった。また色彩反応の総数は全体の平均と大きく違わないが、CF が少ないことが 3 事例に共通する特徴である。これらの特徴からは、情緒的な高まりがあったとしても表出される感情は強くコントロールされる傾向にあるが、『E』、『F』に見られた C のように、全く統制がされないまま表出されることもあることが推測される。

Table 3-2. 各事例におけるロールシャッハ反応及び全協力者 ( $n=39$ ) における平均値 ( $SD$ )

Rorschach variable	『A』	『B』	『C』	『D』	『E』	『F』	全協力者
FC	2.5	0.5	2.5	3	0.5	4	2.13 (1.93)
CF	0.5	0	0.5	0.5	0.5	0.5	1.94 (1.42)
C	0	0	0	0	1	1	0.27 (0.56)
FC+CF+C	3	0.5	3	3.5	2	5.5	4.33 (2.78)
$\Sigma C$	1.75	0.25	1.75	2	2.25	4.0	3.40 (2.19)
R1T (C-A)	6.2	16.6	1.0	-7.6	-3.2	-4.6	1.73 (7.44)
At (C)	0	0	0	4	0	3	0.38 (0.59)
Bl (C)	0	0	0	1	1	1	0.31 (0.59)
Fire (C)	0	0	0	0	2	1	0.69 (0.92)
Pl (C)	1	2	3	1	1	0	1.62 (1.57)
MOR (C)	0	0	0	3	2	1	0.85 (1.04)
AG (C)	0	0	0	1	2	1	0.38 (0.71)

## 4. 数量分析

### 4.1 指標の選定

事例検討の結果に基づき、以下の指標を数量研究に用いた (Table 3-3)。はじめに、色彩反応の反応数や彩色図版への初発反応時間に関する指標では、全調査協力者平均との差や群間の違いが見受けられたこと、そして第 2 章の結果との比較を行うために研究 4 においても分析に加えた。

次に、被検者の情動の現れとされる At, Bl, Fire については抑制方略群では比較的多く産出されていた。一方で再評価方略群ではこれらの反応が一切産出されなかったのに対し、

Table 3-3. 研究 4 で使用されたロールシャッハ指標

Rorschach variable	Variable definition
FC	色彩が用いられているが、形態がより重要である反応。副分類には 0.5 の加重。
CF	形態が用いられているが、色彩がより重要である反応。副分類には 0.5 の加重。
C	形態の影響を全く受けず、色彩のみに基づいた反応。副分類には 0.5 の加重。
FC+CF+C	FC, CF, C の合計値。
$\Sigma C$	$FC \times 0.5 + CF + C \times 1.5$ の値。
RIT (C)	彩色図版への初発反応時間の平均値
RIT (C-A)	彩色図版への初発反応時間の平均値から無彩色図版への初発反応の平均値を減算した値。
Bl (C)	血液反応 (Bl) の反応数。彩色図版への反応に限る。
At (C)	解剖反応 (Atb, Ats, X-ray, A.At) の反応数。彩色図版への反応に限る。
Fire (C)	火反応 (Fire) の反応数。彩色図版への反応のみをカウント。
Pl (C)	花反応 (Pl.f), 植物反応 (Pl) のいずれかに該当する反応の総数。彩色図版への反応に限る。
MOR (C)	対象が損傷を受けているか、不快さや苦悩が知覚されている対象を含む反応。彩色図版への反応に限る。
AG (C)	身体的、精神的な攻撃的活動 (例えば、怒っている、壊している) が生じている反応。彩色図版への反応に限る。

草木や花といった植物反応が多く産出されていた。したがって、At, Bl, Fire, Pl をそれぞれ数量分析に用いた。また、抑制方略群では MOR や AG といった包括システム (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) の特殊スコアの一部に該当する反応が多く見られたことから、分析に加えた。

以上のロールシャッハ指標について、再評価方略、抑制方略それぞれの得点との相関分析を行った。なお、反応内容に関するスコア (At, Bl, Fire, Pl, MOR, AG) は彩色図版に対する反応のみをカウントしている。

## 4.2 結果

はじめに研究 1, 3 と同様に、FC : CF+C に基づく群間の比較を行った (Table 3-4)。形態優位群 ( $n=16$ ) と色彩優位群 ( $n=23$ ) の再評価方略得点と抑制方略得点について  $t$  検定を行ったところ、再評価方略得点に有意な差は確認されなかった ( $t(38) = 0.61, p = .547$ ) 一方で、抑制方略得点は有意傾向ではあるが形態優位群の方が高い値を示した ( $t(38) = 1.74, p = .091, d = 0.55$ )。

Table 3-4. ERQ-J における再評価方略得点と抑制方略得点の比較

	全体 ( $n = 39$ )		形態優位群 FC > CF+C		色彩優位群 FC $\leq$ CF+C		$t$	$d$
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
再評価方略	4.55	0.79	4.65	0.96	4.49	0.66	0.61	
抑制方略	3.92	1.08	4.27	1.21	3.67	0.93	1.74†	0.55

†  $p < .10$



次に、再評価得点、抑制方略得点及び、各ロールシャッハ指標における順位相関係数を求めた（Table 3-5）。分析の結果、色彩反応（FC, CF, C）及びその合計値（FC+CF+C,  $\Sigma$  C）については、再評価方略、抑制方略それぞれの得点と有意な相関関係を示さなかった。また R1T (C), R1T (C-A) と彩色図版への初発反応時間に関する指標についても同様に、両方略の得点と有意な関連が示されていない。

反応内容については両方略で異なる結果を示し、再評価方略得点はいずれの反応内容とも有意な関連を示さなかった一方で、抑制方略得点は At (C) ( $r_s = .378, p < .05$ ), Bl (C) ( $r_s = .502, p < .01$ ) とそれぞれ正の順位相関を示した。また、反応の主題に関するスコアについても、抑制方略得点に限り、MOR (C) ( $r_s = .384, p < .05$ ), AG (C) ( $r_s = .410, p < .01$ ) の反応数と有意な正の順位相関を示した。

Table 3-5. ERQ-J の下位尺度得点とロールシャッハ指標の相関

Rorschach variable	再評価方略		抑制方略	
	$r_s$	$p$	$r_s$	$p$
FC	.030	.855	.233	.153
CF	.047	.775	.148	.367
C	-.070	.673	-.011	.948
FC+CF+C	-.074	.654	.182	.266
$\Sigma$ C	-.052	.752	.186	.257
R1T (C)	.046	.783	-.175	.286
R1T (C-A)	.231	.156	-.254	.118
At (C)	.077	.643	.378*	.018
Bl (C)	.064	.701	.502**	.001
Fire (C)	-.075	.648	.143	.386
Pl (C)	.319*	.048	.100	.543
MOR (C)	-.227	.165	.384*	.016
AG (C)	-.140	.397	.410**	.010

\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$

## 5. 考察

研究 4 では、感情制御のプロセスにおいて主要な方略として位置づけられている (Gross, 1998) 再評価方略と抑制方略に着目し、これらの感情制御プロセスがロールシャッハ反応の産出過程にどのような形で現れるのかを検討した。事例検討に基づき指標を選定し、相関分析を行ったところ次のような考察が得られた。

### 5.1 色彩反応と感情制御方略

色彩反応の反応数について、事例検討に選択された 6 事例には CF の少なさを始めとする特徴が見出されたが、全調査協力者を対象とした相関分析からは有意な関連が認められなかった。これは環境から刺激されることで生起する感情の程度と、各々の方略が用いられている程度が必ずしも一致するわけではないことが一因として考えられる。すなわち、特定の感情制御方略が積極的に使用されたとしても、その結果として喚起された感情がどの程度コントロールされるかについては他の様々な要因が関与する。例えば、うつ病患者のロ・テストは色彩反応が少ない傾向にあるが、これは喚起される感情そのものの乏しさや、外界の刺激に反応するだけのエネルギーの欠如が主な要因であると考えられる。このように、刺激に対する感受性が十分でない場合には、コントロールするほどの感情が生起されず、感情制御方略による影響は小さくなることが予想される。したがって、色彩反応の個数は刺激によって喚起される感情の程度によって強く影響され、それ故、喚起された感情がコントロールされる過程との間に単純な関係が認められなかったと考えられる。

しかし有意傾向ではあるが、形態優位群の方が高い抑制方略得点を示している。すなわち、CF や C よりも FC を多く産出する人は、行動レベルによる感情のコントロールを積極的に行う傾向にある。これは、形態優位群が感情表出を統制する傾向にあるとする従来の解釈を支持する結果であると言える。

### 5.2 色彩に関連する反応内容と感情制御方略

反応内容の結果からは、次のような考察が得られた。はじめに再評価方略得点は P1 (C) と有意な正の相関関係を示したことから、再評価得点が高い人ほど彩色図版上に花や草といった植物に関連する内容を認知、反応しやすいことが示された。再評価は刺激に対する考え方や評価を変容させることによって、その刺激のもつ情動価や自身の感情状態の強度や種類を変化させる (榎原, 2014)。ロールシャッハ反応の産出過程でこのプロセスを考えると、不快な刺激 (例えば、「人の体に着いた血」) を中性的、あるいは快感情を伴うような内容 (「子どもの服に着いた絵の具」) に意味づけし直すような処理が該当すると推測される。また、とりわけ花反応は色彩反応となりやすく (安田, 2014)、肯定的な情動価を含む (Piotrowski, 1957 上芝 1980) が、これは再評価方略の使用がポジティブ感情の増加に効果的であるとする報告 (Gross & Levenson, 1997) と合致する。すなわち、情動刺激に対

して認知的な操作を積極的に加えることで刺激の脅威度を低下させ、感情状態を肯定的なレベルで保つ働きがあると考えられる。

一方で、抑制方略は At (C)、BI (C) と有意な正の相関関係を示している。すなわち、抑制方略を日常的に使用する人は彩色図版に対して At や BI を産出しやすいことから、傷つきや攻撃性、不安といったネガティブな感情が体験されやすいと考えられる (Exner, 2003 中村・野田訳 2009; 片口, 1987; Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014)。抑制方略の使用は感情表出行動そのものの抑制には効果的であるが、体験される感情の低減には役立たず (Gross & John, 2003)、場合によっては情緒的な活動を促進させ得る (Gross & Levenson, 1997)。抑制方略を日常生活で頻回に使用する人はネガティブな体験を上手く処理できず、不安や傷つきを抱え、ときに外界に対して攻撃的な態度を示すことがあるかもしれない。抑制方略を多用する人に想定されるこのような感情状態が、At や BI の産出という形でロ・テストに現れたと考えられる。また、この感情状態に関する仮説は抑制方略得点と MOR (C) が同様に正の相関関係を示したことからも支持される。

さらにこれらの結果は、以下の二つの解釈を呈示する。一つは、反応内容からアセスメントされるネガティブな情動性は、被検者に内在する感情体験を捉えることが可能であるが、この感情が表出されるか否かについての情報は提供しない、という解釈である。抑制方略を多用している人は感情表出行動が少ないと想定されるため、このようなネガティブな感情を抱えていたとしても、それを周囲に表現することはまれであると考えられる。もう一つは、ERQ-J で測定される抑制方略の使用頻度の高さは感情表出行動が抑制される程度ではなく、それに対する試みの自己評価であるため、本人の自覚していない形での感情表現がロ・テストのスコアに反映されている可能性が考えられる。すなわち、ロ・テスト上では実際に刺激が呈示され、それに対する反応が客観的に評価されることから、本人が自覚している側面とは異なる特徴が現れるだろう。

いずれにせよ、それぞれの反応内容について個別に解釈し、被検者のアセスメントにつなげる必要があるだろう。例えば、MOR は一般的に自身の傷つきを表すとされているが、加害的な反応内容が展開されていれば攻撃性の現れとして解釈される (Meyer et al., 2011 高橋・高橋訳 2014)。また血液反応についても、表面化するほどの衝動性や攻撃性を表すとする解釈もあれば、そのような感情が行動に現れることは少ないとする解釈もあり、どの解釈を採択すべきであるかは血液反応の種類が手がかりになるという報告もある (秋谷, 1966)。臨床場面でのアセスメントに際しては、ロ・テストのどのような場面、状況でこれらの反応内容がスコアされたのか、そして被検者がその反応に対してどのような説明を付与しているのかについて詳細に検討する必要があると考えられる。

## 第2節 本章のまとめ

感情制御のプロセスモデルによれば、「気にしないようにする」といった注意コントロールを通して処理しきれなかった環境内の情動刺激については、その後の過程でさらなる調整を受ける。Gross & John (2003) はとりわけ、再評価方略と抑制方略が重要な役割を果たしていることを指摘していることから、本研究では ERQ-J を用いてこれらの感情制御方略の使用について尋ねることで、ロールシャッハ反応の産出における色彩刺激の処理過程に各方略がどのように関与しているかを検討した。

FC : CF+C に基づく群間の比較では、有意水準には達していなかったものの ( $p < .10$ )、形態優位群の方が高い抑制方略得点を示した。プロセスモデルによると、その人の内部で完結する認知的な調整を通して生起した感情に対して、抑制による行動的な感情反応の統制が行われる (榊原, 2014)。すなわち、感情調整のプロセスにおいて抑制は、周囲に感情的な反応を表出するか否かという最終的なアウトプットの過程を担う方略であり (Gross, 1998)、これは色彩優位な反応が多い人は感情が不安定であり (Rorschach, 1921 鈴木訳 1998)、感情表出が激しい (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) とする解釈を支持する結果であった。

しかし FC、CF、C やその合計値との間に有意な相関関係が認められていないことから、抑制方略の使用が FC 反応の産出の促進、あるいは CF、C 反応の産出の抑制に直接的な働きかけがされるわけではないことを示している。色彩反応の産出過程には、抑うつやアレキシサイミアといった情動刺激の知覚による感情体験の高まりやすさ、外界の刺激からの感受性が大きく関与していることを先行研究が報告している (Mason et al., 1985; Porcelli & Mihura, 2010)。これらの傾向が高い人は感情の変化が乏しい、あるいは感情が生起していることに気づきにくいといった特徴を有していることから、感情を制御しようという意図に基づく感情制御のプロセスモデル (Gross, 1998) とは異なる調整を受けていると考えられる。

抑制方略の使用はさらに、攻撃的な考えや傷つきといった表象を促すことが示された。ロ・テスト上で確認されたこのような感情の動きは、抑制方略を用いた感情制御が体験されるネガティブな感情を低減させることに効果的ではないとする研究報告 (Gross & Levenson, 1997; John & Gross, 2004) と一致する。

一方で再評価方略に関しては、植物反応の反応数と数量的関連が認められた。不快さを感じるような色彩刺激を知覚したとしても、その意味づけや解釈を変容させることで、結果として中性的、肯定的な反応内容が多く産出されたと考えられる。しかし血液反応や解剖反応といった不快感を伴うような反応内容とは有意な関連を示しておらず、またこの再評価の過程を最終的な反応に与えられたスコアから抽出することは困難である。この点を明らかにするには、反応間の継起に着目するなど数量的指標以外の特徴を取り上げ、検討する必要があると考えられる。

以上の結果からは、ロールシャッハ反応の産出過程においても同様に、抑制方略の使用が色彩優位な反応の産出に抑制的な働きをし得る可能性がある一方で、そのコントロールは行動レベルに留まること、すなわち生起した内的な感情の処理にまでは至らないことが示唆された。同様に、再評価方略については色彩刺激によって引き起こされる不快感の緩和、情動体験の調整といった形でロールシャッハ反応の産出過程に現れると考えられ、いずれの方略についても感情の表出（色彩反応）よりも体験（反応内容）過程に強く関与することが明らかになった。

## 第4章 事例検討

第4章では、これまでの数量研究（研究1～4）で得られた知見について、一連の反応過程を捉えることを目的とした事例検討を行う。本章では、ESTの干渉量とERQ-Jの各スコアを参考に4名の調査協力者を選択し、それぞれのプロトコルにおける彩色図版への反応に見られる特徴について考察する。ESTの干渉量、とりわけネガティブ干渉が大きい事例『G』、再評価方略得点が高い事例『C』、抑制方略得点が高い事例『F』が、ロールシャッハ反応に現れるそれぞれの感情制御のプロセスを確認するために選ばれた。そして、干渉量が小さく、両方略得点が高い事例『H』のプロトコルについても検討を行う。事例『H』は、それぞれの感情制御の過程がどのような形で関連しながらロ・テスト上で表現されるのかを明らかにするために選択された。

### 第1節 不快な刺激に注意が向きやすい事例『G』

#### 1. 感情制御に見られる『G』の特徴

ESTの干渉量、ネガティブ干渉の値は全調査協力者中最大であることから、不快感を伴うような情動刺激に対して注意が向きやすい事例であると言える。ERQ-Jの再評価方略得点、抑制方略得点は平均的な値を示しており、特筆すべき特徴はない（Table 4-1）。

Table 4-1. 『G』のEST及びERQ-Jの各指標

Measure		Mean (SD)	Rank
干渉量	107.38	25.38 (28.34)	1/38
ネガティブ干渉	135.29	24.16 (38.81)	1/38
ポジティブ干渉	24.58	24.48 (37.21)	17/38
再評価方略	4.33	4.55 (0.79)	23/39
抑制方略	4.00	3.92 (1.08)	19/39



## 2. 『G』のロールシャッハ反応

はじめに、『G』の Summary Scoring Table (片口, 1987) を Table 4-2 に示す。

Table 4-2. 『G』の Summary Scoring Table

R	46	W : D	20 : 16	M : FM	4 : 8
Rej	0	W%	43%	F% / $\sum F\%$	43 / 85
Total Time	32' 11"	Dd%	20%	F+%/ $\sum F+%$	60 / 56
RT (Av.)	3' 13"	S%	2%	R+%	48%
R1T (Av.)	0' 13"	W : M	20 : 4	H%	22%
R1T (Av. N. C.)	0' 06"	M : $\sum C$	4 : 7.5	A%	52%
R1T (Av. C. C.)	0' 20"	FM+m : Fc+c+C'	13 : 9	At%	0%
MDC & Time	X 0' 45"	VIII+IX+X / R	39%	P	4
		FC : CF+C	2 : 6.5	Content Range	10
		FC+CF+C : Fc+c+C'	8.5 : 9	Determinant Range	8

彩色図版への最初の反応である II-1 : 「狛犬」では、顔全体は白く、耳と頬の一部がピンク色のアニメのキャラクターが説明されている (Table 4-3)。質問段階では「白い背景に赤い模様があつて。そして黒い模様がある」と図版の特徴をなぞるような説明から始まり、「白地に全体的に日本的」といった色彩の印象に基づき連想を広げるものの、着想された概念とインクプロット上の色彩との照合は漠然としか行われていない。反応産出に時間を要している (I : R1T=7", II : R1T=14") ことから、色彩の出現に対する戸惑いも窺える。さらに続く II-2 : 「二人の人が蹲踞の姿勢をとっている」では、はじめは二人の人間を見ているだけであったが、次第に赤色領域 (D3) に注意が向き出す。赤色からの連想で「松明」が知覚されるが、それに無理なこじつけを行い (「頭に松明をつけて、儀式を行っている」)、最終的には下部の赤色刺激 (D2) から「血」を連想している。

II 図版に対する二つの反応から推測される『G』の情動処理は、以下のようなものである。すなわち、強烈な情動刺激が知覚されることで認知的な混乱が生じやすく、現実検討力が低下する。その後は客観的な思考、行動を取り戻すが、不快な刺激から注意を解放することが困難であることから不快感情は高まりを見せている。

Table 4-3. 『G』のⅡ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
II-1 △ 14”	狛犬ですかね。	全体のイメージですかね。白い背景に赤い模様があつて。そして黒い模様がある。なんとなくおじやる丸に出てくる狛犬の赤い方に似て。白地に赤ってというのが全体的に日本的だなんて感じがしました。＜？＞このへん（D3）が耳、ここ（D2）が鼻です。目がこのあたり（d1に隣接）にある。あとは特に特徴づけるものはないですね。位置的にはちょっとおかしいんですけど、ここの赤い部分（D1内部）がほっぺっぽく見えますかね。
W F干 (Ad)		
II-2 △ 25”	あとは、二人の人が蹲踞の姿勢をとって手を合わせてる、みたいにも見えます。そうすると赤い模様が…。頭に松明をつけて、儀式を行っているみたいな感じにも見えます。ただ、だとすると膝の赤い模様がよくわかりませんね…。膝を思いっきりぶつけたとか、そんな感じで出てる血なのかなとも思いますけど。それもおかしいな。多分そう装飾物なにかで赤いのをつけてるんじゃないかと思う。	ここ（d1）がはっきりと腕っぽく見えて。小手をつけてます。ちょっと濃いところからこの袖にあたる部分までが。手と手を合わせてるっていうか、ひじまでいてないけど腕のある程度の部分までがくっついてるように見えます。このへんに頭、後ろ髪。このあたりが背中、このへんが腰。そこから伸びて足。ここが膝、ここにふくらはぎから先がある。蹲踞をとって身体を支えてる部分の足ですね。それと同じ構図の人がこっちにもいる（D1×2）。＜頭に松明？＞この赤い模様（D3）をどう説明しようかと思うと、なんとなく模様が炎に見えたので。＜炎？＞うーん、まあ赤いから……って感じです。炎の規模とか大きさから察するにろうそくではないだろうと。で、松明かなって。＜膝を思いっきりぶつけてる？＞まあここ（D2）が赤いので。だとすると血なのかなと。
W M±, CF, mF H, Cg, Fire, Bl MOR		

Ⅲ図版への初発反応（Ⅲ-1：「幽霊」，R1T=18”）も、無彩色図版の平均（R1T=6.4”）に比べて遅れている（Table 4-4）。また、「幽霊」の形態的特徴については一切説明できておらず、Ⅱ-1：「狛犬」同様に図版の白地にに基づきイメージが喚起された結果、形態に注意を向けるだけの余裕がなくなったことが推測される。Ⅱ図版に見られた情動処理と同様に有彩色、無彩色問わず色彩から喚起されるイメージが反応産出において優先されていることから、外界の刺激によって様々な感情が喚起されやすく、そのような感情に圧倒されることで現実的な対処が困難になる可能性が『G』にあると考えられる。

さらに次の反応（Ⅲ-2：「サイ」）では、「サイの顔（Wc）」、「リボン（D3）」と形態を捉えた認知処理が行われているにも関わらず、一つの反応として統合しようと試みたために、サイの両眼の間にリボンがついている不自然な反応（FABCOM）として産出された。前の反応とは異なり情緒的な表現は乏しい反応ではあるが、彩色領域から注意を解放することが難しく、結果として全体の統合性が低下する様子が窺える。

Table 4-4. 『G』のⅢ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
Ⅲ-1 △ 18”	ぱっと見，出てきた二つは。幽霊と...うーん。	白と黒ってところと，ここが人魂に見えたから。＜幽霊？＞...幽霊にあたる部分は...までは考えてないですね。このへん（D1 以外）がそれなんじゃないかって感じはありますが。黒の模様比べたら白地が多いので。＜人魂？＞このへん（D1）が赤くて，炎の上に登っていく形に見えるので。それにしては若干力なくて，このへんが妙に細長くて回ってるように見える。
W Fー, C’F, CF, mF (A), Fire		
Ⅲ-2 △ 30”	黒い模様で三つほど動物が連想できたんですけど。一つはサイ。（次の反応にて）黒い模様を動物と見立てると，こめかみのところにリボンですかね。	ここ（d1）が耳に見えますね。そしてここ（D3 横の空白部分）に目がある。ここ（D4 上部）がほっぺの毛ですね。＜サイ？＞ここ（D7×2）に角。ただサイの角が二股に割れてる，2 本角がありまして。ここ（D4 上部）のあたりが頬骨ですかね，頬が張ってる。＜領域？＞この黒い部分全体（D1 以外）。  （次の反応にて）＜リボン？＞そうですね...先ほどの動物，サイとイボイノシシだった場合はこのあたりに目があるので。目がある脇に赤い模様があるがリボンっぽく見えるので。そうすると位置的にはここがこめかみ（眉間の間違い？）。目と目の間になりますので，ここ（D3）にリボンがついてるのかなと。場所としては不自然ですけど。＜サイやイボイノシシにリボン？＞はい。＜らしさ？＞ここが結び目で，リボンの両翼っぽいところがあるので。
Wc F〒 Ad, Cg FABCOM		

多彩色図版への最初の反応Ⅷ-1：「マンドリル」では、Ⅱ-1：「狢犬」、Ⅲ-1：「幽霊」同様に、全体の配色からの連想で反応が形成されている（Table 4-5）。しかし形態的特徴や色彩の配色が現実の概念とは合致しておらず、とりわけインクブロット上の色彩を無理やり反応領域に当てはめるような認知処理が特徴的である。またⅧ-3：「歌舞伎メイクをした役者の顔」においても色彩と反応領域の対応に齟齬が認められている。不適切な形で色彩が利

Table 4-5. 『G』のⅧ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
Ⅷ-1 △ 5”	マントヒヒですね。顔全体の色の配置とかも似ていますし。このへんに鼻があつて。白い模様と青い模様があつて。この辺に目がある感じ。	マントヒヒ？あー，多分マンドリルと言ひ間違えました。マンドリルが，白と深緑と赤の配色の動物だった気がするのです。ここ（D2）が鼻でこのあたり（D3の左上，右上の空白）に目。面長の動物って鼻なのか，よくわからない器官がグイって伸びてるじゃないですか。ここ（D3の両端）が目とかに着く影で。このあたり（D1）が頬として顔の輪郭をつくっていて。全体がマンドリルの顔っぽい。
W FC±, FC’ Ad		
Ⅷ-3 △ 51”	白と赤と深緑っていうのが歌舞伎の彩を感じさせますね。ちょうどここに歌舞伎メイクをした役者の顔も見えますし。	歌舞伎のメイクをするとき赤と，深緑もしくは青に近い色，黒ですることがあるので。あとは顔の下地として白粉を塗るっていうところが。まあカラーリングが歌舞伎でそろったな，そういう感じです。形とかは特に気にしてなかったです。＜顔？＞はい，そのあとに連動してこのあたり（D4）が顔っぽいかなと。この白が顔で，黒いところが鼻，このあたりが顎ですね。くの字型になってるのが目を縁取る模様。ここ全体（D3）が髪ですね。＜らしさ？＞ここに引かれてる線が歌舞伎の隈取みたいに見えるので。青が下地だから悪役ですね，この人。
D CF±, C’F Hd		
Ⅷ-4 △ 1’ 32”	産まれて間もない有袋類の赤ん坊みたいな感じですかね。＜有袋類？＞はい。全体的に赤くて，有袋類は子どもを未熟児の状態で産むので。	形で見たときにここが動物の頭に見えて。これが2本の前足，これが後ろ足です。これが尾ですね。赤ん坊っぽいなって思ったのは全体が赤いから。あとはあんまり形とか発達してないのかなって。＜有袋類？＞赤いからですね。生まれたばかりは未熟児なので毛も生えてなくて，皮膚が丸見えなので。
D FC± A P MOR		

用されているこれらの反応は、色彩から注意を解放することが困難となり、自身の反応に対する十分な吟味が行われることなく産出されたと考えられる。

VIII-4:「有袋類」はPがスコアされており、形態的特徴に十分に注意を向けることができているが、「有袋類」という反応は個性的である。この反応は前反応と同様に色彩の説明から入っていることから、色彩刺激が認知過程に大きく影響していることを示唆している。

「有袋類」は、熊やカメレオンといった四足歩行の動物が多い（高橋・高橋・西尾, 2009）この反応領域に赤色を統合するための合理的な処理であると言えるが、色彩を無理にこじつけて用いるこじつけF/C（片口, 1987）に近い認知処理を辿っている。視界に入る色彩刺激への反応を抑制しきれていないこれらの過程からは、自身の感情を調整したうえで表現しようとする『G』の試みが見受けられるが、結果としてやや不自然な形による感情表出が行われている。

IX図版は、彩色が激しく、混濁していることから対処の難しい図版とされている（馬場, 1999）が、その刺激の複雑さに翻弄される『G』の様子が窺えた（Table 4-6）。IX-1:「骸骨」では、はじめに空白領域の形態に基づき「頭蓋骨」を認知するが、近接する色彩刺激にすぐさま反応し「目から炎が出ていて。そして目と口から毒の息」と意味づけを行っている。この反応は、「骸骨」という解剖反応に対して「炎」、「毒の息」が付与された情緒性に富んだ反応であり、そこに表現される感情はネガティブなものである。したがって、情緒を刺激されるような周囲の情報に曝され続けると、傷つきや不安、周囲への攻撃的な態度など、様々な感情が溢れ出すことが予想される。また、毒の息を吐き出すという「骸骨」には不可能であるはずの運動感覚を付与していることから、反応全体の整合性を確認する検閲の過程が上手く機能していない様子が見受けられ、情動喚起場面では現実検討が低下しやすいことが示唆される。

Table 4-6. 『G』のIX図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
IX-1 ^ 16”	<p>骸骨ですかね。この辺が鼻の穴です ね。目から炎が出ていて。そして 目と口から毒の息みたいな、吐 き出してる。ここが鎧を着こんで いるように見えます。中世ヨーロ ッパみたいな感じの鎧。...いや中 世？近世かな。まあがっちりした 鎧です。このあたりがプレートア ーマー。まあ胸部の一枚の鉄板で 作られてる、みたいな。ここが肩 を守る部分。</p>	<p>ここ（D3 と D3 の間の空白領域）が頭蓋骨の額。このあ たりが眼窩、このあたり（d4）が鼻にあたる部分。そして このあたりが口にあたる部分。じゃあこのあたり（D3） の色は何を意味するのかなと思うと目から炎が飛び出て いる。＜炎？＞赤いからですね。そして上に向かうように 伸びていて、上に向けてギザギザっぽくなっている。この 骨に沿って火がくっついてるのが炎の拡がり方に似て いる。これ（D1）が炎に比べて毒々しい緑色なので毒ガ スっぽい。拡がり方が炎と比べて違いますね。上に上がっ ていくというよりは横に広がっていく形。目の部分で混ざ り合ってるので目から出てるか、目に吸い込まれているか。 全体にモクモクとこっち出て広がらないということは目 に吸い込まれてるんですかね。毒ガスが出て、目に吸い込 まれてる。＜骸骨？＞ここが白いところと、ここが完全に 目と鼻に見えたので。人間の頭蓋骨の形を模してるなど。 アメコミヒーローのゴーストライターに似ていますね。＜ 領域？＞ここが頭蓋骨、朱色のところが炎、緑色のところ が毒ガス。緑と白の混ざったところが骸骨の影ですね。さ らにこれが首としてつながっていて、胴体に鎧（D2）を 着て。それが中近世のヨーロッパの鎧っぽいなど。ここが チェストプレートで胸部を守る部分、ここが肩を守る部分、 ここが首を守る部分ですね。このあたりに線が入って胸筋 アピールしてるところとかもそれっぽくなって。</p> <p>W M<sup>+</sup>, mF, CF, KF, FC' (Hd), Cg, Fire INCOM</p>



### 3. 考察

#### 3.1. 色彩への反応性の高さ

彩色図版への反応を中心とした分析から『G』に認められた特徴の一つは、有彩色、無彩色に関わらず色彩への反応性が高く、様々な概念やイメージの連想が活発になることである。とりわけ BI や Fire が色彩刺激に触発されることで産出されやすく、これらの反応には傷つきや攻撃性といった否定的な感情が伴いやすいことから、情動刺激への感受性が高く、不快感情を刺激されやすい傾向にあると言える。ロ・テスト上のこのような認知処理の特徴は、ネガティブな情動価を含む刺激に対して注意が向きやすく、否定的な感情が高まりやすいと考えられる『G』の様相と合致する。

色彩刺激への注意の向きやすさを表すこれらの特徴は顕著であるものの、色彩から形態へと注意を移し、客観性の保たれた反応を産出しようとする『G』の感情コントロールが受けられる。しかし、彩色領域の不自然な結合や、少し強引な形による色彩の統合が生じることもある。これらの反応特徴には、情動刺激を気にしないでおこうとする意思はあるものの注意を逸らしておくことが難しく、抑制しきれない感情が不自然に表出している様子を示していると考えられる。

#### 3.2. 色彩刺激による反応産出過程への干渉

『G』の反応特徴として色彩刺激に対して注意が向きやすく、不快感情が高まりやすいことが示唆されたが、それにより後続の反応産出過程が干渉される様子も窺えた。例えばⅢ-2:「サイ」では、インクブロットの形態特徴からサイの顔が連想され、反応として採択されているが、その後も図版と関わるなかで赤色刺激が気にかかり、最終的に「こめかみに赤いリボンがついたサイ」という FABCOM が産出されている。この反応の産出過程からは、色彩刺激が知覚された後にインクブロットと反応内容の照合が行われるが、その間に、干渉刺激への注意制御の過程が介する可能性が示唆される。つまり、このような反応特徴は、反応全体の整合性、現実性を確認するような検閲 (Exner, 2003 中村・野田訳 2009) の過程が機能していないことを示している。したがって、反応全体を吟味し、その反応を言語表出するか否かを判断する比較的能動的な活動 (辻, 1997) は、色彩に注意を奪われ、情緒的な混乱が生じることで障害されると考えられる。

## 第2節 再評価方略得点が高い事例『C』

### 1. 感情制御に見られる『C』の特徴

ESTの干渉量は平均的であるが、不快な刺激へ注意が向きにくく、快感情を含んだ刺激に対しては注意が向きやすい。再評価方略得点が高く、抑制方略得点が低いことから、感情のコントロールは主に再評価方略を用いていると考えられる（Table 4-7）。

Table 4-7. 『C』のEST及びERQ-Jの各指標

Measure		Mean (SD)	Rank
干渉量	22.94	25.38 (28.34)	17/38
ネガティブ干渉	-22.51	24.16 (38.81)	34/38
ポジティブ干渉	48.59	24.48 (37.21)	8/38
再評価方略	5.50	4.55 (0.79)	4/39
抑制方略	2.25	3.92 (1.08)	36/39

### 2. 『C』のロールシャッハ反応

『C』のSummary Scoring TableをTable 4-8に示す。

Table 4-8. 『C』のSummary Scoring Table

R	19	W : D	14 : 3	M : FM	3 : 1
Rej	0	W%	74 %	F% / $\sum F\%$	63 / 95
Total Time	7' 31"	Dd%	0 %	F+% / $\sum F+\%$	33 / 56
RT (Av.)	0' 45"	S%	11 %	R+%	53 %
R1T (Av.)	0' 11"	W : M	14 : 3	H%	26 %
R1T (Av. N. C.)	0' 10"	M : $\sum C$	3 : 2.25	A%	26 %
R1T (Av. C. C.)	0' 11"	FM+m : Fc+c+C'	2 : 0	At%	0 %
MDC & Time	VI 0' 29"	VIII+IX+X / R	32 %	P	3.5
		FC : CF+C	1.5 : 1.5	Content Range	6
		FC+CF+C : Fc+c+C'	2.5 : 0	Determinant Range	6

Ⅱ図版への最初の反応（Ⅱ-1：「人が手を合わせている」）ではインクブロット全体を使ったP反応の産出が素早く行われているが、続く2反応（Ⅱ-2：「顔」、Ⅱ-3：「電器」）は空白領域の形態特徴に基づき産出されている（Table 4-9）。赤色刺激が点在するインクブロットに反応しつつもすぐに空白領域へと反応の場を移すプロセスからは、とりわけ不快さを感じやすいとされるⅡ図版の彩色（馬場, 1999）を避けることで刺激から距離を置く様子が窺えた。

空白領域に対して形態を主とした反応を続けていることから、情緒刺激を排除しようとする『C』の固い態度が見受けられ、一見自身の感情を切り離し客観的な姿勢が垣間見える。しかし、色彩に対する言及がないことから情緒的な表出は行われていないが、情緒刺激に曝され続けることで不安感が高まる可能性もある（Ⅱ-3：「電器」Fm）。

Table 4-9. 『C』のⅡ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
Ⅱ-1 △ 7”	人と人が手を合わせている。向かい合って。	これが手で、顔で、足。ちょっと出てるのが口。これが身体で、上半身と下半身。座ってて、足曲げてて、足もくっついてる感じ。＜人らしさ？＞これが顔に見えて。微妙に白い模様が目に見えた。
		W M± H P
Ⅱ-2 △ 27”	（笑いながら）顔。	顔（笑う）。逆に色着いたところ以外の白いところを見て。これが目で、ここが鼻で、これがひげ。
		S, dr F± Hd
Ⅱ-3 △ 47”	真ん中の白い部分は電器。ひも引っ張って明かりがつくような。	ここが天井にぶら下がってて、ここがひも。＜他は？＞ここは明かりがつくところ。＜らしさ？＞形が全体的に見て電器かなって。
		S Fm± Obj

Ⅲ図版に対しても即座にP反応を与えており（Table 4-10）、表現される人間関係は協力的でポジティブな情動価を有している（Ⅲ-1：「人が向かい合っている」）。また二つ目の反応（Ⅲ-2：「リボン」）では、比較的肯定的な情動価を含んだ反応内容に対して色彩を統合させることができている。これらの反応は、生起した肯定的な感情の積極的な表出を窺わせる。

Ⅱ図版とは異なる感情表出を促した要因の一つは、両図版の色調の違いであると考えられる。すなわち、刺激が強く、不快感を伴いやすいⅡ図版の赤色刺激に対しては防衛的な態度を示したが、色彩が穏やかになるⅢ図版では色彩刺激への関わりを持つことができている。

Table 4-10. 『C』のⅢ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
Ⅲ-1 △ 3”	これも人と人が向かい合ってる 感じ。	これが顔で、ここが首。足、手。なんかを一緒に持とうと している。＜他には？＞この身体が、すごい頑張ってる持ち 上げようとしている。
		W M± H, Obj P
Ⅲ-2 △ 19”	真ん中にリボンが。	これが。形が（笑い）。＜他には？＞色も赤だから。
		D FC± Cg

多彩色図版への最初の反応（Ⅲ-1：「カメレオン」）では、反応時間がかかりながらも統合された全体反応が形成されている（Table 4-11）。この反応からは、複雑な刺激に対して十分時間をかけることで対処する『C』の様子が窺える。さらにⅢ図版に対する二つの反応はいずれも植物反応（PI, PI.f）がスコアされる概念を含んでおり、比較的ポジティブな感情体験が見受けられる。しかしその感情を率直に表出する（Ⅲ-1：CF）こともあれば、表出を抑えようとする（Ⅲ-2：F）こともあり、体験された感情の周囲への表出については一貫性を欠いている。

Table 4-11. 『C』のⅣ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
Ⅳ-1 △ 16”	葉っぱをカメレオンみたいな が 2 匹。両側で登ろうとしてい る。	これがカメレオンで、これが手足。ここが木の葉っぱ？＜ カメレオン？＞うーん、顔があつて…ちょっとよくわから ない（笑い）。＜手と足と顔と？＞尻尾で、身体。＜葉っ ぱ？＞緑色だったから。
		W FM±, CF A, PI P
Ⅳ-2 △ 50”	あと、花。	これも断面図みたいな感じ。ここが花びらで、ここが雄し べ雌しべとか。＜花？＞この全体的な形が、咲いている、 みたいな。
		W F干 PI.f

彩色がより複雑になるIX図版に対しては前図版の最後の反応（Ⅷ-2：「花」）に続けるような形で速やかに反応産出を行っている（IX-1：「花」）。反応の説明も同じように形態への言及が先行し、検査者の問いかけによってはじめて色彩の特徴が説明されていることから、感情表出の自発性は乏しいが、周囲に合わせて適切な形（FC）で表現することが可能であると推測される（Table 4-12）。しかし、その後の2反応はインクブロットの外輪郭に基づく形態反応であることから、快、不快問わず情緒的な体験が生じている様子は見受けられない（IX-2：「壺」、IX-3：「エビ」）。

Table 4-12. 『C』のIX図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
IX-1 ∧ 2”	花で。	これ（D3×2）が花びらで、茎（D1×2）と被さっている、繋がっている。ここ（D2）がよくわかんないです。＜花？＞色ですかね。
Wc FC± Pl.f		

またX図版に対しては時間をかけた反応が一つだけ与えられている（X-1：「王様みたいな顔」）。彩色豊かなこの図版に対しても形態に基づく反応産出が行われている（Table 4-13）ことから、外界の刺激から感情面を揺さぶられることはまれであることが予想される。

Table 4-13. 『C』のX図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
X-1 ∧ 28”	髪の毛で、目で、ひげ。なんかの王様みたいな顔。	ここ（D6×2）が髪の毛で、目で（D2×2）、ひげ（D3）。＜王様？＞ひげが特徴的で、こういう髪型も。なんかのキャラクターに出てくるような王様。
D F± (Hd)		

### 3. 考察

#### 3.1. 感情表出のコントロール

Fが反応の多くを占めることから ( $F\%=63\%$ )、客観的な思考、態度を周囲に見せることが多いが、外界の刺激が知覚されることで『C』の内面は活発に動いている様子が確認された。とりわけリボンや花のような比較的肯定的な感情価を有する概念が色彩から連想されやすいことから、周囲の刺激に関心を向けることで気分を上向けるような適応的な感情調整が可能であると考えられる。そして色彩反応の多くがこのような肯定的なニュアンスを含む反応内容であることから、不快な感情は抑制され、快感情は表出させるといった情動価に基づくコントロールがされていると考えられる。再評価方略得点とPI (C) に確認された正の相関関係には、このようなプロセスが関与していると予想される。

しかし、色彩反応はFCが優位 ( $FC:CF+C=2.5:0.5$ ) であることから、感情表出に際して認知的な統制は十分に行われている。これは後述するように、強い情動刺激 (Ⅱ図版の色彩) への反応を避けることで生じられる感情そのものを調整し、表出過程における調整を容易にしていることも一因であると考えられる。

#### 3.2. ネガティブな刺激への注意抑制

強い情動刺激に曝されたときには、極力刺激から距離を置くことで対応する様子がⅡ図版への反応から見受けられた。このような刺激への対処は『C』のネガティブな刺激への注意コントロールの高さの現れと考えられる。つまり、不快感情を刺激するような強い色彩が呈示されたとき、そのような色彩刺激が一切含まれない空白領域に目を向けることで感情が喚起されることを防いでいる。これはプロセスモデル (Gross, 1998) における注意の方向づけに該当する制御方略であると推測される。

一方で彩色の印象が穏やかになるⅢ図版や多彩色図版では、比較的肯定的な情動価を有する反応内容に対して、色彩を決定因として取り入れている。これは不快刺激への注意を抑制し、快刺激に注意が向きやすい注意機能の影響も受けていると考えられるが、刺激の意味づけを変容させることで情緒的な衝撃を緩和させる再評価方略による調整過程が反映されている可能性もある。すなわち、不快感を伴うような概念についての再解釈を行ったり、効果的なネガティブ感情の低減が行われることで、解剖反応や損傷反応のような不安や抑うつを示唆する反応内容が減少したとも考えられる。



### 第3節 抑制方略得点の高い事例『F』

#### 1. 感情制御に見られる『F』の特徴

EST のスコアはいずれも大きな特徴を示さないが、ERQ-J の抑制方略得点が高く抑制方略群として第4章で取り上げた事例である (Table 4-14)。

Table 4-14. 『F』の EST 及び ERQ-J の各指標

Measure	Mean (SD)		Rank
干渉量	12.92	25.38 (28.34)	28/38
ネガティブ干渉	3.29	24.16 (38.81)	26/38
ポジティブ干渉	-20.65	24.48 (37.21)	35/38
再評価方略	4.17	4.55 (0.79)	25/39
抑制方略	5.25	3.92 (1.08)	4/39

#### 2. 『F』のロールシャッハ反応

『F』の Summary Scoring Table を Table 4-15 に示す。

Table 4-15. 『F』の Summary Scoring Table

R	45	W : D	13 : 26	M : FM	9 : 5
Rej	0	W%	29 %	F% / $\sum F\%$	47 / 96
Total Time	15' 07"	Dd%	11 %	F+% / $\sum F+\%$	67 / 70
RT (Av.)	1' 31"	S%	2 %	R+%	67 %
R1T (Av.)	0' 08"	W : M	13 : 9	H%	42 %
R1T (Av. N. C.)	0' 10"	M : $\sum C$	9 : 4	A%	33 %
R1T (Av. C. C.)	0' 05"	FM+m : Fc+c+C'	7 : 7.5	At%	7 %
MDC & Time	I 0' 20"	VIII+IX+X / R	44 %	P	8.5
		FC : CF+C	4 : 1.5	Content Range	10
		FC+CF+C : Fc+c+C'	5.5 : 7.5	Determinant Range	7

Ⅱ図版への最初の反応（Ⅱ-1：「二人の人間がハイタッチをしている」）は、P 反応に該当する形で人間像を捉えることができおり、外界の認知は的確に行われている（Table4-16）。しかし自由反応段階では「二人の人間」を見ていたにも関わらず、質問段階ではでは赤色領域（D3）を上手く処理することができず「地球人じゃない」対象に修正している。「二人の人間がハイタッチしている」ポジティブな人間関係と、「地球人じゃない」、「黒い手袋をはめて、黒いコートを着てる」不気味な印象が混在していることから、刺激の認知的な処理が十分に行われておらず情緒的な混乱が生じていると考えられる。

また次の反応（Ⅱ-2：「人の顔」）に対する赤色刺激の回避的な態度（空白領域を反応領域とした形態反応）は、最初の反応で生じた動揺へ対処した結果と推察される。赤色刺激の処理が上手くいかなかった初発反応を受け、情動刺激と一切かかわらないことで平静を保とうとする『F』の意図が垣間見えるが、形態水準は干と低く形態に対して十分な注意が向けられているとは言い難い。

Table 4-16. 『F』のⅡ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
Ⅱ-1 八 5”	二人の人間がハイタッチをしている。	頭（D3）は人間じゃないんですけど、ここ（d1）が手に見えて。二人の人間がしゃがんでハイタッチみたいな。 <？>膝曲がってて、ここが足。人間の頭じゃない(笑い)。 <頭？>頭は人間じゃなくて...なんとも言えない感じのやつ。地球人じゃないなって。<身体？>黒の手袋をはめて、黒のコートを着てる。魔法使いのコートみたいなゆったりした大きめのやつ。二人とも多分男。<男？>体つきが少しゴツいような気がするし、男の服と女の服ってちょっと違うから。男はちょっとゆったりで、女はラインに沿った服装ってイメージがある。ここは首に見えます。肌の色に似てる。
W M+, FC, FC' (H), Cg (P)		

Ⅱ図版では赤色刺激の出現に戸惑う『F』の様子が窺えたが、Ⅲ図版では形態特徴を的確に捉えたⅢ-1:「蝶ネクタイ (D3)」を最初に示し、検査者の確認に基づく消極的な説明ではあったが色彩への言及もされている (Table 4-17)。また、その後の2反応 (Ⅲ-2:「カマキリ」、Ⅲ-3:「二人の人間」) も形態の特徴を丁寧に説明していることから、強く情緒を揺さぶられるようなことがあっても状況が収まれば冷静さを取り戻すことが可能であると考えられる。

しかし、Ⅲ-2:「カマキリ」では歯の鋭さが強調されており、さらに最後の反応は解剖反応 (Ⅲ-4:「心臓」) であることから、感情に任せた激しい感情表出はされないものの、顕在化しにくい内的な不安、攻撃性の高まりは刺激に曝され続けることで起こり得る。

Table 4-17. 『F』のⅢ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
Ⅲ-2 ∧ 10"	カマキリ？	これ (D7) が目、これ (D5 の下部) が鋭い歯、これが手。すごい細いから、全体的に。だからカマキリ。＜領域？＞この部分 (D5, D4×2) だけでカマキリ。＜らしさ＞目が大きい。あと身体が細い。歯が本当に鋭い。カマキリ (歯が) 本当に鋭いかわからないんですけど、鋭いイメージがあるので。ここが関節感を感じる、曲がるなーって。
D F± Ad AGC		

Ⅷ図版の初発反応で素早く P 反応 (Ⅷ-1:「熊」) を示している点からは、多彩色図版に対する動揺は見受けられない (Table 4-18)。さらに続けて全く同じ見方をしたⅧ-2:「トラ」、Ⅷ-3:「モグラ」が続けられるが、質問段階では「トラよりは熊の方が近い」と説明されているにも関わらず「トラ」を、さらに「トラ」を「スモール化する」ことで「モグラ」を反応としている。この3反応からは、情緒を刺激するような状況でも冷静さを保ち適応的な行動をとることが可能であるが、その内面では敵意や攻撃性といった感情が生起し、あるいはその抑制が行われていることが示唆される。

さらに情動刺激に曝される続けることで内的な統制が難しくなっていく。四つ目以降の反応では、Ⅷ-4:「心臓」、Ⅷ-5:「肺」、Ⅷ-6:「太った面白い人」と、快感情、不快感情を含む様々な情緒的体験がされている。これは情緒的な混乱を呈したⅡ図版への反応と同様の特徴である。またⅧ-4:「心臓」、Ⅷ-5:「肺」と色彩の適合度が高いにも関わらず形態特徴のみに言及している点からは、感情行動の表出を抑制しようとする『F』の意識的な感情制御の様相が窺える。しかし一方で、解剖反応が平然と産出されていることから、自身の

内的な不安には目が向きにくく、それ故に感情体験を調整するような動機づけが生じにくい可能性もある。

Table 4-18. 『F』のⅧ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
VIII-2 ^ 10”	トラ。	熊と全く同じ。トラにも見えた。＜？＞まず上に登ってるからパワーがある。パワーがあるってことは熊かトラかそんな感じかなって。＜熊との違い？＞トラよりは熊の方が近い。トラは首があるけどこれ（D1）は首がつながってるから熊っぽい。
		D FM± A P’ AGC
VIII-3 ^ 18”	モグラ？	サイズをスモール化するとモグラでもこんな形かなって。くらしさ？＞これは完全に首がないからです。＜身体？＞（前の2反応と）全く同じです。＜他には？＞毛が生えてるってイメージがある、この絵には。微妙な波のところ。
		D F± A
VIII-6 V 1’ 04”	（笑いながら）太った面白い人。	これは全部が1つの絵。笑ってる口、上のひげ（D7）、下のひげ（D3）、まん丸の形の顔でこれ（D1）が髪の毛。これ（D2 上部）が目。目が面白くてたるんでる目。この上に変な髪の毛をのせてる。＜面白い？＞目が面白くて、顔の太ってるのも面白くて、髪形も面白いし、ひげも面白い。歯も口も面白くなって。なんか全てが面白くなって（笑い）。＜太った？＞ここ（輪郭）が丸いから。
		W F± Hd

IX図版においても同様の反応継起を示している。初めは形態を的確に捉えた形態反応（IX-1：「鼻」）を産出しているが、その後はIX-2：「怒ってる人間」、IX-3：「炎」、IX-4：「笑ってるゴリラ」と、様々な感情が生起する（Table 4-19）。とりわけIX-2：「怒ってる人間」では、「目」や「ひげ」が上向いて燃えているように見える点から怒りを説明しつつも、「口」には悲しみが表現されており、情緒的な混乱が見受けられた。これらの反応継起からは、状況が変化した直後は情動刺激に反応することなく平静を保っていられるが、次第に内面が揺れ動いていくことが予想される。

IX-3：「炎」についてはVIII図版での二つの解剖反応と同様に、関与していることが明確である色彩を反応から排しており（「色は違うんですけど」）、本人の自覚の乏しさや強引な形で感情表出の抑制が行われている。

Table 4-19. 『F』のIX図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
IX-2 △ 18”	怒ってる人間。	目がこれ（D3）で、全体で人間。燃え上がってる目みたいな、燃えてるイメージ。上のひげ（D1）も「燃えてるぜー」みたいな。気で上がってる。口（D1 と D2 の間）も悲しいじゃないですけどそういう風に見えて。鼻も加えたら怒ってるなこの人、みたいな。 <div style="text-align: right;">W M〒, m Hd AGM</div>
IX-3 △ 33”	炎。	色は違うんですけど、形的に燃えてる感じ（D3）。＜形？＞炎上、じゃないですけど燃えてるみたいな。 <div style="text-align: right;">D mF〒 Fire</div>

X-1:「ひげ」、X-2:「クモ」、X-3:「カニ」と部分領域に形態水準の高い形態反応を立て続けに産出していることから、状況の変化に伴い客観性を取り戻す様子はX図版でも同様であった。また、獐猛さが過度に強調されているX-4:「牛」(Table 4-20)や、「いっぱい」を装備したX-5:「原人」など攻撃的な感情を含む反応や、MOR(X-6:「かわいそうな目」)が産出されるなど徐々に不快感情が生起してくる点も、Ⅷ、Ⅸ図版に見られた感情のプロセスを再現するものであった。

八つ目以降の反応では、性的な反応内容(X-8:「ブラジャー」)やF/Cに近い表面的な情動表現(Klopfer & Davidson, 1962 河合訳 1964)がされた反応(X-9:「真っ赤な髪の毛」)、一切コントロールされていない反応(X-10:「血」)など、これまでに見られなかったような反応表出が行われている。これはⅧ、Ⅸ図版から立て続けに多彩色図版と関わり、さらにはX図版に対しては最も多くの反応を示していたことから、情緒的な刺激に曝され続けることで生じる負荷が最も高まった結果と考えられる。したがって、感情を刺激されるようなことがあったとしても基本的には自身のうちに抑え、感情を表出させるようなことはまれであるが、その状況が継続するなど負荷が高まることで、全くコントロールされていない感情表出が生じることもあると予想される。

Table 4-20. 『F』のX図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
X-4 ∧ 29”	牛。	これ(D11)です。猛牛。角がついててめっちゃ尖がってて。跳躍してどっかに飛び乗ろうとしてる。角がめっちゃ尖がってるし、こう飛んでる形だし、身体もすごいごつい。強そうな猛牛。＜角以外？＞顔、前足、牛足。
		D FM± A AGC



### 3. 考察

#### 3.1. 情動反応の抑制

『F』の色彩反応に見られる特徴の一つは、FCが多く形態優位な傾向を示す（FC：CF+C=4：1.5）ものの、形態水準が低いFCやCも同様に産出されていることである。形態水準の高いFCはⅡ，Ⅲ図版の初発反応で産出されているが、色彩が関与するのはインクブロットの小部分であったり（Ⅱ-1：「二人の人間」），テスターの確認で初めて色彩に言及する（Ⅲ-1：「蝶ネクタイ」）など、色彩の利用に対しては非常に消極的である。一方で、形態水準の低いFC（Ⅲ-4：「心臓」，X-9：「真っ赤な髪の毛」）やC（X-10：「血」）はそれぞれ、各図版の最後に現れる傾向にあった。したがって、情動刺激に曝されたとしてもはじめのうちは適応的な感情反応を示すことができるが、そのコントロールは徐々に失われ、不適切な適応への試み（Rapaport et al., 1968）や全く統制されない感情反応の表出が生じてくることが予想される。

また、インクブロット上の彩色と概念の固有色が一致しているにも関わらず、色彩への言及を避けるような様子も窺えた。その多くが解剖反応や炎反応であったことから、外部から刺激されることで様々な情動が生起するものの、周囲に対して明確な反応を示さないことが『F』の基本的な態度であると予想される。このようなうちに抱える情動を表面化しないような形でコントロールする処理様式は、行動レベルの感情制御である抑制方略の現れであると考えられる。

#### 3.2. 体験される感情の高まり

各彩色図版に対してはP反応を始めとする形態を的確に捉えた反応の産出から始まり、色彩刺激と関わるなかで感情状態が高まり、最終的に表面化していく様子が窺えた。このような傾向はとりわけ多彩色図版に顕著であり、Ⅷ，Ⅸ，Ⅹ図版それぞれに見られる反応継起，そしてⅩ図版の終盤でコントロール不全に陥るなど図版を通した反応継起から、回避できない刺激に曝され続けることで内的な感情の高揚を抑えきれなくなると考えられる。

上述のように、ロ・テストに見られる『F』の感情のコントロールは、抑制方略を用いた感情制御プロセスと類似する。また抑制方略の使用は、体験されるネガティブ感情の低減に寄与しない（Gross & John, 2003; 野口・吉川, 2009）ばかりか、ときには増加させる（Gross & Levenson, 1997）ことが報告されている。感情表出は抑制し、感情体験そのものが低減されない『F』のロ・テストに見られる特徴は、感情制御研究における抑制方略の知見と一致するものであった。

## 第4節 注意制御が得意で再評価と抑制を頻用する事例『H』

### 1. 情動制御に見られる『H』の特徴

ESTの干渉量からは干渉刺激からほとんど影響を受けていない様子が窺え、全協力者のうち2番目に低い干渉量であった（Table 4-21）。またERQ-Jのスコアは再評価方略得点、抑制方略得点のいずれも高く、両指標とも2番目に高い値を示している。したがって、情動刺激に対する注意制御が十分に機能し、尚且つ認知的、行動的なレベルでの感情制御を積極的に行っていると推測される。

Table 4-21. 『H』のEST及びERQ-Jの各指標

Measure	Mean (SD)		Rank
干渉量	-11.08	25.38 (28.34)	37/38
ネガティブ干渉	-1.13	24.16 (38.81)	29/38
ポジティブ干渉	0.39	24.48 (37.21)	28/38
再評価方略	6.00	4.55 (0.79)	2/39
抑制方略	6.00	3.92 (1.08)	2/39

### 2. 『H』のロールシャッハ反応

『H』のSummary Scoring TableをTable 4-22に示す。

Table 4-22. 『H』のSummary Scoring Table

R	44	W : D	6 : 31	M : FM	5 : 5
Rej	0	W%	14 %	F% / $\sum F\%$	34 / 84
Total Time	12' 38"	Dd%	16 %	F+% / $\sum F+%$	80 / 84
RT (Av.)	1' 16"	S%	0 %	R+%	73 %
R1T (Av.)	0' 07"	W : M	6 : 5	H%	25 %
R1T (Av. N. C.)	0' 07"	M : $\sum C$	5 : 8	A%	36 %
R1T (Av. C. C.)	0' 07"	FM+m : Fc+c+C'	10 : 11	At%	0 %
MDC & Time	VII, X 0' 11"	VIII+IX+X / R	39%	P	4
		FC : CF+C	5 : 5.5	Content Range	11
		FC+CF+C : Fc+c+C'	10.5 : 11	Determinant Range	11

II 図版では、はじめから赤色を輪郭として用いて形態水準の高い反応を産出している（II-1：「蝶」）。また、この反応ではインクブロット内部の濃淡に注意を向け、決定因として利用していることから、強い色彩刺激の出現に驚いた様子は見られない。次の反応（II-2：「両手」）では上部の赤色領域（D3）をカットすることで dr の反応領域がスコアされ、II-1：「蝶」同様に濃淡に言及していることから、インクブロットに対する能動的な関わりが確認される。最後の反応ではインクブロットの全体が用いられ、「時計台」と「森」が遠近感を交えながら統合されている（II-3：「時計台と森」）。この反応で初めて色彩が決定因として使用され、黒色に滲むように描かれている赤色刺激を「紅葉した葉っぱ」とし「森」の説明を豊かなものとしている（Table 4-23）。

I 図版の初発反応時間（R1T=8"）と比べても大した遅れは認められず、加えて最初の反応から彩色領域を用いた形態反応を示せていることから、情動刺激による混乱は認められない。また、色彩に対して回避的なわけでもなく、最後の反応では赤色を決定因として取り入れられている点も特徴の一つである。

Table 4-23. 『H』のII図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
II-1 △ 10"	ここ（D2）の赤い模様が蝶に見えます。	向かい合ってるこの部分が羽みたいだなんて思って。あとこのちょって出てるところが羽の下に伸びてる羽の形なのかなって思いました。あと真ん中のところだけ色が薄いので、頭、身体の部分なのかなって思いました。＜他？＞あと若干ここが薄くて、ここが触角。
		D F±, Fc A
II-3 △ 37"	黒いところが時計台とか建物に見えます。それで手前の黒い部分が森に見えます。	遠くから見て、上がとがってるから高い建物（d1）。このあたりに扉がある。あとこのあたりに時計があったら時計台みたいだなんて。洋風な建物のレンガ造りとかの。＜大きい？＞遠くの大きい建物を見たら下が大きく見えて上が小さく見えるじゃないですか。だからそういうことなのかなって。＜森？＞さっきの建物を見たときに、じゃあここ（D1）はなんなんだろうなって思ったら森があって。だから遠くから見て。あと黒いじゃないですか。だから木がいっぱい生い茂ってるかなって思ったのと、若干赤い色が生い茂ってるって思ったので紅葉した葉っぱとかあるかなって思った。
		Wc FK±, C'F, CF, cF Arch, Na

Ⅲ図版への最初の反応は出現頻度の高い「リボン」であるが、色彩ではなく濃淡の特徴を用いて説明を行っている点には個性が現れている（Table 4-24）。また、この傾向は次の反応「火の玉」においても同様に見られ、色彩の関与が自明であるにも関わらず色彩は決定因として用いられておらず、説明は形態的特徴に終始している。これらの反応からは、自身の感情を表明することに対して消極的、慎重な『H』の感情コントロールの様相が窺い知ることができる。

Table 4-24. 『H』のⅢ図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
Ⅲ-1 △ 3”	真ん中の赤いところ（D3）がリボンに見えます。	ここが結び目、ここがこうなっているところ（羽根の部分を手で表現）。＜らしさ？＞結んだ時にここにしわが入るんで。ここが濃いから結んであるのかなって。 <div style="text-align: right;">D F±, Fc Cg</div>
Ⅲ-2 △ 12”	外側の二つ（D1×2）の赤が火の玉に見えます。	ここが若干薄くて、ここが若干濃くて。宙に浮いてるのかなって思ったんで火の玉。＜他？＞形が似てる以外は、この（図版）全体で見た大きさに大きすぎもしないし小さすぎもしないので火の玉なのかなって思いました。あとは若干インクがはねてるんで、それも火の玉みたいだなって思いました。 <div style="text-align: right;">D mF±, cF Fire</div>

強く、不快な刺激と認知されやすい赤色刺激に対しては輪郭の形態的特徴を利用するような関わりに留まり、「リボン」や「火の玉」のような反応に対しても色彩に関する言及が確認されなかった。しかし色彩が比較的穏やかになる多彩色図版では、積極的な感情表出が行われるようになる。

VIII図版の最初の反応では、「すごい鮮やか」という快感情の表現とともにVIII-1:「ハイビスカス」が産出されている (Table 4-25)。この反応ではインクブロットの形態に基づき「雄しべとか雌しべ」といった細部を説明しつつ、さらには「ハイビスカス」と花の種類を限定することで規定性を高めている。色彩によって生じる漠然とした印象で反応することなく能動的に関わっていく姿勢が窺え、これは喚起された感情やその原因となった刺激に対する積極的な関わりとして解釈できる。

次の反応 (VIII-2:「ドラゴン (D7)」) でも、形態を丁寧に捉えつつも色彩が統合 (FM±, FC) されており、適度に統制された形で情緒的な反応を示している。さらに続く3反応はそれぞれ、使用していない反応領域を埋めるような反応 (VIII-3:「イグアナ (D1)」、VIII-4:「手 (dd)」, VIII-5:「コウモリ (D3)」) が続き、彩色が豊かなVIII図版に対して十分な関わりを持っており、色彩に圧倒されている様子は見受けられない。

Table 4-25. 『H』のVIII図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
VIII-1 「 8」	この下のところ (D2) がハイビスカスみたいな花に見えます。	このあたり (D5) が花びら。真ん中の一本出てるオレンジのところは花の真ん中の、雄しべとか雌しべとかそのあたり。＜ハイビスカス？＞色が赤とオレンジですごい鮮やかだったのと、真ん中と花びらのところで若干色が違うところがハイビスカスみたいだなって。
D FC± Pl.f		

IX-1:「ガスコンロの火」では、色彩への言及は控えめで形態の説明がほとんどであること、「ガスコンロ」と限定することで火の形態の不確定性を補っていることからFCがスコアされている。この反応にも色彩に対する能動的な関わりが窺え、Ⅷ図版と同様の形で感情のコントロールが行われている (Table 4-26)。

後続する反応の多く (IX-2:「葉っぱ」、IX-3:「青い火」、IX-5:「炎」、IX-6:「花」) にCFがスコアされていることから、情動刺激と関わり続けるなかで『H』の感情は高まり、統制が不十分なまま表出されていると言える。すなわち、最初の反応 (IX-1:「ガスコンロの火」) のような能動的な認知処理を行うことで適応的な感情表出がされる一方で、そのコントロールには限界がある。しかしこれらの反応には概念の形態が不確定であることを理由にCFがスコアされており、形態の説明が優先されていることから、反応に伴う情緒性は激しいものではない。また植物反応 (IX-2:「葉っぱ」、IX-6:「花」) や穏やかな彩色に対する炎反応 (IX-3:「青い火」) など、比較的ポジティブに捉えられる概念が反応内容となっている点からは、不快な感情体験が生じているとは考えにくく、感情表出を抑制するような動機づけが高まらなかった結果であるかもしれない。

Table 4-26. 『H』のIX図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
IX-1 / 4”	一番下の赤 (D2) がガスコンロの火に見えます。	下から出てる火に見えた。上の方が若干細くなったりするので火の形に似てるなって思いました。＜ガスコンロ？＞形が丸くなって内側に出てるのでガスコンロの火かって。＜他？＞やっぱり赤色だから。
D Fm±, FC Fire		
IX-6 / 1’ 18”	下の赤いところと緑のところだけで見ると花に見えます。逆さまの。	ここ (D5) に茎があってここ (D1×2) に葉っぱがあって。じゃあこの赤いの (D2) なんだろうって思ったら、こういう風に咲いてる花なのかなって。＜らしさ？＞茎の色が水色で、緑とかオレンジとか入ってきて、ここが赤と混ざってて。じゃあ一本のものなのかなって思った。あとは色ですかね、全体的な。
W CF± Pl.f		



X図版においても、初発反応から色彩を取り入れる様子が見られた。X-1:「枯れた花」では、形態と色彩の双方に対して十分注意を向けることができおり、両刺激が上手く統合されている (Table 4-27)。しかし、この花は枯れており、その理由として「元気なさそうな色してる」ことを挙げていることから、疲労感や傷つきといった不快感情が『H』に生じていることを示唆している。

その後の反応 (X-2:「葉っぱについた雪の結晶」、X-3:「墓標」、X-5:「唐辛子と水滴」) においても形態水準の高い FC がスコアされており、十分にコントロールされた形で情緒的反応性がされている。しかし X-1:「枯れた花」同様に、不安感が垣間見える反応内容 (「墓標」) も産出されていることから、Ⅷ図版以降の積極的な外界との関わりに疲弊している様子も窺える。

Table 4-27. 『H』のX図版への反応

No.	Free Association	Inquiry & Scoring
X-1 / 11”	赤 (D10) と茶色の部分 (D9) と黄色のここ (D8) を入れると枯れた花に見えます。	ここが茎とか葉っぱとかのところで、ここが葉っぱのついてるところ。こことここが花。枯れてると思った理由は元気なさそうな色してるところと、花も閉じてるところから枯れてるんだろうなって。あと、花が落ちそうなところ。＜落ちそう?＞ここが細くなってて下向いてて。もうすぐ落ちるんだろうなって。
D CF $\mp$ , m Pl.f MOR		
X-3 / 44”	茶色の部分が昔のお墓とかの墓標? に見えます。木でできている。	ここの一本まっすぐ出てるところが (d2 の上部) 木でできてる...名前書いたりしてるやつ。あれなのかなって思っ て。周りの茶色のは土、刺さってる。＜らしさ?＞形がまっすぐ出でて、ここが (D4) こうなってるから (手で表現) お墓っぽいなって。あと色が茶色だったんで。(笑いながら) アバウトですいません。
D FC $\pm$ Obj, Na		

### 3. 考察

#### 3.1. FC の反応産出過程について

多彩色図版ではいくつかの色彩反応が産出されたが、花や火のように形態規定性が低い反応内容が多かった。これらの反応特徴には、外界の刺激に対して受動的な『H』の態度が見受けられた。しかし激しい感情表現がなされていないことからは一定の感情調整は行われていると考えられる。

特にこの傾向が強く感じられたのが、Ⅷ-1:「ハイビスカス」とⅨ-1:「ガスコンロの火」の2反応である。彩色図版の反応産出過程では色彩の知覚が先行するが、注意を惹く色彩刺激に捉われることなく形態をはじめとする他の特徴に注意を向けることが被検者に求められる(Shachatel, 1966 空井・上芝訳 1975)。したがって、「ハイビスカス」や「ガスコンロの火」のように、花や火といった概念から下位カテゴリーへ限定するような認知処理には、受動的に知覚される情動刺激や喚起した感情に即座に反応するのではなく、冷静に刺激と関わりながら感情表出を統制しようとする心の働きを要する。このように、色彩刺激から他の刺激へと注意を移行させる注意コントロールや、脅威度の高い反応内容(火)を実用性の伴う無害な形(「ガスコンロの火」)に意味づけし直すような認知的操作を介すことで、FCが産出され得ると考えられる。

#### 3.2. 感情表出場面と感情のコントロール

『H』の色彩反応の産出に関するもう一つの特徴は、Ⅱ、Ⅲ図版では色彩の利用は消極的であったのに対し、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ図版では積極的に色彩を反応に取り入れている点である。最も激しい彩色図版であるⅡ図版(馬場, 1999)では、赤色領域を反応に用いながらも赤色を決定因として使用することは避け、最後の反応でようやく情緒性を伴わない内容に赤色を取り入れている(Ⅱ-3:「時計台と森」)。また、続くⅢ図版においても「リボン」、「火の玉」で赤色に言及することを避けており、感情を表出することに対して非常に慎重な姿勢を貫いている。これらの反応特徴には、『F』にも見られたような行動段階における感情のコントロールが行われていると考えられる。

しかし多彩色図版では多くの反応が色彩反応となっており、Ⅱ、Ⅲ図版とは異なる様相を示している。この相違が生じている理由の一つが色彩刺激の持つ情緒性の違いであり、赤色刺激は血を連想させやすく不快感情を喚起しやすい一方で、多彩色図版ではポジティブな気分変化が生じることもあるとされている(馬場, 1999)。すなわち、強く感情が掻き立てられるような状況では慎重に感じられるほど感情表出を抑制するが、快感情を刺激されるような場面では安心して表現が行えていると言える。反応内容からも同様の傾向が窺え、血液反応や解剖反応といった不快感情と関連するような内容の反応は産出されておらず、比較的コントロールされた形で表現された炎反応や色彩の鮮やかさが強調された花反

応が色彩反応の多くを占めている。このように、状況に応じて感情を表出するか否かを判断し、必要に応じて統制することが『H』の感情処理に見られる適応性であると考えられる。

## 第5章 総合考察

本章では総合考察として、はじめにこれまで行われてきた一連の研究について要約を行い、実証的に支持された点を整理する（第1節）。さらに、本研究の結果を基に、彩色図版に対するロールシャッハ反応の産出過程についてモデル化を試み（第2節）、そのモデルについて他の反応産出モデルとの比較を行う（第3節）。そして最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる（第4節）。

### 第1節 各研究の要約

ロ・テストの重要な解釈仮説である色彩情動仮説については、臨床群を対象とした研究や質問紙法を用いた研究によってその妥当性が検討されてきた。しかし、これらの研究には結果の一貫性、再現性の低さや、研究アプローチに対する批判にさらされるなど、未だに様々な課題を抱えている。

近年ではロ・テストの反応産出過程に着目した研究が多く報告されるようになり、そのプロセスを考慮しながら解釈仮説の妥当性を検討することが望まれている。色彩情動仮説（Rorschach, 1921 鈴木訳 1998）では、インクプロット上の色彩刺激の処理がどのように行われるのかを観察することによって、被検者の感情が処理される様相をアセスメントすることが可能とされている。したがって本論文では、感情制御のプロセスモデル（Gross, 1998）を参考とすることで感情の調整を一連のプロセスとして捉え、ロールシャッハ反応の産出過程における色彩刺激の処理との比較、検討を行うことを目的とした。とりわけ、情動刺激への注意制御、そして先行焦点型感情調節、反応焦点型感情調節それぞれを代表する方略として再評価方略、抑制方略に着目し、認知課題の一つである EST、そして質問紙の ERQ-J を用いた検討を各章で行った。

第2章では、認知課題の一つである EST を用いて情動刺激に対する被検者の注意制御機能を測定し、ロールシャッハ指標との関連を検討した。はじめに、彩色図版上に生じる不適切な認知処理に関わる情動刺激への注意制御の役割についていくつかの知見が得られた。インクプロットの刺激特徴の結合の失敗である INCOM（Exner, 2003 中村・野田訳 2009）は、EST の干渉量が大きいほど彩色図版上で生じやすいことが研究1で示されたことから、情動刺激による干渉の結果として INCOM のような不適切な認知処理が生じ得ることが明らかとなった。

EST の干渉量の解釈として、情動刺激への注意の向きやすさを表しているのか、あるいは課題非関連な刺激への注意制御の機能を示しているのかが不明確であった。しかし全反応を対象とし注意制御に焦点づけたロールシャッハ指標の検討を行った研究2、そして干渉

刺激の情動価を考慮した研究3の結果より、彩色図版における INCOM の産出過程では、単に注意制御の失敗が生じているだけではなく、とりわけ不快感情を喚起させるような情動価を有する刺激による干渉の影響を大きく受けることが示唆された。これは、彩色図版において認知的な混乱が生じやすいロ・テスト上での特徴が、ネガティブな刺激に対する戸惑いとして解釈する従来の知見（Rorschach, 1921 鈴木訳 1998）を支持するものであった。

また第2章におけるもう一つの発見は、形態優位群と色彩優位群における注意制御機能の群間差である。色彩優位群の方が情動刺激への注意制御が苦手であること（研究1）、そしてこの傾向はとりわけポジティブ情動刺激の処理に特有であること（研究3）が示されたことから、不快感を伴うような反応内容ではなく、快感情を刺激するような反応に対して積極的に関わろうとする態度が、色彩優位な反応の産出を促進していると考えられる。一方でネガティブな情動刺激から注意を解放できないことによる反応産出過程での特徴の一つが、彩色図版における反応産出の遅れであった（研究3）。この結果は、彩色図版へ反応が遅れる特徴を、喚起された感情による戸惑いを表すとするカラーショックの解釈

（Rorschach, 1921 鈴木訳 1998）に対する実証的な知見と言える。

第3章では、ERQ-J を用いて再評価方略と抑制方略の使用頻度について尋ね、色彩に関するロールシャッハ指標との関連を検討した。少数の事例検討に基づきロールシャッハ指標を選定し、数量分析を行ったところ、以下のような結果が得られた。刺激のもつ意味やその解釈を変容させることで情緒的な衝撃を緩和する認知的方略である再評価は、花反応、植物反応の産出に促進的に働くことが示唆された。この結果は、不快感を刺激するような色彩に対して意味づけの変容を促すような認知的な操作を加えることで不快感情を低減し、ポジティブな感情状態を維持するようなプロセスが生じている可能性を呈示した。これは、再評価方略がポジティブ感情の増加に効果的であることを示すいくつかの研究報告（Gross & John, 2003; Gross & Levenson, 1997）によって支持される。

また抑制方略の使用が解剖反応や血液反応、MOR、AG といった反応内容の産出に促進的に作用することが明らかになった。色彩反応は感情表出に関する被検者の特徴を表す

（Rorschach, 1921 鈴木訳 1998）一方で、これらの反応内容は主に表出の有無を問わない情緒的な体験として解釈されている（Exner, 2003 中村・野田訳 2009）。このように、彩色図版へ反応するなかで傷つきや攻撃性が高まる様子は、体験される感情の低減には効果的ではない（John & Gross, 2004）抑制方略の特徴と一致するものであった。

第4章では、第2、3章で得られた結果について、数量研究からは把握できない反応のプロセスを検討するために4名のロ・テストについて事例研究が行われた。ネガティブ干渉が大きく不快な刺激への注意抑制が困難な事例『G』では、インクプロットの彩色から注意を逸らすことが難しく、その結果として損傷を伴う反応や、統合が上手くいかない不合理な反応が産出される様子が見受けられた。次に、高い再評価方略得点を示した事例『C』においては、コントロールされた形で色彩を反応に取り入れ、快感情を伴うような反応内容が多いことが特徴として確認された。一方で抑制方略得点が高かった事例『F』のプロトコ

ルからは、色彩に対して過度に思えるほどのコントロールが加えられているが、反応を続けていくうちに体験される感情が高まる様子が見受けられた。最後に、ロールシャッハ反応の産出過程における各々の感情制御のプロセスの関連性について具体的な検討を行うため、干渉量が小さく、ERQ-Jの両方略得点が高い事例『H』を選択し、事例検討を行った。その結果、FCが産出されるまでの認知処理の一端が明らかとなり、また色彩刺激に対するコントロールが生じる場面、状況を踏まえて反応産出過程を考察する必要があることが示された。



## 第2節 色彩刺激の処理と感情制御プロセス

本節では、一連の研究から得られた知見に基づき、反応産出過程における色彩刺激の処理について、感情制御のプロセスモデル(Gross, 1998)及び反応産出過程に関する理論(Exner, 2003 中村・野田訳 2009; 辻, 1997)と併せて論じる (Figure 5-1)。

### 1. 反応産出過程における様々な感情制御

Figure 5-1 に示したように、彩色図版に対する被検者の反応産出過程は「色彩刺激の知覚」によって始まる。この過程では、インクプロット上の様々な色彩が被検者に認知され、それに伴い被検者の感情が刺激される (Rorschach, 1921 鈴木訳 1998)。色彩刺激からどのような印象を受けるかは知覚者や刺激の種類により異なることが予想されるが、生起する感情によって異なる反応産出過程が生じることが、本研究より明らかとなった。

色彩刺激を知覚することで比較的肯定的な感情が生起した場合、色彩に対する能動的なコントロールは生じにくいことが研究3より示された (「快感情の表出」)。これは、喜びなどのポジティブな感情を他者と共有したい、という動機づけに基づく周囲に向けた活発な態度の現れであると考えられる。したがって、快感情を刺激するような色彩刺激に対して注意が向きやすい人ほど感情表出に対する動機づけは高まり、その結果として色彩を抑制することなく、植物反応のような肯定的な情動価を含む色彩優位な反応の産出を促していることが予想される。

一方で、色彩刺激の知覚によって不快感が刺激されるような場合、その感情を喚起させる色彩から注意を解放し、形態へ注意を向けることで、適応的な感情表出に向けたより能動的な調整が行われる (「注意制御」)。本研究では、この注意制御が後続の反応産出過程に影響し、被検者の特徴となって示されることが明らかにされた。例えば、不快感を刺激するような彩色を反応領域とすることを避ける、あるいは形態へ能動的に注意を向けることで形態水準の高い色彩反応 (FC±) が産出される。

しかしこのような注意制御が全て上手くいくとは限らない。色彩によって生起する不快感が強く注意制御の過程における調整が失敗した場合には、形態へ注意を定位させることが困難となる、あるいは形態と色彩の統合が適切に行われないといった過程を経て、不適応的なサインとなり得る反応が産出される。色彩刺激から注意を解放できず、そこに生じる情動性を無視することが難しい場合 (「形<色」)、その情動価について認知的な調整が行われる。この「認知的変化」のプロセスでは、刺激に対する意味づけを再解釈するような認知処理が生じるが、その情動性が操作され不快さが緩和されることで結果として、植物反応など肯定的な情動価を含む色彩優位な反応 (「CF (PI)」) が産出されると考えられる。

「認知的変化」による調整が上手くいかず、刺激に対する不快感が維持されている場合には、最後の「反応調整」のプロセスに至る。この過程では、色彩刺激の知覚によって生

起した感情に対する直接的な調整は行われない。すなわち、感情体験（反応内容）を変化させることはないものの、その感情を表出するか否か、言い換えれば、決定因として色彩を用いないことで反応がコントロールされる。このプロセスにおける調整が適切に行われれば、例えば決定因としてFが付与されるAtのような、感情は高まりつつも表面上はその感情が抑制されたことを示す反応が産出される。一方で、この「反応調整」のプロセスが生じない、あるいは上手く働かなかった場合には、CF、BIのように、それまでに喚起した不快感情が色彩とともに表出されることもある。

また、形態の特徴を十分に捉えつつも色彩から注意を解放できない状況に陥ると（「形≡色」）、INCOMのように形態と色彩を無理に統合させたような反応が産出される。このような反応は、周囲に合わせた冷静な対応に努めると同時に、自身の感情に揺さぶられることで行動と感情との間に不一致が生じた結果として解釈できる。さらに、インクブロットの外輪郭に十分注意を向け、形態優位な反応を形成できたとしても、色彩の不快感から注意を逸らすことに失敗した場合には、形態水準の低いFCが産出されると推測される。

以上のような多彩なコントロールの結果、ロ・テストの色彩刺激は処理される考えられる。しかし、それぞれの被検者が決まったプロセスを反復するわけではなく、反応を繰り返すなかで感情状態の変化や心理的な疲弊も生じる。そのような場合には、上記のような一連の制御過程を介すことなく、色彩刺激の知覚によって生じた不快感が表現される可能性が高まる（「無自覚・疲弊」）。具体的には、BIやAtのように、これまでは反応として産出されることのなかった不適応的な色彩反応が産出されやすくなると考えられる。また、自身の感情に対して無自覚である場合にも、同様のプロセスを経た情緒的な反応が産出されるだろう。

## 2. 色彩反応の産出過程

色彩は意識せずとも知覚される刺激特徴であり（Shachtel, 1966 空井・上芝訳 1975）、その刺激を知覚するなかで能動的な関わりがどの程度可能であるかによって、異なる色彩反応が産出されると考えられている。すなわち、受動的に知覚される色彩刺激が全く統制を受けずに表現されればCが産出されるが、形態に注意を向け、その特徴に基づき反応を形成することでCFやFCといった形態の関与する色彩反応が産出される。

以上のような、受動的な色彩の知覚から継時的に形態の特徴が統合されていく過程が、本研究の結果から示された。高い注意制御の傾向を示す人の方が形態優位な反応を示す傾向にあるという結果からは、色彩から注意を解放し、相対的に形態に注意を向けることでFCが産出されることが推測される。また、抑制方略得点が高い2事例からは、AtやFireのような形態の規定性が曖昧な概念の説明に際して、下位概念に限定することで形態の規定性を高めFCとする（事例『H』）、あるいは色彩を説明に用いずに形態の特徴のみに言及する（事例『F』）といった反応産出過程が確認された。

これらの結果からは、上述のような段階的な制御プロセスを経ることで色彩に対して形態が統合されて行き、その程度によっていずれの色彩反応が産出されるかが定まることを示している。また、色彩の関与が明確な反応内容であっても、決定因として色彩を用いないことで形態反応を形成するようなプロセスも確認され、色彩優位な反応（C, CF）から形態優位な色彩反応（FC）、そして色彩を排した形態反応（F）と、形態反応を含め連続的な関係性が想定され得ることを明らかにした。

### 3. 彩色図版に対する反応の遅れ

彩色図版に対して反応が遅れる現象はカラーショックを示す重要なサインの一つであるとされているが、その遅れがどのような認知処理を経た結果生じているのかについては議論が不十分である。

研究3の結果は、不快な刺激に対して注意が向きやすいほど彩色図版に対する初発反応が遅れる傾向があることを示している。したがって、色彩刺激を知覚し不快感情が生起することで、反応産出に要する時間が長くなると考えられる。この結果は、彩色図版への反応の遅れを情緒刺激に対する戸惑いを表すとする従来解釈（Rorschach, 1921 鈴木訳 1998）と一致する知見である。

本論文で示した反応産出モデル（Table 5-1）に基づくと、以下のようなプロセスを経て、反応の遅れが生じていると考えられる。はじめに、先述のように、色彩刺激から快感情が生起した場合には色彩に対するコントロールは生じにくく、色彩優位な状態で反応産出されることが多い。それに対して、不快感を伴う刺激に注意が向いた場合には、様々な制御プロセスを経てコントロールされる。すなわち、不快感情が生起する過程では、その色彩を制御しようとしてより多くの認知処理を介すことから、反応産出に時間を要すると推測される。

また、色彩刺激によって不快感を伴う連想が生じたとしても、それが反応として全て言語化されるわけではない。すなわち、検閲（Exner, 2003 中村・野田訳 2009）の過程で想起された概念が反応として不適切であると判断された場合（例えば、血液や臓器など）、その反応の候補は取り下げられ、別の候補の探索に処理が移る（「反応の放棄」→「色彩刺激の知覚」）。このように反応産出過程がリセットされることで、反応産出が遅れるようなプロセスも考え得るだろう。

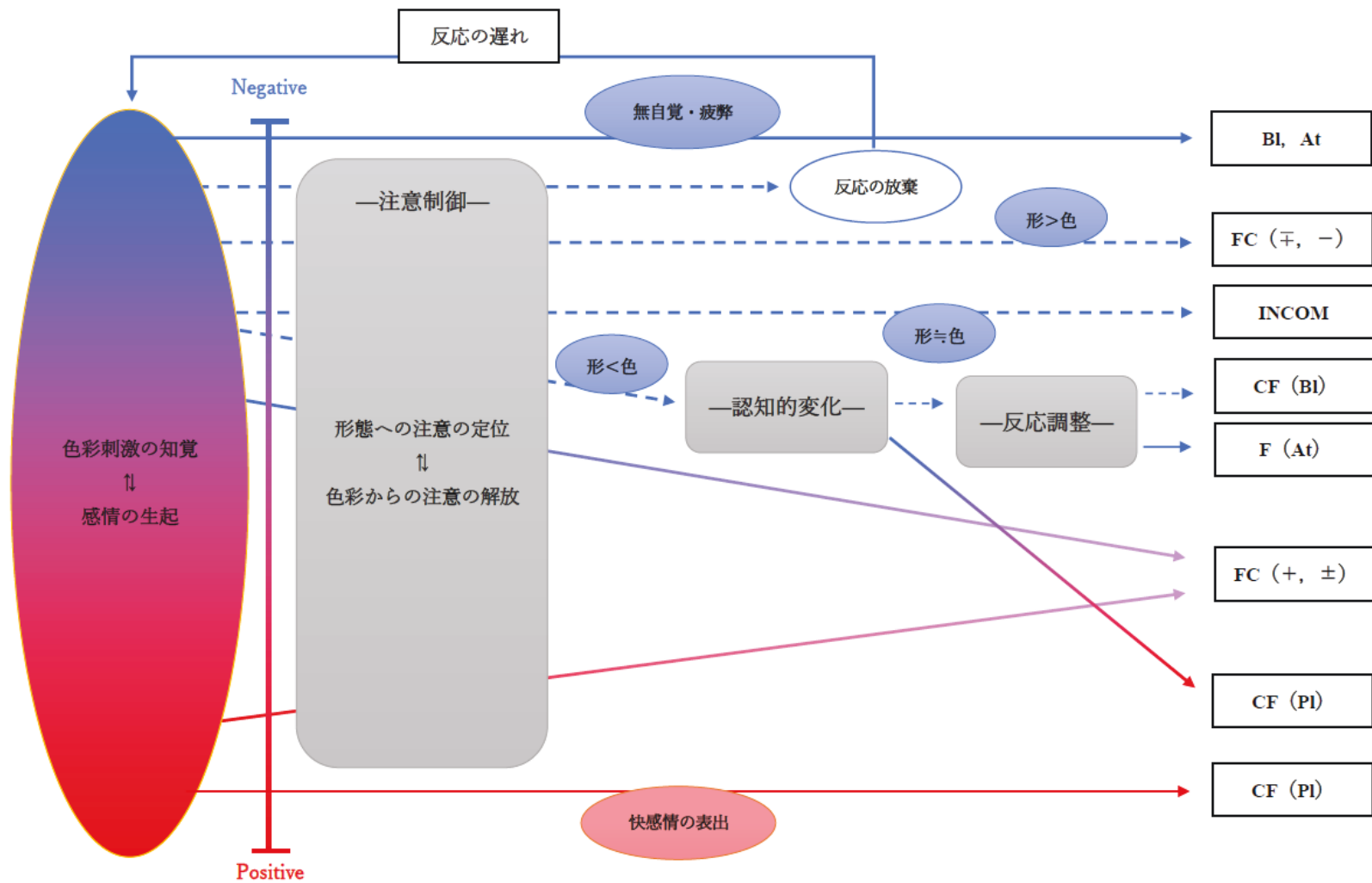


Figure 5-1. 色彩刺激の処理と感情制御のプロセスを示す本研究における仮説モデル。それぞれのプロセスにおける調整が成功している場合を実線、失敗している場合を破線で表示している。また、彩色は情動価を表す（赤：ポジティブ・青：ネガティブ）。

### 第3節 本論文における反応産出モデルと他のモデルとの比較

本節では、本論文から想定されるロールシャッハ反応産出過程における色彩と情動の処理について、Exner (2003 中村・野田訳 2009)、辻 (1997) の反応産出モデル、そして Gross (1998) の感情制御のプロセスモデルとの対応について検討し、本論文の示す反応産出過程に関するモデルの位置づけを考える。

他の反応産出モデルと同様に、本論文が示す反応産出モデルにおいても、インクブロット上の色彩の受動的な知覚から反応産出が開始される (Table 5-1)。色彩は被検者の様々な感情を刺激するが、生起する感情の種類や強さは色彩の種類や被検者によって異なる。また、ここで強く感情が喚起されることで、色彩から注意を逸らすことが困難となることが予想される (「色彩の知覚」)。

ここで受動的に知覚された色彩は、その後「注意制御」の過程を通じてコントロールされる。例えば、不快感情を刺激するような色彩から注意を解放し、他の領域や形態特徴に目を向けることで、色彩刺激に捉われることなく反応産出過程を進めることが可能である。辻 (1997) の示したモデルでは、インクブロット上の刺激特徴の違いとそれぞれがどのように体験されるのかが述べられており、色彩は受動的な体験を伴うのに対し、形態の知覚には十分な能動性を要するとされている (「感受」)。さらに続く過程において、インクブロット上の刺激特徴と長期記憶との照合が行われることが想定されているが (「比較・検討」)、本論文により得られた知見は、この間に注意制御の過程が介在していることを明らかにした。

一方で、「注意制御」の過程を経て処理しきれなかった刺激は、続く「認知的変化」の過程で調整される。この過程では被検者の不快感情を刺激する色彩の特徴について、その評価や見方を変容させることで衝撃を和らげたり、ポジティブな意味づけを行うといった認知的な処理が実行されることで、反応候補が模索される。

Table 5-1. 本論文によって呈示された反応産出過程のモデルと他のモデルの比較

本論文	色彩の知覚	注意制御	認知的変化	反応調整	反応
Exner <sup>1)</sup>	第1段階		第2段階	第3段階	反応
辻 <sup>2)</sup>	感受		比較・検討	選択・決定	反応
Gross <sup>3)</sup>	状況選択 状況修正	注意の方向 づけ	認知的変化	反応調整	行動表出

1) Exner (2003 中村・野田訳 2009) の反応産出モデル、2) 辻 (1997) の反応産出モデル、3) Gross (1998) の感情制御のプロセスモデル

さらに、このような認知的な調整を介して体験された感情は、最後の制御過程（「反応調整」）を経て表出される。すなわち、快、不快問わず、色彩に対して形態を積極的に取り入れたり、色彩を決定因から排する形で最終的な反応を行うことで、統制の不十分な感情反応の表面化を防いでいると考えられる。

以上のように、本論文における一連の結果から、色彩刺激の処理に着目した反応産出過程のモデルを呈示し、他のモデルとの比較を行った。本論文で着目した様々な感情制御の過程は Gross（1998）によるプロセスモデルを参考としたものであったが、その一方向的な過程はロールシャッハ反応の産出過程と類似するものであった。この類似性は、ロールシャッハ反応の産出過程における色彩刺激の処理、制御の過程が、被検者の情緒的な反応を示すとする色彩情動仮説を、間接的ではあるが支持するものであると言える。



## 第4節 今後の課題

本論文では感情制御のプロセスモデルに基づき、ロールシャッハ反応が産出される過程について検討を行ってきた。一方で、本論文を構成する研究からは明らかにしきれなかった点など、いくつかの課題を残している。

はじめに、色彩反応の産出過程についてはいくつかの知見が得られたが、各々の色彩反応や彩色図版上でのFの指標は有意な相関関係を示していないことから、その反応産出について十分な実証が行われたとは言えない。とりわけ、色彩反応の産出には刺激の知覚による感情の亢進の程度が反映されと考えられ、本研究で示したモデルとは異なるプロセスによる影響を大きく受けることが予想される。例えばうつ病患者は色彩反応が少ない傾向にあり(Mason et al., 1985)、アレキシサイミア傾向の高まりが色彩反応の減少やFの増加と関連する(Porcelli & Mihura, 2010)ことが示されているが、これらの研究で報告されている色彩反応の少なさには、外界の刺激に対する反応性の乏しさや自身の感情に対する気づきにくさが反映されていると考えられる。したがって、本論文で想定されたような情動刺激が知覚されることによって始まる一連のプロセスからは論じにくく、この点をより詳細に検討するには、反応産出時の神経活動を計測するなど研究方法の工夫が必要であると考えられる。

また、本論文ではGross (1998)によるプロセスモデルを参考としたロールシャッハ反応産出過程の検討、考察を行ったが、このモデルでは説明しきれない点もいくつか挙げられた。例えば、抑制方略の使用により色彩優位な反応が産出されないよう制御が行われており、これは感情表出の抑制がされているものとして解釈された。しかし抑制方略が続けて使用されるにつれ、被検者にはネガティブな感情が蓄積され得ることも同時に示された。すなわち、一連の反応産出を終えることでインクプロットの知覚過程まで認知処理は戻るが、次のプロセスは前の反応産出のプロセスの影響を多いに受ける。感情制御のプロセスモデルも、反応後に感情刺激場面へとプロセスが後退する循環性を想定しているが、その循環を繰り返すことによって生じる変化についての議論は乏しい。したがって感情状態による制御過程の変化といった多角的な視点に基づく感情制御のプロセスを想定することで、本論文の知見のさらなる発展が期待される。

最後に、本研究の結果は臨床実践から得られた解釈に実証的な知見を提供するものであったが、同時に、反応産出過程で生じる被検者の認知処理に関するモデルも呈示している。色彩刺激の処理と感情制御のプロセスに関する本研究のモデルについては今後、臨床実践やさらなる実証研究のなかで、妥当性の検討や精緻化が行われていくべきだろう。

## 文献

- Acklin, M. W., & Wu-Holt, P. (1996). Contributions of cognitive science to the Rorschach technique: cognitive and neuropsychological correlates of the response process. *Journal of Personality Assessment*, 67, 169-178.
- 秋谷 たつ子 (1966). 臨床心理学の探求——論文集 道程—— 星和書店
- Ales, F., Giromini, L., & Zennaro, A. (2019). Complexity and cognitive engagement in the Rorschach task: An eye-tracking study. *Journal of personality assessment*, 1-13.
- American Psychiatric Association. (1994). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (4th ed.). Washington, DC: Author.
- Ando, A., Pignolo, C., Viglione, D. J., Zennaro, A., Cristofanelli, S., & Ferro, L. (2019). Assessing the Personality Profile with ADHD Characteristics Using the Rorschach Performance Assessment System (R-PAS). *Journal of Child and Family Studies*, 28, 1196-1206.
- Asari, T., Konishi, S., Jimura, K., Chikazoe, J., Nakamura, N., & Miyashita, Y. (2010a). Amygdalar enlargement associated with unique perception. *Cortex*, 46, 94-99.
- Asari, T., Konishi, S., Jimura, K., Chikazoe, J., Nakamura, N., & Miyashita, Y. (2010b). Amygdalar modulation of frontotemporal connectivity during the inkblot test. *Psychiatry Research: Neuroimaging*, 182, 103-110.
- 馬場 禮子 (1999). 改定 ロールシャッハ法と精神分析——継起分析入門—— 岩崎学術出版社
- Bartell, S. S., & Solanto, M. V. (1995). Usefulness of the Rorschach inkblot test in assessment of attention deficit hyperactivity disorder. *Perceptual and Motor Skills*, 80, 531-541.
- Başgöze, Z., Gönül, A. S., Baskak, B., & Gökçay, D. (2015). Valence-based Word-Face Stroop task reveals differential emotional interference in patients with major depression. *Psychiatry research*, 229, 960-967.
- Beall, P. M., & Herbert, A. M. (2008). The face wins: Stronger automatic processing of affect in facial expressions than words in a modified Stroop task. *Cognition and Emotion*, 22, 1613-1642.
- Berant, E., Mikulincer, M., Shaver, P. R., & Segal, Y. (2005). Rorschach correlates of self-reported attachment dimensions: Dynamic manifestations of hyperactivating and deactivating strategies. *Journal of Personality Assessment*, 84, 70-81.
- Blais, M. A., & Hilsenroth, M. J. (1998). Rorschach correlates of the DSM-IV histrionic personality disorder. *Journal of Personality Assessment*, 70, 355-364.
- Bornstein, R. F. (2012). Rorschach score validation as a model for 21st-century personality assessment. *Journal of Personality Assessment*, 94, 26-38.

- Brosin, H. W., & Fromm, E. O. (1940). Rorschach and color blindness. *Rorschach Research Exchange*, 4, 39-70.
- Burla, F., Ferracuti, S., & Lazzari, R. (1997). Borderline personality disorder: Content and formal analysis of the Rorschach. *Rorschachiana*, 22, 149-162.
- De Carolis, A., & Ferracuti, S. (2005). Correlation between the Rorschach test coded and interpreted according to the Comprehensive Exner system and the Eysenck Personality Inventory. *Rorschachiana*, 27, 63-79.
- Charek, D. B., Meyer, G. J., & Mihura, J. L. (2016). The impact of an ego depletion manipulation on performance-based and self-report assessment measures. *Assessment*, 23, 637-649.
- Cinti, M. E., Lastretti, M., Pomilla, A., Pedata, L. T., & Burla, F. (2016). Impulsiveness and meta-representative functions of borderline patients with psychopathic conducts: An experimental study with the Rorschach test. *International Journal of Mental Health & Psychiatry*, 2(6), 1-7.
- Cotugno, A. J. (1995). Personality attributes of attention deficit hyperactivity disorder (ADHD) using the Rorschach inkblot test. *Journal of Clinical Psychology*, 51, 554-562.
- Dresler, T., Mériaux, K., Heekeren, H. R., & van der Meer, E. (2009). Emotional Stroop task: effect of word arousal and subject anxiety on emotional interference. *Psychological Research*, 73, 364-371.
- Etkin, A., Prater, K. E., Hoeff, F., Menon, V., & Schatzberg, A. F. (2010). Failure of anterior cingulate activation and connectivity with the amygdala during implicit regulation of emotional processing in generalized anxiety disorder. *American Journal of Psychiatry*, 167, 545-554.
- Exner, J. E. (1993) *The Rorschach, a Comprehensive System, Volume 1, Basic Foundations and principles of Interpretation* (3rd edition). New Jersey: John Wiley & Sons.
- Exner, J. E. (2003) *The Rorschach, a Comprehensive System, Volume 1, Basic Foundations and principles of Interpretation* (4th edition). New Jersey: John Wiley & Sons.
- (エクスナー, J. E. 中村 紀子・野田 昌道訳 (2009) ロールシャッハ・テスト 包括システムの基礎と解釈の原理 金剛出版)
- Eysenck, M. W. (1992). *Anxiety: The cognitive perspective*. Hove, England: Erlbaum.
- Frank, G. (1976). On the validity of hypotheses derived from the Rorschach: I. The relationship between color and affect. *Perceptual and Motor Skills*, 43, 411-427.
- Giromini, L., Viglione Jr, D. J., Zennaro, A., & Cauda, F. (2017). Neural activity during production of Rorschach responses: An fMRI study. *Psychiatry Research: Neuroimaging*, 262, 25-31.
- Goldfinger, D. A., Amdur, R. L., & Liberson, I. (1998). Rorschach patterns of response in Vietnam veterans with posttraumatic stress disorder versus combat and normal controls. *Depression and Anxiety*, 8, 104-111.

- Gross, J. J. (1998). The emerging field of emotion regulation: An integrative review. *Review of general psychology*, 2, 271-299.
- Gross, J. J. (2013). Emotion regulation: taking stock and moving forward. *Emotion*, 13, 359-365.
- Gross, J. J. (2014). Emotion regulation: conceptual and empirical foundations. Gross, J. J. (Ed.). *Handbook of emotion regulation (Second edition)*, 3-22. New York: Guilford Press.
- Gross, J. J., & Barrett, L. F. (2011). Emotion generation and emotion regulation: One or two depends on your point of view. *Emotion review*, 3, 8-16.
- Gross, J. J., & John, O. P. (2003). Individual differences in two emotion regulation processes: implications for affect, relationships, and well-being. *Journal of personality and social psychology*, 85, 348-362.
- Gross, J. J., & Levenson, R. W. (1997). Hiding feelings: the acute effects of inhibiting negative and positive emotion. *Journal of abnormal psychology*, 106, 95-103.
- Gross, J. J., & Thompson, R. A. (2007). Emotion regulation: Conceptual foundations. Gross, J. J. (Ed.). *Handbook of emotion regulation*, 3-24. New York: Guilford Press.
- Haas, B. W., Omura, K., Constable, R. T., & Canli, T. (2006). Interference produced by emotional conflict associated with anterior cingulate activation. *Cognitive, Affective, & Behavioral Neuroscience*, 6, 152-156.
- Hartmann, E., Wang, C. E., Berg, M., & Sæther, L. (2003). Depression and vulnerability as assessed by the Rorschach method. *Journal of Personality Assessment*, 81, 242-255.
- 兵働 邦彦・川崎 彰三・桑原 寛・小川 暢也 (1968). ロールシャッハ・テスト下における身体反応——とくに色彩ショックと脈波との関係について—— ロールシャッハ研究, 9/10, 45-56.
- 伊里 綾子・望月 聡 (2012). 感情喚起語からの注意解放におけるバイアスと抑うつ傾向の関連 感情心理学研究, 19, 81-89.
- Ishibashi, M., Uchiumi, C., Jung, M., Aizawa, N., Makita, K., Nakamura, Y., & Saito, D. N. (2016). Differences in brain hemodynamics in response to achromatic and chromatic cards of the Rorschach: A fMRI study. *Rorschachiana*, 37, 41-57.
- Jočić, D. D. (2005). Correlation of the Rorschach Method and the NEO PI-R Questionnaire. *Rorschachiana*, 27, 11-29.
- John, O. P., & Gross, J. J. (2004). Healthy and unhealthy emotion regulation: Personality processes, individual differences, and life span development. *Journal of personality*, 72, 1301-1334.
- Kaiser, D., Jacob, G. A., Domes, G., & Arntz, A. (2016). Attentional Bias for emotional stimuli in borderline personality disorder: a meta-analysis. *Psychopathology*, 49, 383-396.
- 片口 安史 (1987). 改訂版新心理診断法——ロールシャッハ・テストの解説と研究—— 金子書房

- Katz, J. M., & Ziffo, P. M. (1975). Cognitive Tempo as a Rorschach Color Variable. *Journal of personality assessment*, 39, 462-465.
- Klopfer, B., & Davidson, H. H. (1962). *The Rorschach technique: An introductory manual*. New York: Harcourt, Brace & World.  
(クロッパ, B.・デイビッドソン, H. H. 河合 隼雄訳 (1964) ロールシャッハ・テクニク入門 ダイアモンド社)
- Koole, S. L. (2009). The psychology of emotion regulation: An integrative review. *Cognition and emotion*, 23, 4-41.
- Kron, A., Cohen, A., Benziman, H., & Ben-Schakhar, G. (2009) What is it that color determinants determine? The relation between the Rorschach inkblot method and cognitive object-recognition processes. *Journal of Personality Assessment*, 91, 137-142.
- Lyons, M., Akamatsu, S., Kamachi, M., & Gyoba, J. (1998) Coding Facial Expressions with Gabor Wavelets. *Proceedings Third IEEE International Conference on Automatic Face and Gesture Recognition*. (Nara, Japan), 200-205.
- MacDonald, A. W., III, Cohen, J. D., Stenger, V. A., & Carter, C. S. (2000). Dissociating the role of the dorsolateral prefrontal and anterior cingulate cortex in cognitive control. *Science*, 288, 1835-1838.
- Malmgren, H. (1999). Colour shock-does it exist, and does it depend on colour? *Summary of lecture at the 16th International Congress of Rorschach and Projective methods*. (Amsterdam, Nederland)
- Malone, J. C., Stein, M. B., Slavin-Mulford, J., Bello, I., Sinclair, S. J., & Blais, M. A. (2013) Seeing red: Affect modulation and chromatic color responses on the Rorschach. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 77, 70-93.
- Mason, B. J., Cohen, J. B., & Exner Jr, J. E. (1985). Schizophrenic, depressive, and nonpatient personality organizations described by Rorschach factor structures. *Journal of Personality Assessment*, 49, 295-305.
- Mathews, A., & MacLeod, C. (1985) Selective processing of threat cues in anxiety states. *Behaviour research and therapy*, 23, 563-569.
- 松田 凌 (2018). ロールシャッハ・テストの色彩反応と情動刺激によるストループ干渉の関連 ロールシャッハ法研究 22, 42-53.
- 松田 凌・馬場 史津 (2017). ロールシャッハ反応産出過程における認知的制御の役割——情動ストループ課題を用いた検討—— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 17, 53-61.
- Meyer, B. T. (1951) An investigation of color shock in the Rorschach test. *Journal of clinical psychology*, 7, 367-370.



- Meyer, G. J., Viglione, D. J., Mihura, J. L., Erard, R. E., & Erdberg, P. (2011). *Rorschach Performance Assessment System: Administration, coding, interpretation, and technical manual*. LLC.
- (メイヤー, G. J.・ビグリオン, D. J.・ミウラ, J. L.・エラード, R. E.・エルドバーグ, P. 高橋 依子(監訳) 高橋 真理子(訳) (2014) ロールシャッハ・アセスメントシステム 金剛出版)
- Mihura, J. L., Meyer, G. J., Dumitrascu, N., & Bombel, G. (2013). The validity of individual Rorschach variables: Systematic reviews and meta-analyses of the comprehensive system. *Psychological bulletin*, 139, 548-605.
- 森田 美弥子 (2010). 序章 森田 美弥子・高橋 靖恵・高橋 昇・杉村 和美・中原 睦美 実践ロールシャッハ法 思考・言語カテゴリーの臨床的適用 (pp. 1-8) ナカニシヤ出版
- 本井 久美子 (1972). ロールシャッハ・テストにおける色彩刺激の効果に関する研究 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 12, 63-75.
- 名古屋ロールシャッハ研究会 (編) (2018). ロールシャッハ法解説——名古屋大学式技法—— 金子書房
- 中村 有吾・内海 千種・相澤 直樹・石橋 正浩・岩切 昌宏 (2008). ロールシャッハ検査法の反応過程に関する考察——認知心理学・脳科学的知見を加えて—— 発達人間学論叢, 12, 45-52.
- 野口 素子・吉川 左紀子 (2009). 表情表出の抑制・誇張が主観的情動経験に及ぼす影響 感情心理学研究, 17, 12-18.
- 沼 初枝 (2015). 気分障害を対象としたロールシャッハ・テストの臨床指標に関する研究 立正大学心理学研究年報, 6, 111-123.
- Ochsner, K. N., & Gross, J. J. (2008). Cognitive emotion regulation: Insights from social cognitive and affective neuroscience. *Current directions in psychological science*, 17, 153-158.
- 小川 俊樹 (1992). わが国における臨床心理検査の現状とその目次比較 筑波大学心理学研究, 14, 151-158.
- 小川 俊樹 (2011). 「心理臨床に必要な心理査定教育に関する調査研究」報告 日本臨床心理士養成 大学院協議会報, 13
- 生塩 詞子 (2002). 色彩反応の情緒指標としての有効性について ロールシャッハ法研究, 6, 1-11.
- Petot, J. M. (2005). Are the Relationships Between NEO PI-R and Rorschach Markers of Openness to Experience Dependent on the Patient's Test-Taking Attitude? *Rorschachiana*, 27, 30-50.
- Piotrowski, Z. A. (1957). *Perceptanalysis; a fundamentally reworked, expanded, and systematized Rorschach method*. Oxford, England: Macmillan.
- (ピオトロフスキー, Z. A. 上芝 功博訳 (1980) 知覚分析——ロールシャッハ法の体系的展開—— 新曜社)



- Porcelli, P., & Mihura, J. L. (2010). Assessment of alexithymia with the Rorschach comprehensive system: The Rorschach Alexithymia Scale (RAS). *Journal of Personality Assessment*, 92, 128-136.
- Rapaport, D., Gill, M. M., & Schafer, R. (1968). *Diagnostic psychological testing*. New York: International Universities Press. 268-463.
- Richards, J. M., & Gross, J. J. (2000). Emotion regulation and memory: the cognitive costs of keeping one's cool. *Journal of personality and social psychology*, 79, 410-424.
- Rorschach, H. (1921). *Psychodiagnostik*. Bern: Hans Huber.  
(ロールシャッハ, H. 鈴木 睦夫訳 (1998) 新・完訳 精神診断学——付 形態解釈実験の活用—— 金子書房)
- 榊原 良太 (2014). 再評価の感情制御効果と精神的健康への影響 感情心理学研究, 22, 40-49.
- Schachtel, E. G. (1966). *Experiential Foundations of Rorschach's Test*. Oxford, England: Basic Books.  
(シャハテル, E. G. 空井 健三・上芝 功博訳 (1975) ロールシャッハ・テストの体験的基礎 みすず書房)
- Shapiro, D. (1956). A Perceptual Understanding of Color Response. In Rickers Ovsiankina, M. A. (Eds.), *Rorschach Psychology*. New York: John Wiley & Sons, Inc.  
(シャピロ, D. 田澤 安弘訳 (2005) ロールシャッハ色彩論 大学教育出版)
- Siipola, E., & Taylor, V. (1952). Reactions to ink blots under free and pressure conditions. *Journal of Personality*, 21, 22-47.
- Singer, H. K., & Brabender, V. (1993). The use of the Rorschach to differentiate unipolar and bipolar disorders. *Journal of Personality Assessment*, 60, 333-345.
- Smith, S. R., Gorske, T. T., Wiggins, C., & Little, J. A. (2010). Personality assessment use by clinical neuropsychologists. *International Journal of testing*, 10, 6-20.
- Solomon, R. C. (2008). The Philosophy of Emotions. Lewis, M., Haviland-Jones, J. M., & Barrett, L. F. (Eds.). *Handbook of emotions (Third edition)*, 3-16. New York: Guilford Press.
- Song, Y., & Hakoda, Y. (2011). An asymmetric Stroop/reverse Stroop interference phenomenon in ADHD. *Journal of attention disorders*, 15, 499-505.
- Stevens, D. T., Edwards, K. J., Hunter, W. F., & Bridgman, L. (1993). An investigation of the color-affect hypothesis in Exner's comprehensive system. *Perceptual and motor skills*, 77, 1347-1360.
- Strand, M., Oram, M. W., & Hammar, Å. (2013). Emotional information processing in major depression remission and partial remission: faces come first. *Applied Neuropsychology: Adult*, 20, 110-119.

- 鈴木 千晴 (2014). ロールシャッハ・テストの色彩情動仮説と認知の個人差に関する実証研究の文献的検討 人間文化研究科年報, 29, 89-100.
- 鈴木 千晴 (2016a). ロールシャッハ・テストの色彩反応と Go/ No go 課題中の事象関連電位 ロールシャッハ法研究, 20, 5-18.
- 鈴木 千晴 (2016b). ロールシャッハ・テスト図版における赤色が情動に及ぼす影響の検討 人間文化研究科年報, 31, 71-82.
- 高橋 雅春・高橋 依子・西尾 博行 (2009). ロールシャッハ・テスト形態水準表 金剛出版
- 辻 悟 (1997). ロールシャッハ検査法——形式・構造解析に基づく解釈の理論と実際—— 金子書房
- 安田 傑 (2014). ロールシャッハ法における色彩反応のキーワード調査の追加分析——図版と色彩の種類の観点から—— 関西学院大学心理科学研究, 40, 1-6.
- 安田 傑 (2016). 色・形問題の2次元斜交モデルに基づくロールシャッハ色彩反応の検討 こみゅにか, 10, 1-16.
- 吉津 潤・関口 理久子・雨宮 俊彦 (2013). 感情調節尺度 (Emotion Regulation Questionnaire) 日本語版の作成 感情心理学研究, 20, 56-62.
- Zodan, J., Charnas, J., & Hilsenroth, M. J. (2009) Rorschach assessment of reality testing, affect and object representation of borderline pathology: A comparison of clinical samples. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 73, 121-142.

## 謝辞

本論文を作成するあたり、中京大学心理学部教授の馬場史津先生には本当にお世話になりました。私が学部生の頃より7年間に渡り、指導教員として研究指導をして頂きました。研究に関する意見の衝突は幾度となくありました。それでも私のためを思い、突き放すことなく熱心に指導して下さいました。そのおかげでこうして、これまでの集大成となる論文を執筆することができました。改めて感謝申し上げます。

いくつもの激流に翻弄される大学院生活でした。その間、馬場先生をはじめ、臨床心理学領域の坂井誠先生、永田法子先生、神谷栄治先生、明翫光宜先生、山本竜也先生には、研究以外の面においても多大なサポートをしていただきました。大変ご心配もおかけしたと思います。皆様の励ましがあり、こうして博士論文提出まで漕ぎ着くことができました。

最後に、研究協力者の皆様に感謝申し上げます。私の研究、そしてロールシャッハ・テストに興味を持って参加して下さいたこと、本当に嬉しく思います。ありがとう。